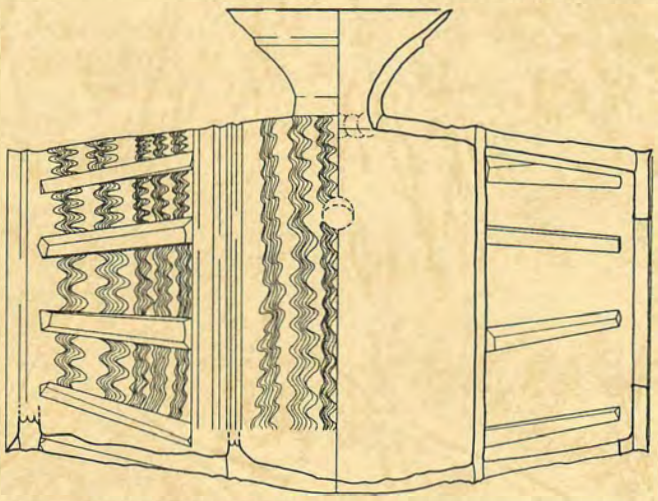
熊本県文化財調査報告書 第149集

Kamadoterabaru

竈門寺原遺跡



1995

熊本県教育委員会

遺 跡 遠 景

遺跡空中写真（３号墳）

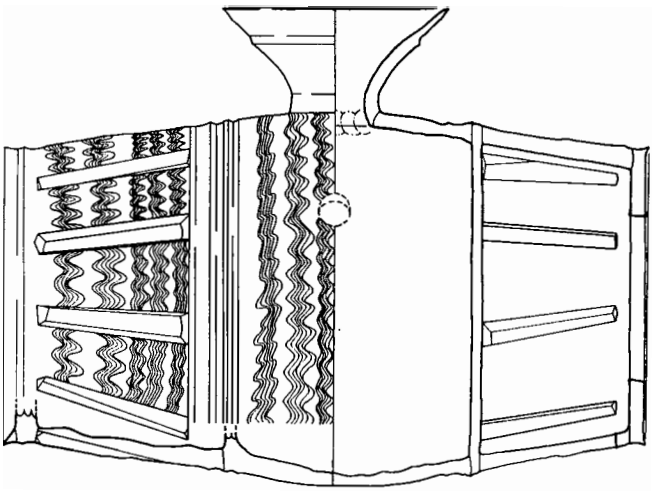
1号墳出土須恵器

熊本県文化財調査報告書 第149集

Kamadoterabaru

竈門寺原遺跡

熊本県玉名郡菊水町大字竈門所在



1995

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県教育委員会では、菊水町大字竈門の県営畑地帯総合土地改良事業（竈門地区）に先行して圃場整備予定地内の埋蔵文化財の発掘調査を進めてまいりました。

ここに報告する竈門寺原遺跡は、熊本県玉名郡菊水町竈門字寺原に所在し、縄文時代後期から古墳時代中期までの複合遺跡であります。この遺跡は、平成３年度から平成４年度にかけて発掘調査を実施し、平成６年度に報告書作成を行ったものであります。

この遺跡は、この地方の水運の要として発達してきた菊池川流域に位置しております。このような環境に位置し、多くの文物の交流がなされてきました。

この発掘調査の結果、全国でも数少ない初期段階の須恵器が出土しているのをはじめ、弥生時代中期の良好な墓域も確認できました。

この報告書が、埋蔵文化財の保護に対する認識を深め、学術・研究上の一助となり、また熊本県の歴史を学ぶ中で多くの方々に利用されれば幸いです。

最後に調査の円滑な実施に御理解と御協力を頂いた地元の方々、並びに関係機関、そして調査に対する指導、助言を頂いた諸先生方に対して厚くお礼申し上げます。

平成７年３月31日

熊本県教育長

東坂　　力

例　　言

1　本書は1993年11月～1994年５月にかけて実施した、熊本県玉名郡菊水町大字竈門字寺原に所在する竈門寺原遺跡の発掘調査報告書であり、熊本県文化財調査報告書第149集である。

2　調査は、県営圃場整備事業（菊水町竈門地区）に伴う緊急調査として事業の事前に実施した。

3　調査は熊本県農政部の依頼を受け、熊本県文化課が国庫補助を受け実施した。

4　整理・報告は平成６年度（1994年）に行った。

5　出土遺物は、熊本県文化財収蔵庫（熊本市渡鹿３丁目15-12）に搬入して整理作業を行った。

6　発掘現場での実測及び写真撮影は調査員で行った。

7　遺物の実測は主に長谷部善一、福田信子、米倉五月、勝田智子、吉永恵実子、早野弘子で行った。また、遺構製図及び遺物製図は福田、丹生英理、日置正香が行った。
グラビア撮影、遺物写真撮影は福田が行った。

8　本書に用いた高度は標高を示し、方位は磁北で示した。

9　出土玉類の原産地同定は奈良国立文化財研究所飛鳥藤原研究所肥塚隆保氏に依頼した。

10　遺物観察表は主に長谷部、福田が作成し、福田が編集した。

11　写真図版に掲載した遺物の縮尺はまちまちであり実測図を参照されたい。
本書の執筆は第１章を島津義昭、第２章・第２節（土器）、第３節を福田が行い、ほかは長谷部が行った。

12　遺物観察表は長谷部、福田があたり福田が編集した。

13　本書の編集は長谷部、福田があたり、校正は福田が主にあたった。

14　出土遺物は、熊本県文化財収蔵庫に保管している。

凡　　例

1　本書に使用した方位とグリッドは現地で任意に磁北に設定した。

2　挿図の遺物の縮尺は土器は基本的に1/3であり、石器は1/2に統一した。

3　図版に掲載した遺物の縮尺は、統一していない。

本 文 目 次

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯 …… 1

第２節　調査の進捗 …… 1

第３節　調査及び整理の組織 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の環境 …… 3
⑴ 地理的環境 …… 3
⑵ 歴史的環境 …… 3

第２節　遺跡の概要 …… 9

第Ⅲ章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法 …… 10

第２節　調査の経過 …… 10

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　先土器時代の遺物 …… 13

第２節　縄文時代の遺構と遺物 …… 15
⑴ 遺構 …… 15
⑵ 出土遺物 …… 15

第３節　弥生時代の遺構と遺物 …… 32
⑴ 甕棺墓 …… 32
⑵ 住居跡 …… 34

第４節　古墳時代の遺構と遺物 …… 49
⑴ １号墳 …… 49
⑵ ２号墳 …… 52
⑶ ３号墳 …… 53

第Ⅴ章　自然科学的分析

竈門寺原遺跡１号墳出土の玉類の分析 …… 64

第Ⅵ章　まとめ …… 70

写真図版 …… 75

挿図目次

第１図　遺跡周辺地形図（事業前）……4
第２図　遺跡周辺地形図（事業後）……5
第３図　竈門寺原遺跡周辺遺跡地図……6
第４図　遺構配置図（Ａ区）……12
第５図　石器実測図……14
第６図　１・２・３号土坑実測図……16
第７図　４・５・６号土坑実測図……17
第８図　土器実測図(1)……19
第９図　土器実測図(2)……20
第10図　石器実測図(1)……23
第11図　石器実測図(2)……24
第12図　石器実測図(3)……25
第13図　石器実測図(4)……26
第14図　石器実測図(5)……27
第15図　石器実測図(6)
第16図　石器実測図(7)……29
第17図　１号住居跡実測図……35
第18図　１～８号甕棺墓実測図……36
第19図　９～16号甕棺墓実測図……37
第20図　甕棺実測図(1)……38
第21図　甕棺実測図(2)……39
第22図　甕棺実測図(3)……40
第23図　甕棺実測図(4)……41
第24図　甕棺実測図(5)……42
第25図　弥生土器実測図……45
第26図　１号墳遺物出土状況……54
第27図　１号墳出体部平面実測図（Ａ区）……55
第28図　１号墳出土須恵器実測図……56
第29図　１号墳出土土師器実測図……57
第30図　１号墳出土ガラス小玉実測図……58
第31図　１号墳出土鉄器実測図……58
第32図　１号墳主体部石材実測図……59
第33図　２号墳位置図……60
第34図　２号墳主体部実測図及び出土遺物（Ｄ区）……61
第35図　３号墳平面及び土層断面実測図……62
第36図　１号石棺実測図（Ｂ区）……63

表目次

第１表　竈門寺原遺跡周辺遺跡地名表 …… 7
第２表　石器計測表 …… 13
第３表　石器計測表 …… 30
第４表　甕棺観察表 …… 43
第５表　弥生土器観察表 …… 46
第６表　横口式家形石棺（妻入）地名表 …… 52
第７表　樽形瓮出土地名表 …… 53

写真目次

ＰＬ１　１・２・３号甕棺検出状況 …… 77
ＰＬ２　４・５号甕棺検出状況 …… 78
ＰＬ３　６・７号甕棺検出状況 …… 79
ＰＬ４　８号甕棺検出状況 …… 80
ＰＬ５　９・12号甕棺検出状況 …… 81
ＰＬ６　13号甕棺検出状況・１号墳完掘状況 …… 82
ＰＬ７　１号墳・２号墳完掘状況 …… 83
ＰＬ８　Ａ区１号住居跡遺物出土状況及び出土遺物 …… 84
ＰＬ９　先土器時代の遺物・北久根山式土器 …… 85
ＰＬ10　縄文時代後期の土器 …… 86
ＰＬ11　縄文時代後期の土器 …… 87
ＰＬ12　縄文時代後期～晩期の土器 …… 88
ＰＬ13　縄文時代の石器 …… 89
ＰＬ14　縄文時代の石器 …… 90
ＰＬ15　１～６号甕棺 …… 91
ＰＬ16　８・９・11・12・13・15号甕棺 …… 92
ＰＬ17　８号甕棺（上）・15号甕棺（上） …… 93
ＰＬ18　１号墳出土土師器 …… 94
ＰＬ19　１号墳出土土師器・須恵器 …… 95

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

平成４年度、菊水町竈門地区に県営圃場整備事業が計画された。この地帯は菊池川の左岸、河岸段丘上に相当し、従来から大字竈門字寺原地区を中心に「竈門遺跡」が存在する事は知られていたが、遺跡がどの程度の広がりを持つかは不明であったので、本格的な発掘調査に先立ち包含層の深さや遺跡の範囲を知るための確認調査を実施した。

確認調査の結果、Ａ・Ｂ・Ｃの３調査区に包含層が確認されたが、調査の過程で３地区の他に円墳が発見されたのでＤ地区とした。

第２節　調査の進捗

発掘調査は平成４年10月から平成５年５月まで行った。調査の進捗の詳細は次章に述べるが、各調査区の概要を述べる。

⑴ Ａ区

甕棺16基、円墳１基、住居跡等を検出した。甕棺は弥生中期の黒髪式が中心である。住居跡も同時期である。甕棺は、後世の撹乱を受け破片がかなりの数点存在していた。

８号甕棺及び15号甕棺の内部からは人骨の破片が出土した。円墳は直径約13.5mで主体部は凝灰岩の家型石棺で大幅な破壊を受けていた。

その他、縄文後期～晩期の土器が出土した土壙がある。

⑵ Ｂ区

凝灰岩の石棺１基が検出された。１号石棺は蓋石が破壊されていたがもう１基は石棺とは確認されなかった。

⑶ Ｃ区

直径33mの円墳が１基検出された。墳丘は削平されており周溝のみが検出された。その他、縄文土器が数十点出土した。

⑷ Ｄ区

直径19.5mの円墳が検出された。大規模な破壊を受けていたが主体部より遺物が出土した。

第３節　調査及び整理の組織

遺物の整理及び報告書の作成は平成６年度、熊本県文化財収蔵庫で行った。発掘調査及び報告書作成の担当者は以下のとおりである。

発掘調査責任者	前文化課長	大塚　正信
	元教育審議員	隈　昭志
	前教育審議員	平野　芳久
発掘調査総括	主幹	島津　義昭
試掘担当	文化財保護主事	木崎　康弘
発掘調査担当	文化財保護主事	濱田　彰久
	（平成４年10月～平成５年３月）	
	学芸員	長谷部善一
	（平成５年４月～平成５年５月）	
	嘱託	吉田　正一
	嘱託	北原美和子
発掘作業	西村満州生	江上チヨ子
	坂井　夏子	坂井シズノ
	坂本ヨシ子	中野　和子
	坂口シゲ子	坂口喜代子
	坂本　良子	高村千代子
	中嶋モリ子	高木　陽子
	高木　秀昭	菊地　深美
	高見　邦秦	福山　春子
	野上　尚子	塩山　俊宏
発掘調査事務担当	主幹・経理係長	木下　英治
	参事	中村　宏
	参事	高浜　保子

整理作業責任者	文化課長	桑山　裕好
	課長補佐	白井　哲哉
	課長補佐	丸山　秀人
整理作業総括	主幹	島津　昭義
報告書作成	学芸員	長谷部善一
	嘱託	福田　信子
整理作業	米倉　五月	勝田　智子
	早野　弘子	吉永恵美子
専門調査員	熊本大学助教授 （現熊本大学教授）	甲元　眞之

調査指導・助言及び協力者（順不同、敬称略）

西谷　正（九州大学文学部教授）
酒井　清二（埼玉県埋蔵文化財センター）
下村　智（福岡市教育委員会）
高木　恭二（宇土市教育委員会）
勢田　廣行（荒尾市教育委員会）
清田　純一（城南町教育委員会）
浦田　信智（西合志町教育委員会）
中原　幹夫（植木町教育委員会）
益永　浩二（菊水町教育委員会）

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の環境

⑴ 地理的環境

遺跡の存在する台地は、菊池川によって形作られた河岸段丘上に位置している。この地は、南北に広がる平坦面を呈しており赤穂原台地と呼ばれ竈門地区、下津原地区に広がっている。今回調査した竈門遺跡はその一部に含まれる。この地は、もともと平坦部の多い地形であったため、戦時中は飛行場として利用されていたこともある。

台地の縁辺部は、菊池川の氾濫による浸食により、浅く抉り取られたりした地が見られ、大きく蛇行している部分もある。この菊池川は阿蘇外輪山に源を発し流路延長61.2㎞、流域面積996㎢、支流65を数える１級河川である。この川は上流部より緩やかに蛇行しながら西へ流れ、山鹿・菊水地区で大きく湾曲し南側へ流れている。この地では、緩く小さな地に氾濫源が存在しその段丘上に、現在まで人々の営みが見られている。遺跡の存在する段丘上のすぐ下の地は現在でも水分が多く畑地、水田に適しない所であり、洪水時の氾濫源として現在に至っている。台地の縁辺には小さな湾状の地形が見られる。現在、築かれている堤防が作られる以前はこの様な地形であるため、川面が遺跡のすぐ近くまで来ていたと思われる。

遺跡のすぐ東側は、台地の緩やかな斜面が広がっている。高い山は無いが標高約60ｍ前後の平坦地が存在している。

⑵ 歴史的環境

この菊池川流域全体を見渡した場合、先土器時代から現代まで多くの様々な遺跡が残されている。

今回は、そのなかでも山鹿・菊水地区に中心をおいて遺跡の分布状況、遺跡内容等を時代ごとに述べてみる。

先土器時代

先土器時代の遺物は剥片尖頭器が出土している菊水町下津原遺跡、ナイフ形石器・台形石器が採集されている中原遺跡、片刃の礫器が採集されている高塚遺跡などがある。この地域は大きく見ると、菊池川中流域に当たり支流部も含め多数の遺跡が発見されている。この時代の遺跡は上流部では多く確認されていたが近年、中流域での確認例が増えている。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、菊水町でも数多くの遺跡が報告されている。清原台地ほか、現在、古墳が多く確認されているが、古墳が築造される以前は先土器時代から人々が生活した地である。菊池川沿いに若園貝塚がある。この遺跡は縄文時代中期から後期にかけて形成されている。さらに、清原遺跡には縄文時代後期を主体とする遺跡があり、松坂原遺跡では縄文時代後期から晩期初頭の鐘ケ崎式・西平式・三万田式・御領式の各遺物が確認されている。この３遺跡はいずれも形成時期に連続性があり生活の場の移り変わりが見られる。諏訪原遺跡でも縄文時代の遺物が確認されている。時期は縄文早期・前期・後期のものが確認されている。しかし、いずれも少数であるため全体像は資料の増加を待ちたい。

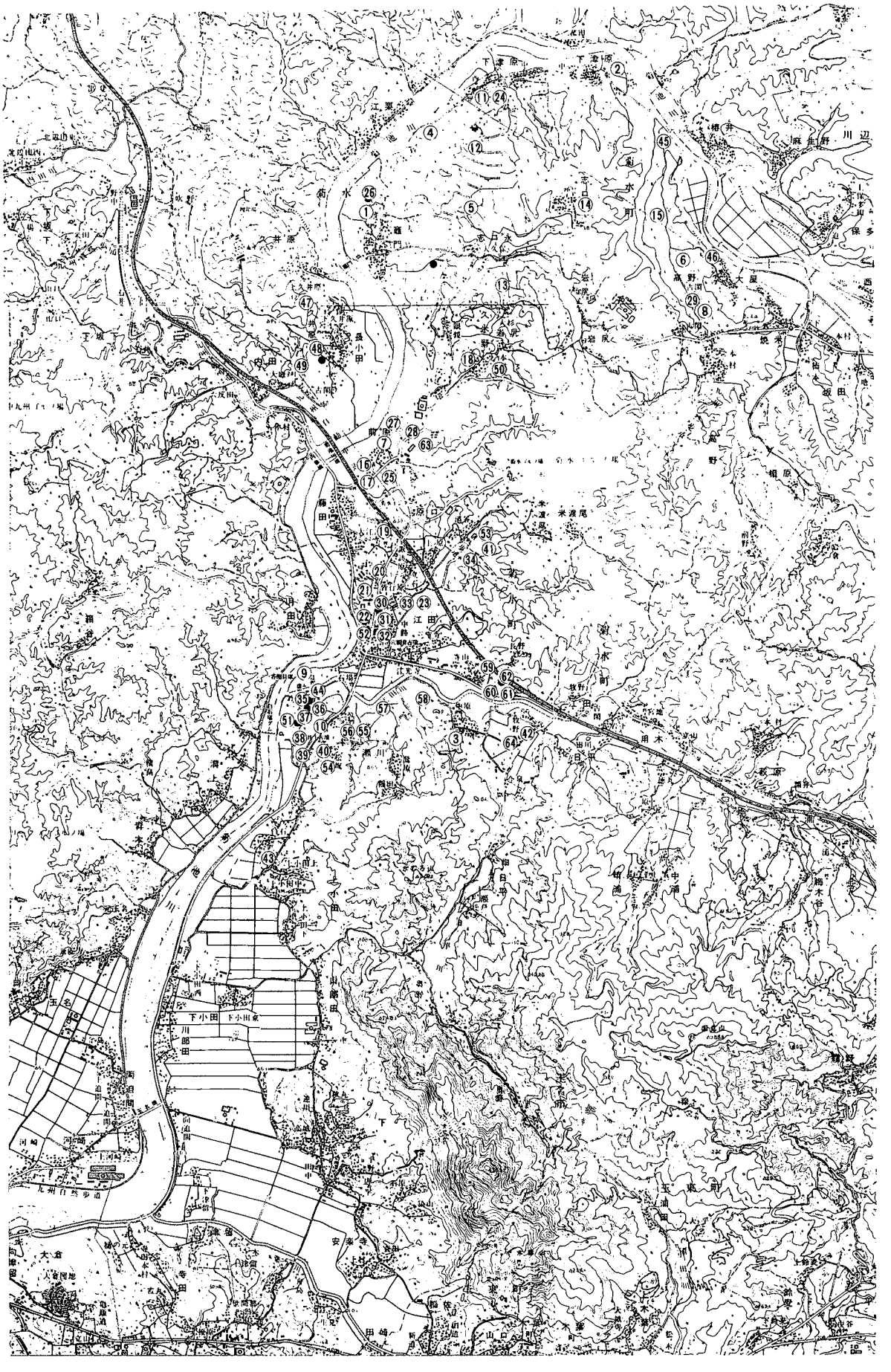
赤穂原遺跡では縄文時代後期から晩期の遺物が確認されている。この地は古くから平坦地であり大規模な集落を営むのに適した場所として利用されていたと思われる。この遺跡からやや上流地域にあたる下津原地区では古閑原台地を中心に古閑原遺跡が広がっており縄文時代後期から晩期にあたる遺物が確認されている。菊水町で行われていた遺跡の重要遺跡確認調査等で多くの報告がされているが縄文後・晩期及び弥生時代・古墳時代の遺物は多く確認されているが縄文時代早期・前期の遺物は希薄である。今後の調査例が増加し確認されることがある可能性が高い。

弥生時代

この地での弥生時代の遺跡は代表的なものとして

第１図　　遺跡周辺地形図(事業前)

第２図　　遺跡周辺地形図(事業後)



第３図　　竈門寺原遺跡周辺遺跡地図

第１表　　竈門寺原遺跡周辺遺跡地名表

先－先土器　　縄－縄文（早－早期　前－前期　中－中期　後－後期　晩－晩期）
弥－弥生　古－古墳　奈－奈良　中－中世

番号	遺　跡　名	所　在　地	種別	時　代	備　考
1	竈門寺原遺跡	菊水町竈門寺原	包含地	縄（後・晩）弥・古	初期須恵器
2	東別当塚遺跡	〃　下津原、東	〃	先・縄・弥	
3	西中原遺跡	〃　瀬川、中原	〃	弥	マイクロコア・ナイフ
4	西山田遺跡	〃　下津原、西	〃	縄（早・前・晩）	
5	志口永赤穂原遺跡	〃　志口永、大久保	〃	縄	
6	高野古閑奥原遺跡	〃　高野、古閑	〃	縄・弥	
7	前原東安寺遺跡	〃　前原	〃	弥	中期甕棺
8	高野古閑遺跡	〃　高野字古閑	〃	縄（後）・弥（後）	
9	若園貝塚	〃　江田、馬場	貝　塚	縄（中・後）	
10	清原遺跡	〃　江田、清原	包含地	縄（後）弥生（後）	
11	下津原西甕棺遺跡	〃　下津原、西	甕棺墓	弥（中）	
12	下津原赤穂原遺跡	〃　〃　〃	包含地	弥（後・中）	
13	岩尻大杉遺跡	〃　岩尻、大杉	〃	弥	
14	志口永本村遺跡	〃　志口永、本村	〃	弥（後）	
15	高野古閑上原遺跡	〃　高野、古閑上原	〃	弥・古	
16	前原西原遺跡	〃　前原、西原	〃	弥（中）	甕　棺
17	前原甕棺遺跡	〃　前原、宮田	甕　棺	弥（中）	〃
18	久米野奥原遺跡	〃　久米野、奥原	包含地	弥（後）	
19	前原長溝甕棺群	〃　前原、長溝	甕　棺	弥（後）	
20	諏訪原遺跡	〃　江田、諏訪原	包含地	弥・古	
21	札木甕棺群	〃　江田、皆行原	甕　棺	弥（中）	
22	馬場堂ノ上甕棺群	〃　江田、馬場	〃	弥（後）	
23	立石島崎甕棺群	〃　原口、立石	〃	弥（中・後）	
24	下津原西葉山塚 箱式石棺群	〃　下津原、 西堂の上	箱　式 石棺墓	古	
25	前原長溝石棺群	〃　前原、長溝	〃	弥（中）	
26	竈門寺原箱式石棺	〃　竈門、寺原	〃	古	箱式石棺
27	前原石棺群	〃　〃　天御子	〃	古	
28	天御子古墳	〃　〃　〃	〃	古	
29	高野古閑古墳	〃　高野、古閑	古　墳	古	円墳、箱式石棺
30	若宮古墳	〃　江田、中道	〃	古	前方後円墳
31	若宮舟形石棺	〃　江田、中小路	石棺墓	古	

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	備考
32	江田穴観音古墳	菊水町江田中小路	古墳	古	円墳、横穴式 勾玉、金環
33	天神平石棺墓	〃 〃 皆行原	石棺墓	古	
34	土喰箱式石棺群	〃 〃 土喰	〃	古	鉄鏃
35	京塚古墳	〃 〃 清原	古墳	古	清原舟形石棺を含む
36	江田船山古墳	〃 〃 〃	〃	古	前方後円墳
37	虚空蔵塚古墳	〃 〃 〃	〃	古	〃
38	塚坊主古墳	〃 〃 〃	〃	古	〃
39	清水原家形石棺	〃 瀬川、白石	石棺墓	古	
40	姫塚古墳	〃 〃 〃	古墳	古	土師器
41	土喰古墳	〃 江田、土喰	〃	古	
42	中原北池の本石棺墓	〃 瀬川、中原	〃	古	家形石棺
43	椿山古墳	〃 〃 白石	古墳	古	前方後円墳
44	清原石人遺跡	〃 江田、清原		古	石人、石製品
45	下津原東三瀬横穴群	〃 下津原、東	横穴	古	
46	大屋横穴群	〃 大屋	〃	古	
47	久井原高野横穴群	〃 久井原、高野	〃	古	
48	内田古閑横穴群	〃 内田、古閑	〃	古	
49	内田深田浦横穴群	〃 〃 深田浦	〃	古	
50	久米野千が谷横穴群	〃 久米野千が谷	〃	古	
51	皆行原狸が浦横穴	〃 江田、皆行原	〃	古	
52	いご浦横穴	〃 〃 氏無	〃	古	
53	浦谷とんご山横穴群	〃 原口、浦谷	〃	古	
54	松坂横穴	〃 瀬川、白石	〃	古	
55	長力横穴	〃 〃 長力	〃	古	装飾古墳
56	北原横穴群	〃 〃 北原	〃	古	
57	うぐいす原入口横穴	〃 〃 うぐいす原	〃	古	
58	中原ボーシ下横穴	〃 〃 中原	〃	古	
59	寺山宮の東横穴	〃 江田、寺山	〃	古	
60	寺山小原坂横穴	〃 〃 〃	〃	古	
61	牧野横穴	〃 〃 牧野	〃	古	須恵器
62	寺山小原遺跡	〃 江田、寺山	〃	弥	
63	牟田遺跡	〃 かまど、天御子	包蔵地	古	
64	中原西遺跡	〃 瀬川、中原	〃	弥	

諏訪原遺跡があげられる。ここでは九州縦貫自動車道の工事の際、環溝集落が確認され発掘調査が行われている。弥生時代後期のものである。川沿地区についても久米奥野遺跡が存在し、弥生時代後期の土器が確認されている。竈門地区よりやや下流に位置する清原台地でも縄文時代から連綿と人々の営みがおこなわれており弥生時代も同様に人々の生活の痕跡が認められる。この時期の遺跡は菊池川を望む丘陵上に分布している。

古墳時代

この時代は、江田船山古墳に代表される前方後円墳が築かれさらに、この地方に多く見られる装飾古墳が作られた時期でもある。江田船山古墳を中心とする清原台地に存在する京塚古墳・虚空蔵塚古墳・塚坊主古墳等の古墳群や、諏訪原台地にある若宮古墳（円墳）や江田穴観音古墳など多く見られる。この地方の岩盤である凝灰石をくり抜いて崖面に作られた横穴墓など台地の縁辺部に多数作られている。

しかし、この時代の集落は今のところ、ほとんど確認されておらず今後の調査に期待したい。

歴史時代

清原台地の東方に続く鶯原台地から銅板墓誌が蔵骨器と共に出土している。地方豪族の日置氏のものと思われ県内では銘文の残る唯一の墓誌である。

この日置氏は菊池川流域の水運を支配していたと考えられている。

第２節　遺跡の概要

遺跡は、熊本県玉名郡菊水町大字竈門字寺原に所在する。菊池川の中流域にあり河岸段丘上に立地する。この地は、背後に赤穂原台地からのびる丘陵の先端部に接している。この赤穂原台地は台地の起伏が少なく、畑地帯として現代に至っている。しかし、戦時中はこの起伏の少ない地を利用し飛行場が設けられた時もある。遺跡の存在する丘陵は標高20mから30mをはかり背後の赤穂原台地は50mから60mと約20mの標高差がある。

この菊水町は、江田、東郷、花族、川沿の４地区の合併に伴い町政が発足している。町の東側は、山鹿市、鹿央町に接し、北側は三加和町、南関町に接し、西側及び南側は玉名市に接している。

この菊水町を大きく巻き込むように菊池川が東より西側へ流れ、更に下津原地区、竈門地区付近で大きく南へ流れを変える。このような地で菊池川は、小さな蛇行を繰り返し小さな河岸段丘を形作っている。このような地を利用し古代から多くの遺跡が所在している。竈門地区の所在する地より菊池川上流の下津原地区では先土器時代の遺物が確認されている。また、台地の縁辺部には、三ツ瀬横穴群、大屋横穴群、久米野横穴群、下津原上西原石棺、下津原東上原石棺など古墳時代の遺跡も豊富である。

この様な立地条件では、大規模な集落の存在は考えられず小規模な集落又は、短期間の集落の存在が考えられる。

第Ⅲ章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

調査面積は、農政部との協議のうえで7,000㎡と決定したことを受けて調査の方法の検討に入った。調査対象地は、河岸段丘上に分散しており、まとまっていないため再度、農政部と協議のうえ工事を急ぐ地点から調査を進めた。以下、次の方法で調査を実施した。

⑴ 表土剥ぎ

調査面積が点在しているため効率的に調査を進めるため、表土が厚く堆積している地区については重機で表土を剥いだ。それ以外の調査区については人力で行った。

⑵ 調査区の設定

調査区は分散しているため、調査に入る前に大調査区Ａ区～Ｃ区を設定した。試掘の結果、各調査区の遺構及び遺物がほぼ同じであるため１つの遺跡としてグリッド設定を行った。さらに、一辺10mのグリッドを南北方向を主軸にし設定した。

⑶ 実測の方法

調査区においては１/100の平板実測量を行った。各遺構は1/10及び1/20の縮尺で行い各遺構はそのつど主軸に合わせて個別実測をおこなった。実測基準点は、平板測量図に書き入れた。

⑷ 甕棺の発掘方法

平面にて堀り込みが確認出来るものはその時点において主軸を設定し掘り下げた。しかし、実際甕棺を露出させると、主軸のずれているものが多かった。そのためその時点で土層断面の実測の必要なものは実測を行いその後、甕棺の主軸に合わせて再度主軸を設定し、甕棺及び墓壙の実測を行う。

⑸ 古墳の発掘方法

今回の調査では、古墳が３基確認されている。しかし、墳丘部がいずれも削平されているため周溝及び主体部のみの調査であった。古墳の全体実測図はグリッド実測が不適当であるため平板測量を基本とした。周溝部は、陸橋部が確認出来るものは陸橋部中央を通るラインを主軸とし、さらに古墳の中央にて主軸に直交する線を設定し土層断面観察用のベルトを残した。今回調査した古墳の内１基は隣接する場所に民家が建っており、陸橋部は確認出来なかったため断面観察用トレンチは墳形が分かりやすい部分を選びその都度設定した。主体部は、平面観察を基本とし、適宜土層断面観察用アゼ及び、堀り込み確認用のトレンチを入れながら進めた。主体部の屍床面の調査については小トレンチを設定し、層を確認の後細かく区切って土ごと取り上げた。土は１㎜×１㎜のふるいにかけて遺物を精査した。主体部の調査は本来あった石棺の構造把握に重点をおいて調査を進めた。そのため主体部外にかけてもトレンチを入れた。遺物は、撹乱を受けている層のものは、撹乱一括とし、屍床面に安定する状態で出土したものについては出土状況を実測し取り上げた。

第２節　調査の経過

1992年10月から1993年５月にかけて調査は行われた。Ｂ調査区から着手しＣ、Ａ、Ｄ調査区の順に進行した。以下、月ごとの進行状況を記す。

【10月】

菊水町教育委員会の益永氏が参加され調査も順調に始めることが出来た。晴天が続き土の乾燥が著しい。

【11月】

Ｃ区の桑畑が収穫が終わったため、表土剥ぎにはいる。表土を剥いだ後も桑の根が多数残っているため除去作業を行う。調査区において表土剥ぎ後、古墳周溝が確認される。

【12月】

C区の古墳周溝部分のトレンチ調査を行う。古墳の現地保存が決定したため規模確認調査を行う。

同時に、B区の石棺実測も平行して行う。A区の表土剥ぎ作業も終わり、本格的に調査に入る。甕棺の掘り込みが見えはじめ、複数の甕棺の存在が想定された。

【1月】

A区において甕棺が続々と検出され始めた。それに伴い土壙墓群も検出された。各調査区において写真撮影を随時行い慎重な調査を進める。

【2月】

甕棺の調査が軌道に乗ったころ、調査区としていなかった部分において、円形周溝墓が確認された。工事が迫っていたが作業を中止して、県事務所耕地課及び地権者と協議を行う。その結果、調査を行い計画通り工事を行うとのこと。急遽、D区を設定し調査に入る。

【3月】

D区の円形周溝墓の調査も同時に行うことになるがなかなか進まない。甕棺も多数検出された。年度末をむかえて一部、A区の甕棺・住居跡・古墳が年度明けに残された。

【4月】

年度当初の係内移動で浜田から長谷部が調査担当を受け継ぐ。調査の引き継ぎ事項は詳しく説明を受けたためスムーズにA区の調査に入る。1号墳の主体部の調査を始めて、出土した須恵器が意外に古いため、主体部の石棺形態はどの様なものかと考えながら調査を進める。甕棺は意外に多く実測が終了していたため1号墳の調査に集中できる。

【5月】

調査も終わりに近づき、もう一度図面が抜けていないか確認する。調査は1号墳の実測終了とともに全体の調査も終了した。

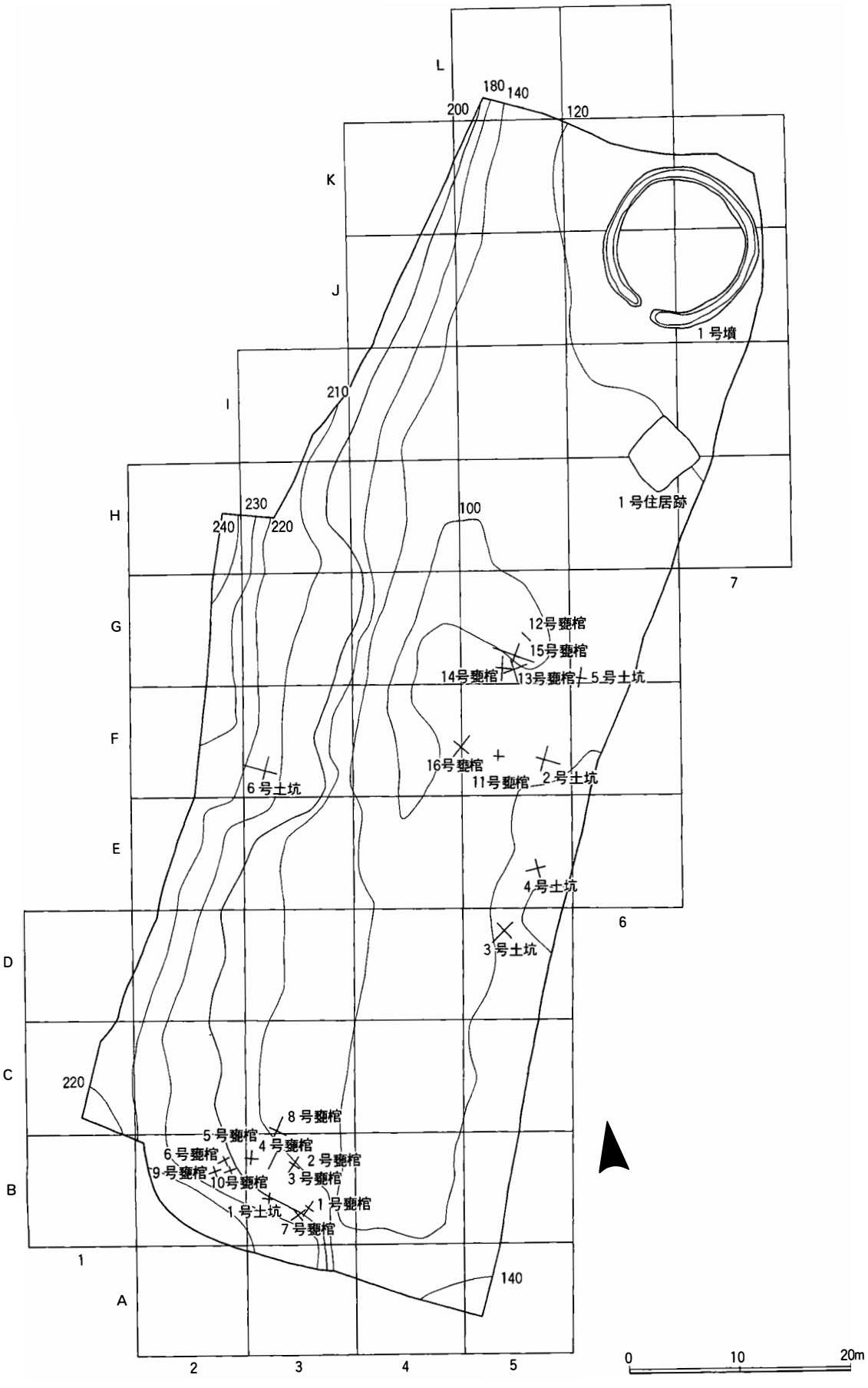
調査が終了し調査事務所も撤収した後、ほどなく工事が入ったとのことである。

【1994年4月～1995年3月】

1994年度に調査報告書の作成期間を設定させてもらった。

A区1号墳　作業風景

A区1号墳　全景　南より作業風景


L
K
J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
1
2
3
4
5
6
7
180
140
200
120
210
230
240
220
100
220
140
1 号墳
1 号住居跡
12号甕棺
15号甕棺
14号甕棺
13号甕棺
5 号土坑
16号甕棺
11号甕棺
2 号土坑
6 号土坑
4 号土坑
3 号土坑
8 号甕棺
5 号甕棺
4 号甕棺
6 号甕棺
2 号甕棺
9 号甕棺
10号甕棺
3 号甕棺
1 号土坑
1 号甕棺
7 号甕棺
0
10
20m

第４図　　遺構配置図（Ａ区）

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　先土器時代の遺物

先土器時代の遺物は、すべてＡ区にて検出されている。しかし、この調査区では先土器時代の遺物包含層が後世の耕作等で削平を受けて再堆積しているので、出土遺物は一括の遺物として扱っている。

１　出土石器について

ナイフ形石器（第５図１～２）

ナイフ型石器は３点出土した。１は、石材はチャート製である。剥片素材は、不定形の縦長剥片を使用し、右側縁部及び左側縁部基部に裏面から調整を行う。

２は、流紋岩である。石刃状の剥片の打面部両側に整形加工を施す。整形加工は直線状である。背面に石核素材の風化面を残し利用している。

３は、素材となる縦長剥片の打面部を残す。両縁側とも抉入状の調整加工が施されている。右側縁に裏面から細かい剥離が行われ、そののち刃潰し加工が施される。

以上は、ナイフ形石器のなかでも剥片尖頭器と呼称されるものである。

剥片（第５図３．４）

剥片は２点検出されている。その石器素材はいずれも黒曜石である。

４．５ともに縦長剥片であり、表面は、風化して光沢がない。

４は、表面に細かい剥離面を持ち、剥離作業面である。

５は、打面を残しており、やや厚めの剥片を作りだしている。

２　まとめ

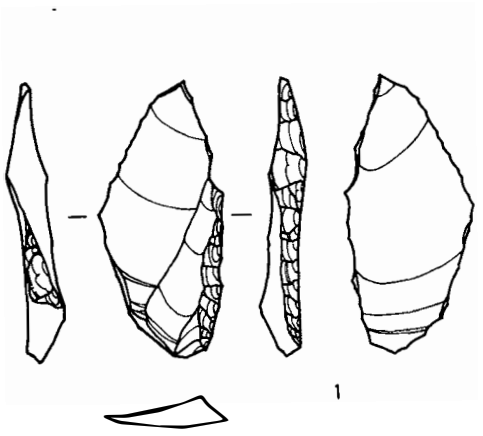
今回の発掘調査において、先土器時代の遺物包含層は確認されなかった。

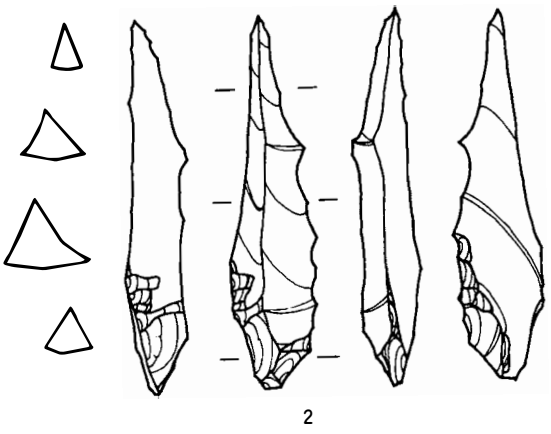
しかし、出土した調査区はＡ区のみであり過去において遺物包含層が存在していたと思われる。この調査区は、一番南側に位置し菊池川にもっとも近い場所を占めている。

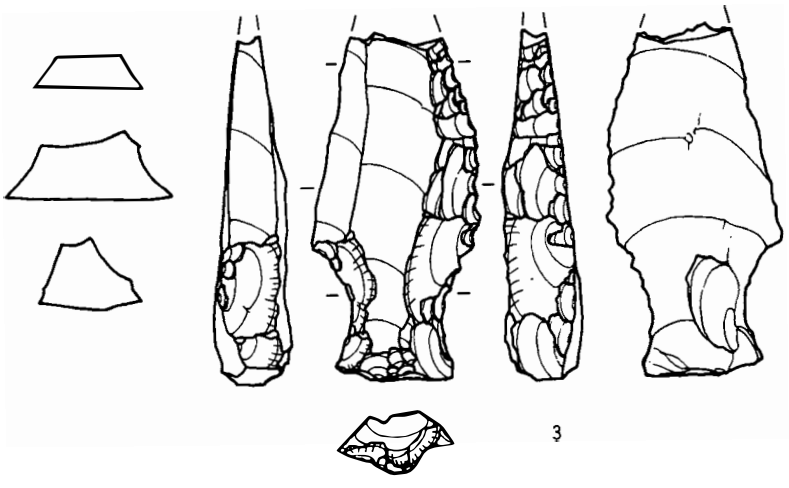
良好な包含層出土遺物ではないが、先土器時代の遺物を紹介した。

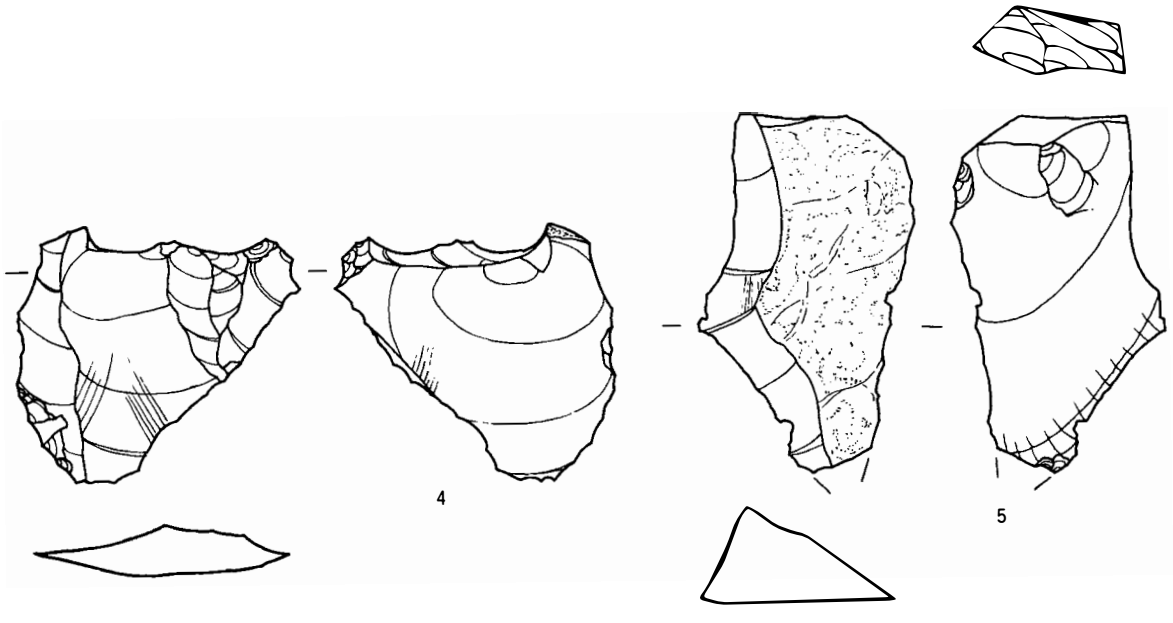
第２表　　石器計測表

No.	器　種	石　材	計測値 長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	欠損部位	出土地点
1	ナイフ形石器	チャート	3.6	1.6	0.6	3.0		Ａ区一括
2	〃	流紋岩	4.9	1.2	0.9	3.0		Ａ区一括
3	〃	安山岩	4.5	2.2	1.0	9.4	先端部欠損	Ａ区一括
4	使用痕のある剥片	黒曜石	3.4	3.6	0.7	7.4		Ａ区一括
5	〃	〃	4.6	2.5	1.1	13.2		Ａ区一括









第５図　　石器実測図

第２節　縄文時代の遺構と遺物

今回の調査でこの時期の遺構は、もっとも菊池川に近いＡ調査区より土坑６基を検出した。

⑴　遺構

１号土坑（第６図）

他の土坑より離れ、Ａ調査区のもっとも南に位置している。

平面形態は、円形である。残存する壁高は約20cmを測る。

２号土坑（第６図）

平面形態はほぼ円形を呈している。底面の一部が袋状に広がる。残存する壁高は約50cmを測る。

東側に小ピットが検出されている。遺物は、北久根山式土器が出土している。（第８図３．６）

３号土坑（第６図）

平面形態は方形角丸を呈している。残存する壁高は約15cmを測る。

（第８図～第９図５・８・19・21・28・33・52）

４号土坑（第６図）

平面形態は不整円形を呈しており、残存する壁高は約40cmを測る。

中心より北寄りに小ピットが検出されている。

遺物は、縄文後期の土器が出土している。

（第８図１・22・23・25・27・37・38・41・43）

上層一括で取り上げた土器の中に、３単位の波状口縁深鉢土器が出土している。（第８図13）

５号土坑（第７図）

平面形態は南北にのびる長円形を呈しており、残存する壁高は、約30cmを測る。

中心より北寄りに小ピットが検出されている。

６号土坑（第７図）

平面形態は長円形を呈しており、残存する壁高は約30cmを測る。他の土坑に比べて土器の出土量は多いが、ほとんどの土器が小破片である。その中でも辛川式土器が多く出土している。（第８図10・12・14・15・16・17・29・30・31・32・34・35・36・40・42・44・45・46）

⑵　出土遺物

土器

本遺跡の縄文時代の土器は、小破片多く器形を判断したり、文様を確認するには容易ではなかった。

２は口縁部で、阿高系の土器と考えられる。

１・３～12は北久根山式土器と考えられる。

１・３・５・６・８・10・12は土坑からの出土である。

１・３・４は深鉢の口縁部の破片である。

３は口縁部と頸部に２本の沈線を施している。

４は口縁部の口唇部に貝殻疑似縄文の施文がある。

５・６・７・８は精製の深鉢の底部であると考えられる。

９～12は高坏形土器である。

９は皿状の内面に２条の沈線を円状に施している。また外側より円状の沈線に向かって４本の単位で沈線が施されている。その沈線の間に貝殻疑似縄文の施文がある。10～12は脚部の破片である。

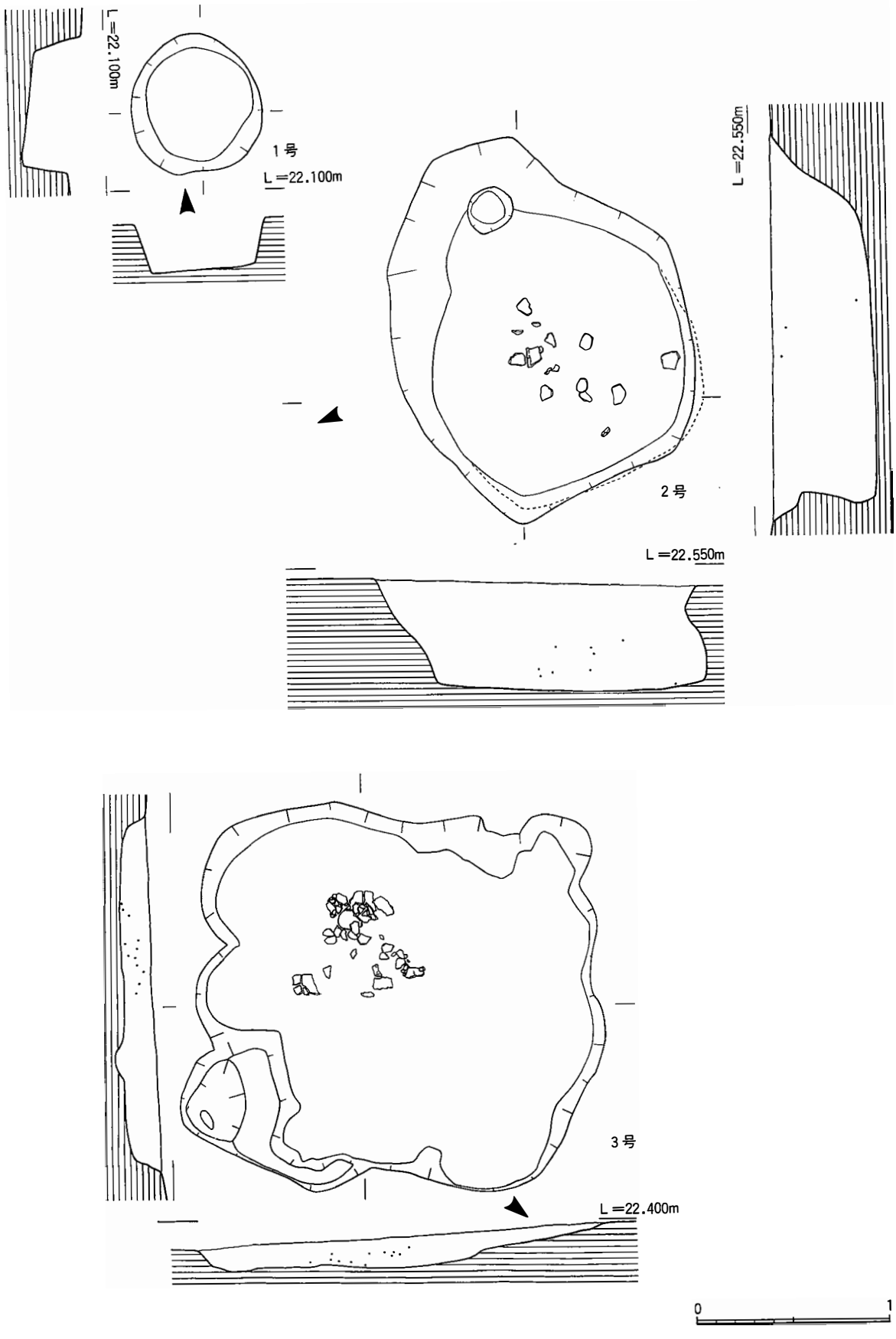
14～47は辛川式土器と考えられる。大半は土坑からの出土である。

14～24は有文の深鉢形土器の口縁部の破片である。

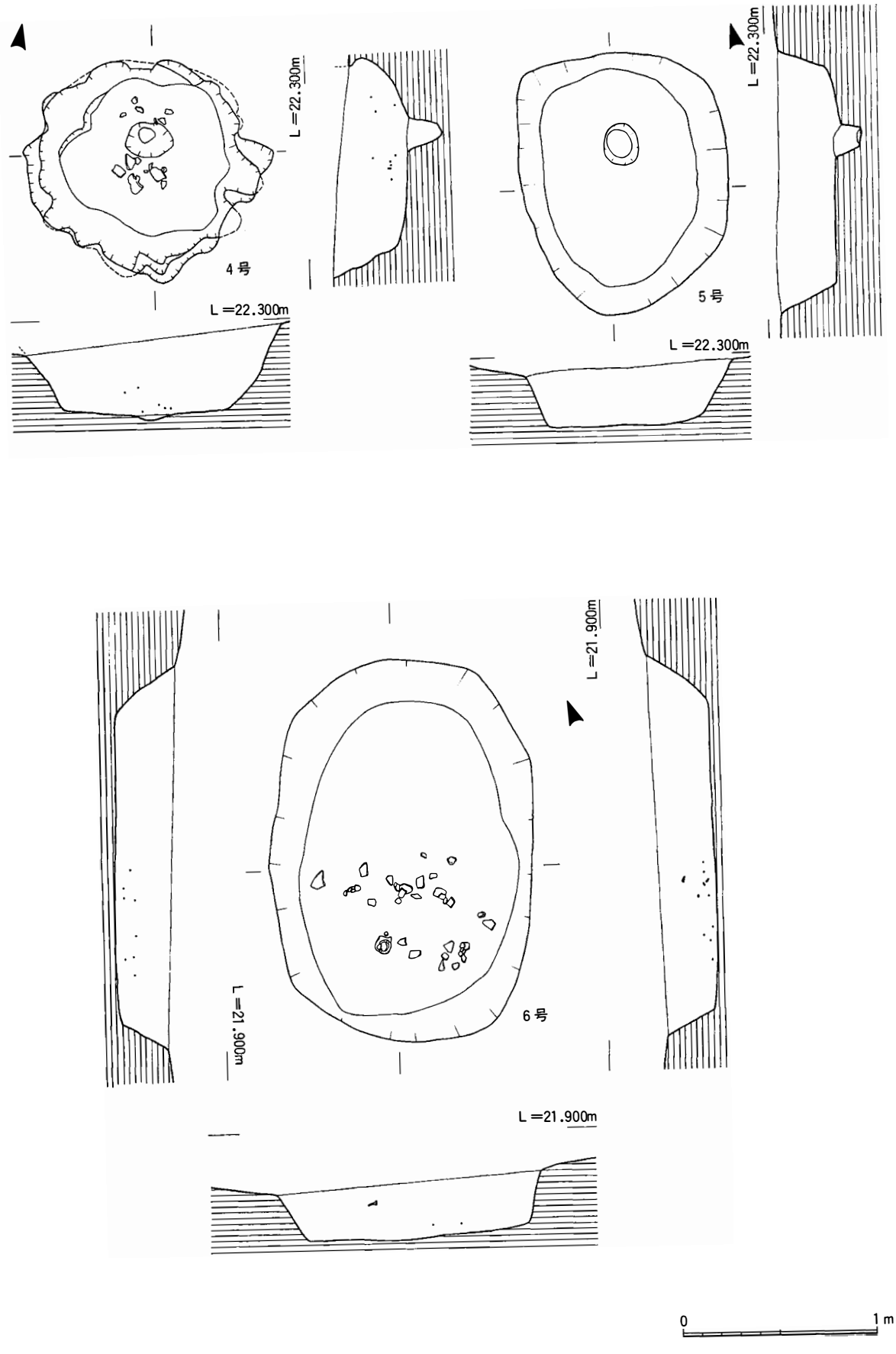
13は波状口縁をなす有文の深鉢形土器の口縁部の破片である。波頂部は残存する部分から３単位であると考えられる。口縁部の文様帯には、２本の横走沈線が施文され、波頂部では鉤状の文様を半弧文で囲む鉤弧文が施文されている。頸部には刺突烈点文を施文している。

14は有文の深鉢形土器の口縁部の破片である。口縁部文様帯には、２本の横走沈線が施文され、波頂部では鉤弧文が施文されている。

15は波状口縁の土器の破片である。波頂部は一部欠損しているが、文様帯には、２本の横走沈線が沈施文され、波頂部では鉤弧文が施文されているようである。



第6図　　1・2・3号土坑実測図



第7図　　4・5・6号土坑実測図

16は有文の深鉢形土器の口縁部の破片である。口縁部の文様帯には、３本の横走沈線が施文されている。

17～21は口縁部の小破片である。文様帯には２～３本の横走沈線が施文されている。

22・23は有文の深鉢形土器の口縁部の破片である。口縁部の文様帯には、２本の横走沈線が施文されており、鉤手文が施文されている。

24は有文の深鉢形土器の口縁部の破片である。口縁部の文様帯には、３本の横走沈線が施文されている。

25～47は磨消縄文系有文土器の胴部の小破片である。施文には、刺突烈点文・平行沈線文・横沈線文と斜行沈線・鉤弧文が見られる。

ここでは、多くの土器片を報告してきたが晩期の遺物も少量ある。

49・50・51は後期の土器である。精製土器の口縁部である。器形は49・50については浅鉢である。51は深鉢の口縁部である。

52・53・54・55・56・60は晩期の粗製鉢の口縁部である。精製土器と違い胎土、焼成等大きな違いがみられる。これらの破片は大きな器形を呈しており口縁部は上部に向かってやや開き気味である。

表面には条痕による引っかいたような模様が施され一部、撫でて表面を整えたようなところも観察できる。

口縁部近くに見られる凸帯文は、等間隔で刻み目が入る。

破片が少量であり全体形が見渡せる遺物が無いせいか器形の全体像が掴みにくい。

57・58は胴部破片である。胴に凸帯を巡らせており刻み目は口縁部近くに凸帯を施すものとほぼ同じ施文である。

胴部の最大幅の付近にある。凸部は粘土を紐条にして器面に張りつけてある。

59は、平底の底部である。粗製時の底部であり器形は深鉢であると思われる。

以上の事からこの地での晩期の遺物は、広い時期幅を持っている。

粗製土器の形式はいまだにはっきりしないが、古閑式土器の時期のものに近いのではなかろうか。

石器

縄文時代後期に属する石器、石核、剥片は、土壙及び調査区内一括の資料である。

そのなかで、石器の器種ごとの内訳は、石鏃９点、楔形石器３点、石匙２点、打製石斧17点、使用痕のある剥片10点、磨石５点である。

石材ごとの内訳は、黒曜石25点、安山岩１点、チャート１点、流紋岩１点、砂岩５点、緑泥片岩17点である。

石鏃（第10図１～９）

石鏃は、９点出土した。その石材ごとの内訳は黒曜石６点・チャート１点・安山岩１点、泥岩１点である。石鏃はＡ区を中心に出土しているが包含層出土ではない。

出土した石鏃の形状において三角形（第１類）・二等辺三角形（第２類）に分けられる。

しかし、ここでは出土数が少ないためこれ以上の細分は避けて、今後この地域での資料が増えた時に再度分類したい。

第１類（１）

全体形が三角形を呈しており凹基（浅い抉り）の石鏃である。資料数は１点である。出土地点は、Ａ区の一括遺物とされているため詳細は不明である。

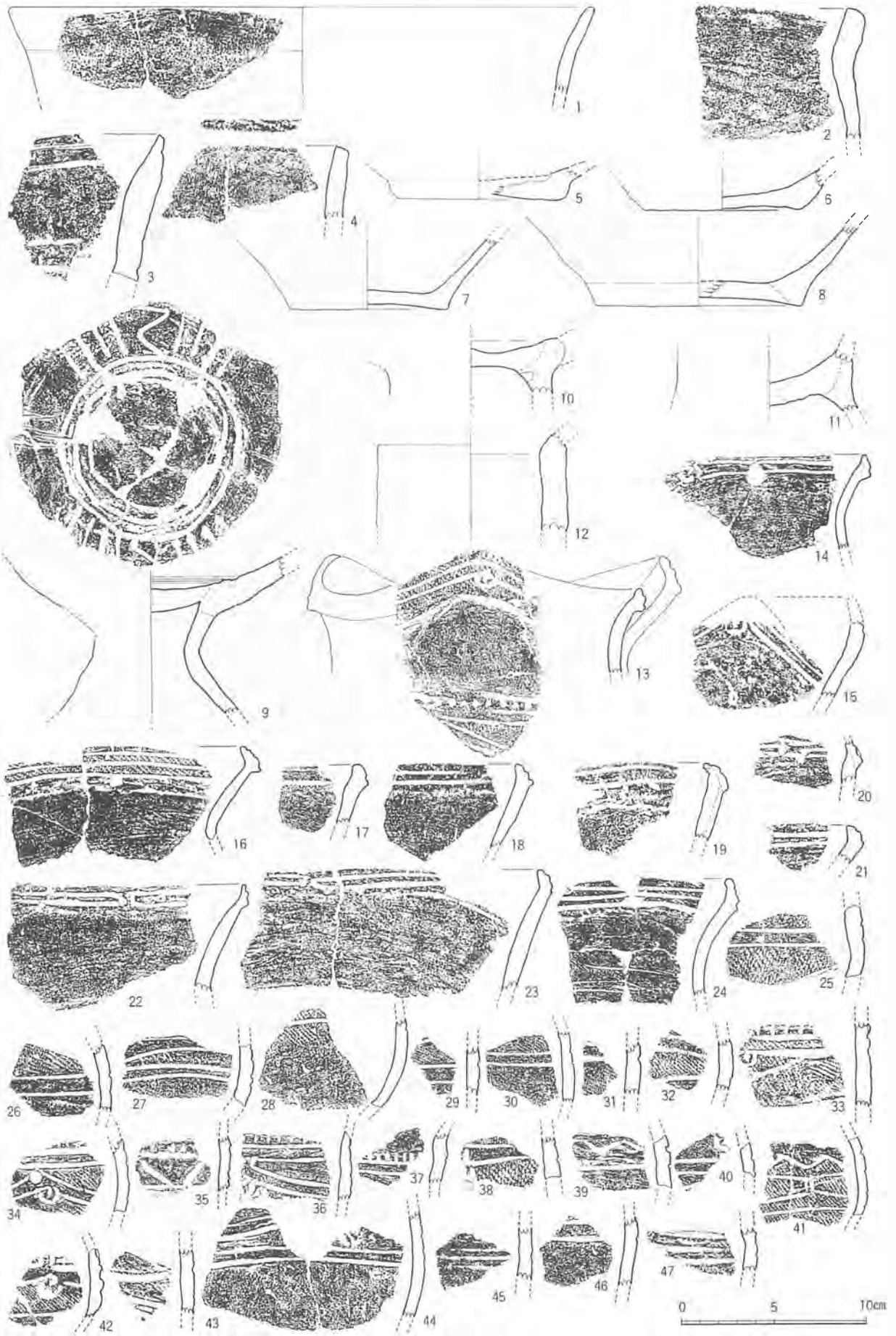
第２類（２～９）

全体形が二等辺三角形を呈する凹基の石鏃である。２・３の石鏃は平基に浅い抉りが入る。

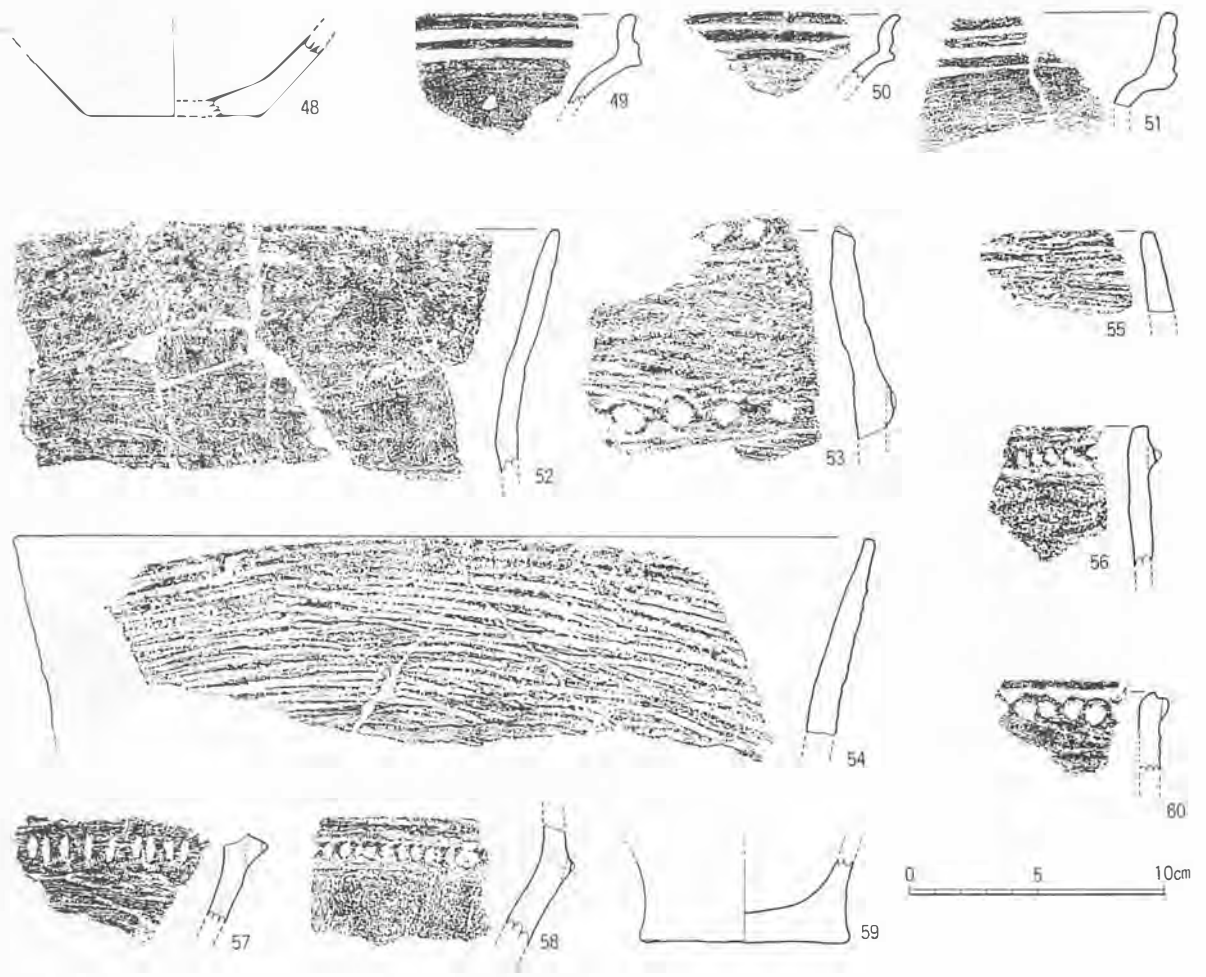
４は、鏃身に肩部を持ち先端に向かって角度が急に狭まり、凹基に浅い抉りを持つ。刃部には、両面から細かい調整剥離を持ち丁寧な作りである。

５・６は平基に凹部が見られず平らに調整されており、抉りを入れる作業は見られない。

７は、泥岩の薄い剥片素材を利用しており縦に長い二等辺三角形を呈している。刃部には細かい調整


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
0
5
10cm

第8図　土器実測図（1）



第９図　　土器実測図 (2)

が両面から入りＶ字状の深い抉入を施す。

８は、Ａ区の４号土壙の一括遺物として出土している。先端部は欠損している。基部は浅い抉りがＵ字状に施されている。この土壙からは、縄文後期の遺物も出土しており同時期の石鏃と思われる。

９は、基部に深いＵ字状の抉りを持つ未製品の石鏃である。基部Ｕ字状の縁辺には細かい調整剥離が両面から丁寧に施されている。刃部の調整は入れられておらず、剥片素材の一部を残している。

楔形石器（第11図１～３）

楔形石器は、全部で３点検出された。石材はすべて黒曜石である。出土地点は、Ａ区である。包含層出土遺物及び遺構からの出土ではないため出土地点は不明である。

１は縦長剥片を素材とし、左右両端に潰れ痕が観察される。

２は、素材剥片の形状は不明である。縁辺に細かい潰れ痕及び剥離面が観察される。

３は、素材剥片の形状は不明である。両面に上下両側からの剥離面を持つ。また上端は、表裏両面とも細かい潰れによる小剥離が観察される。

石匙（第11図４・５）

石匙は２点出土し、石材は２点とも黒曜石を利用している。この２点は形状から２類に分類できる。すなわち横型（第１類）と縦型（第２類）である。

第１類（４）

横型の石匙である。Ａ区の一括遺物であるが、これも他の遺物と同様包層含出土遺物ではない。

打面を下部にして利用している。つまみ部は中央部よりやや左側に作り出されており、両側から調整加工が入っている。表面下部及び側部には削痕による細かい剥離が見られる。裏面は下部に打瘤が観察され剥片の形状から大きめの横長剥片が利用されている。

第２類（５）

縦型の石匙である。４号土壙の一括遺物である。

つまみ部は両側から調整剥離が入れられているが作り出されるまでには至っていない。未完成の状態である。

石核（第11図６～８）

石核は３点出土している。石材はすべて黒曜石製である。出土地点はＡ区であり、包含層からの出土遺物ではない。

７は、一部表皮を残しているものの上下両方から剥片の剥ぎ取り作業が行われている。

７・８は、上部に平坦面を持つ横長の石核である。

７は、比較的小さな剥離面を全体に持ち上下両方向からの作業痕跡が見られる。さらに、下部には一部潰れ痕が見られる。

８は、上端を中心に剥離作業が行われている。

使用痕のある剥片（第12図１～７）

使用痕のある剥片は８点出土した。石材はすべて黒曜石である。出土地点は、１のみＤ区で２～８はＡ区である。いずれも包含層及び遺構からの出土遺物ではないため、出土地点は不明である。

以下、資料ごとに説明を加えてていきたい。

１は、縦長剥片を素材とし先端部に刃こぼれ状の痕跡が残される。２・３も、縦長剥片を使用している。縁辺に刃こぼれ状の痕跡が見られる。４は、やや大きめの縦長剥片を使用しており、縁辺部に刃こぼれ状の痕跡が見られる。５は、縦長剥片を使用しているが、剥片の縁辺部がやや抉れた位置に細かい刃こぼれ状の痕跡が両端に見られる。６は、縦長剥片を利用しており、縁辺部に広い範囲に刃こぼれ状の痕跡が見られる。スクレイパーとしての使用が考えられる。７は、幅広の縦長剥片を利用している。縁辺部に刃こぼれ状の痕跡が見られる。８は縦長剥片を利用し両端縁辺及び裏面に刃こぼれ状の細かい痕跡が見られる。

打製石斧

今回の調査で出土した打製石斧は20点である。

それもすべて、一部が欠けた状態で出土している。

その他、使用によって剥離したと思われる剥片や形成過程で剥離したと思われるものはかなりの量にのぼる。ここでは、そのようなものを省き実際に使用されたと思われるようなものはすべて掲載した。

１　出土状況

先土器時代と同じく縄文時代の遺物も同様に明瞭な包含層の出土遺物ではないため、原位置を示すものは少ない。

打製石斧の出土している地点とその他の縄文時代の遺跡が出土している地点は、おおよそＡ調査区に中心がくると思われる。出土土器は縄文後期の辛川式である。

２　打製石斧の分類

この遺跡かり出土している遺跡からは形態分類は資料不足であるため、ほぼ同時代の遺跡の資料を参考にして分類してみる。

Ⅰ類（第13図１～６）

「短冊形」とされているもので、全体の形状は長方形をなしている。最大幅が石斧の中央に来ており先端部（刃部）はやや丸みをおびる。掲載した資料のなかにはかなり欠損の激しいものが含まれる。

Ⅱ類（第14図７）

バチ形に開く形態は、二等辺三角形に近く、最大幅は石斧の下部にくる。刃部はほぼ直線状になりやや厚みを持つ。

Ⅲ類（第14図・第15図８～17）

Ⅰ類としたものとほぼ形態は同じであるが、正方形をなし、両刃及び縁辺にも使用痕跡が見られるものもある。７は局部磨製の打製石斧である。基部には浅い抉りが入り両刃である。

磨石（第16図１～５）

総数５点が出土している。主にＡ区を中心に出土しているが、ほかの遺物同様一括遺物である。

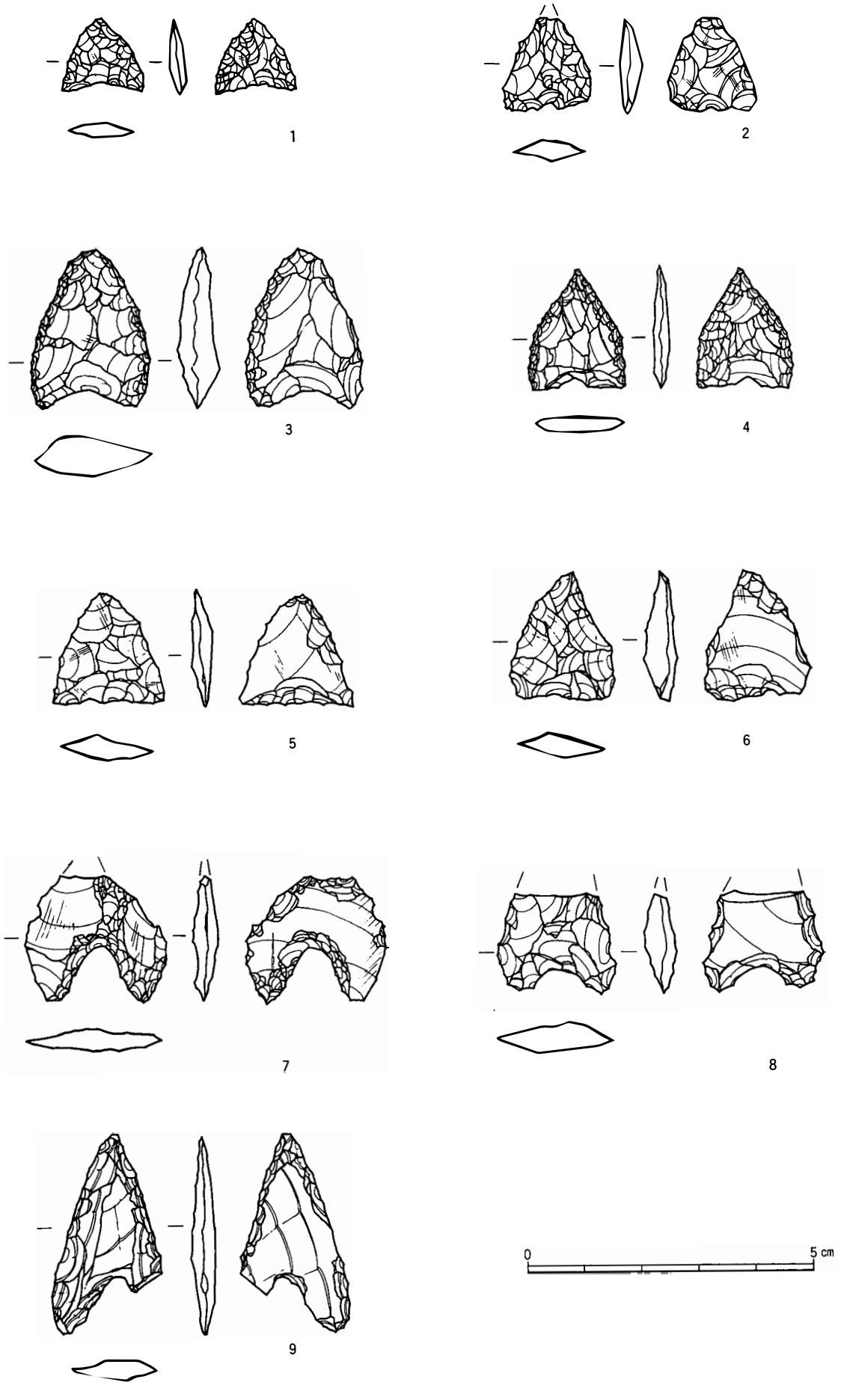
１は、扁平な石を使用しており、両面とも磨った痕跡が確認できる。

２、３は小型の部類に入ると思われ、断面形は楕円を呈する。磨った部分は両面及び側面を使用しているがしっかりした磨り面は持っていない。

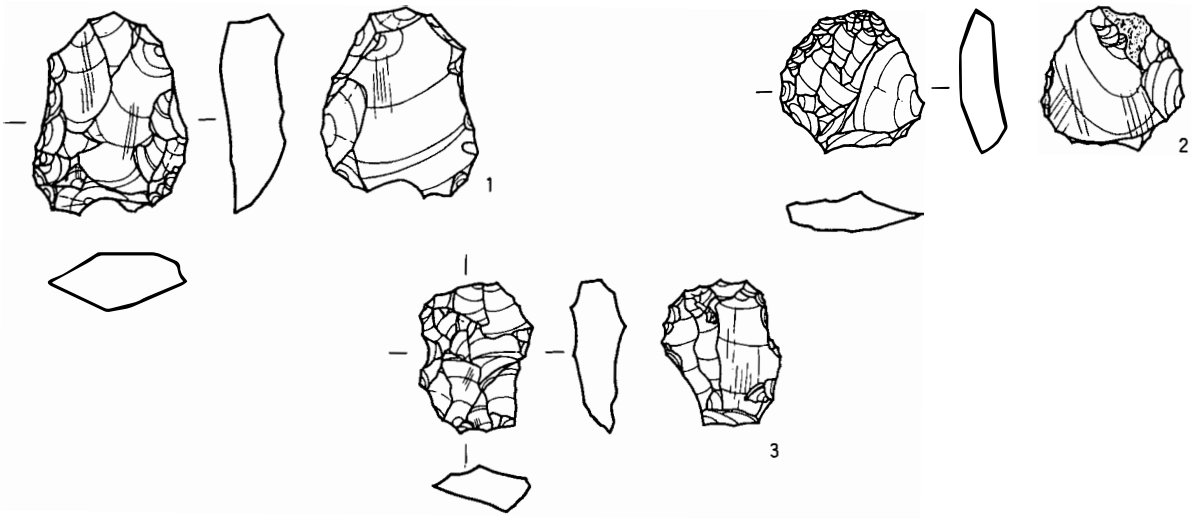
４は、２、３に比べてやや大きいが、断面形態は楕円形を呈している。両面に磨り面がしっかりと発達し側面もわずかに打面が残る。

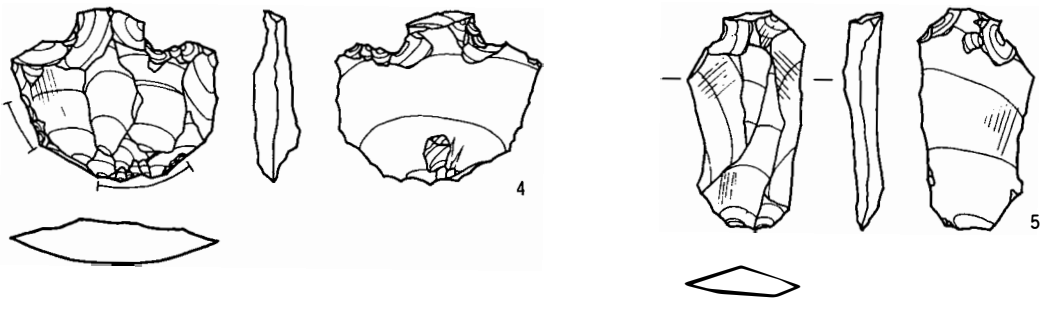
５は、全体に磨り面が発達しており断面形態が台形を呈している。ほかの磨り石と比べれば格段に使用頻度が高い。

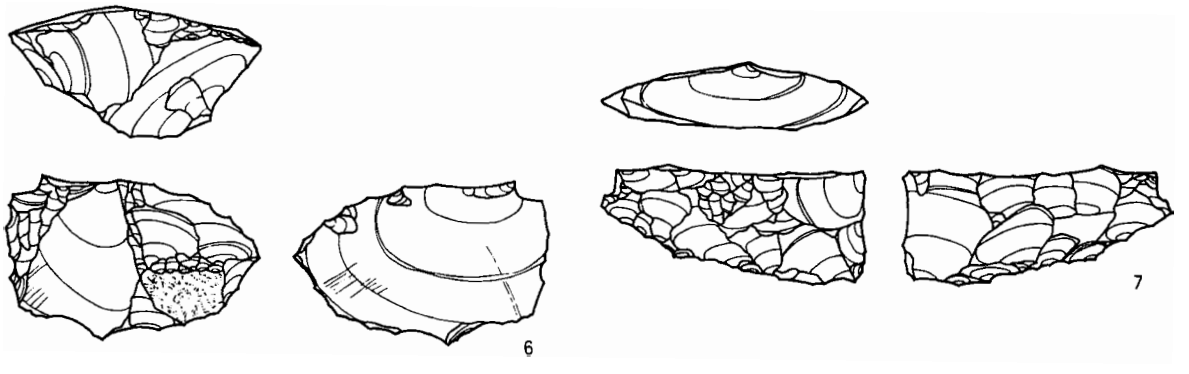
今回の調査では石皿、台石が検出されておらずセット関係等は不明である。

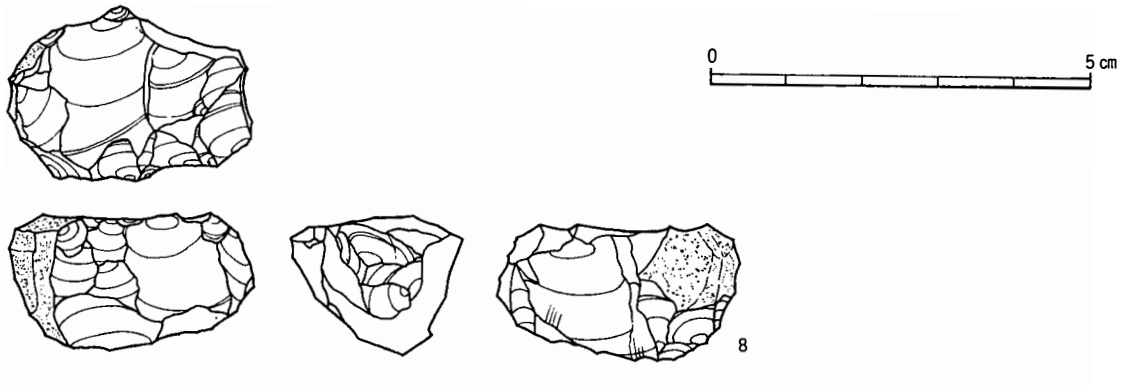


第10図　　石器実測図 (1)

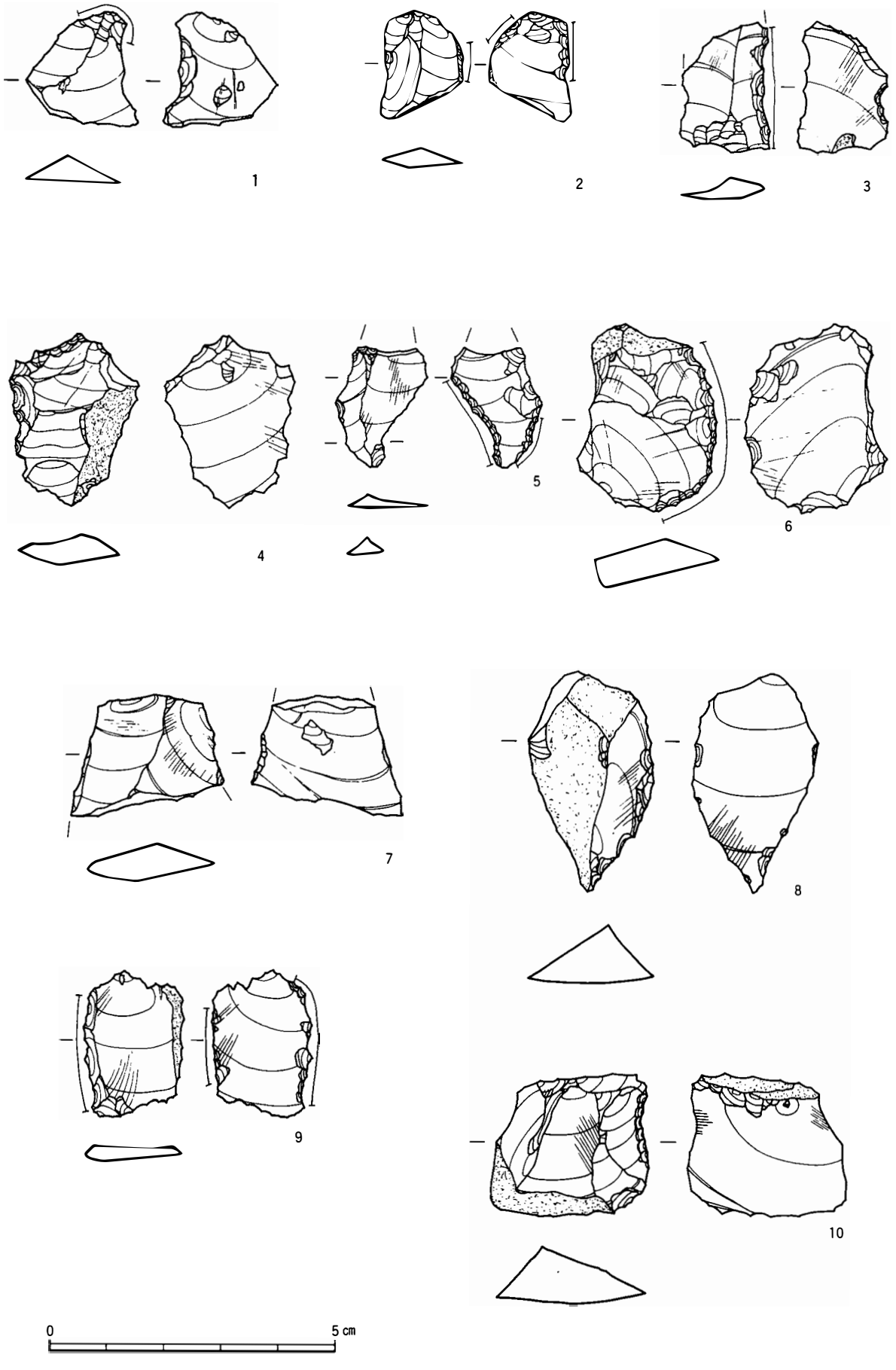




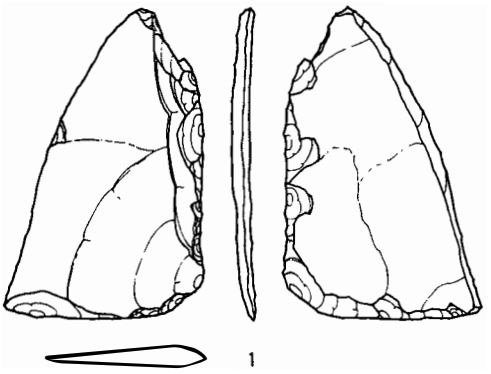


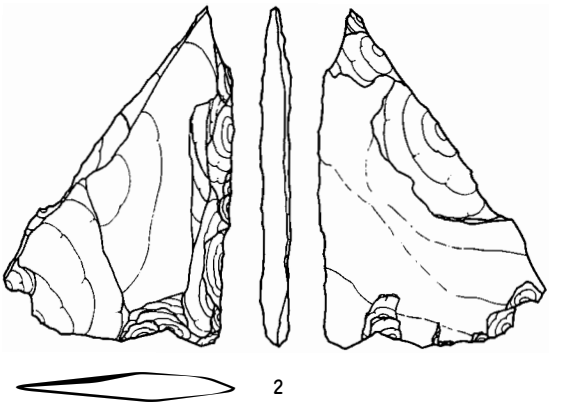


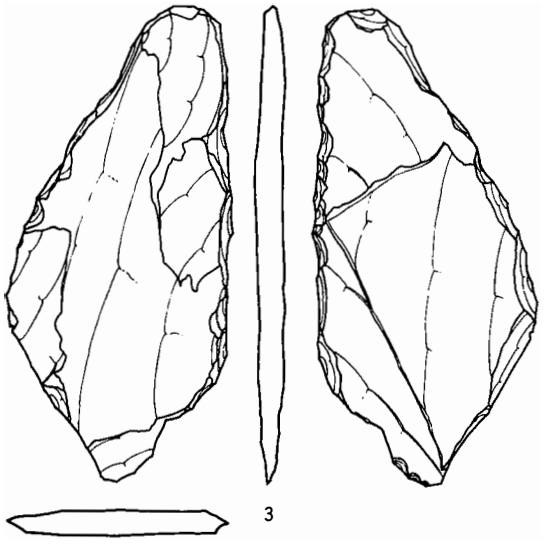
第11図　　石器実測図 (2)

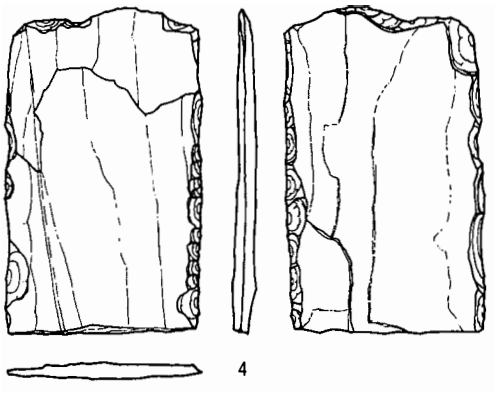


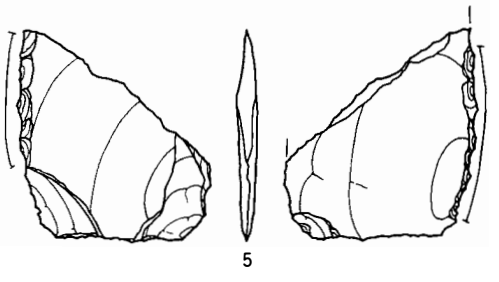
第12図　　石器実測図 (3)

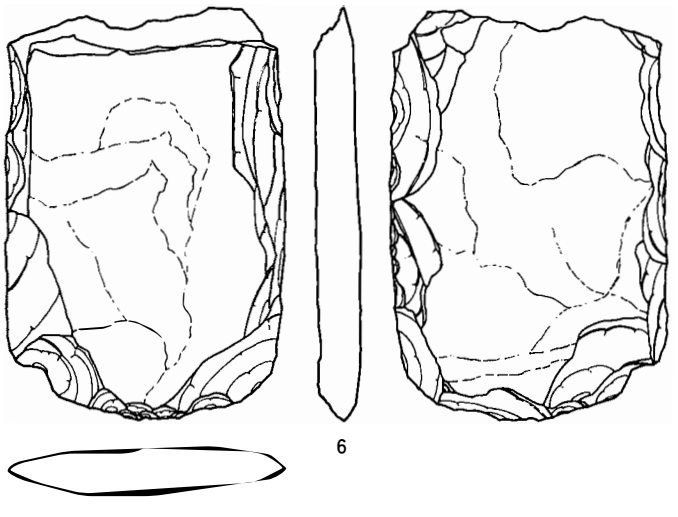


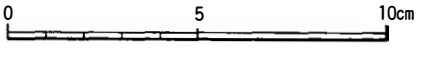




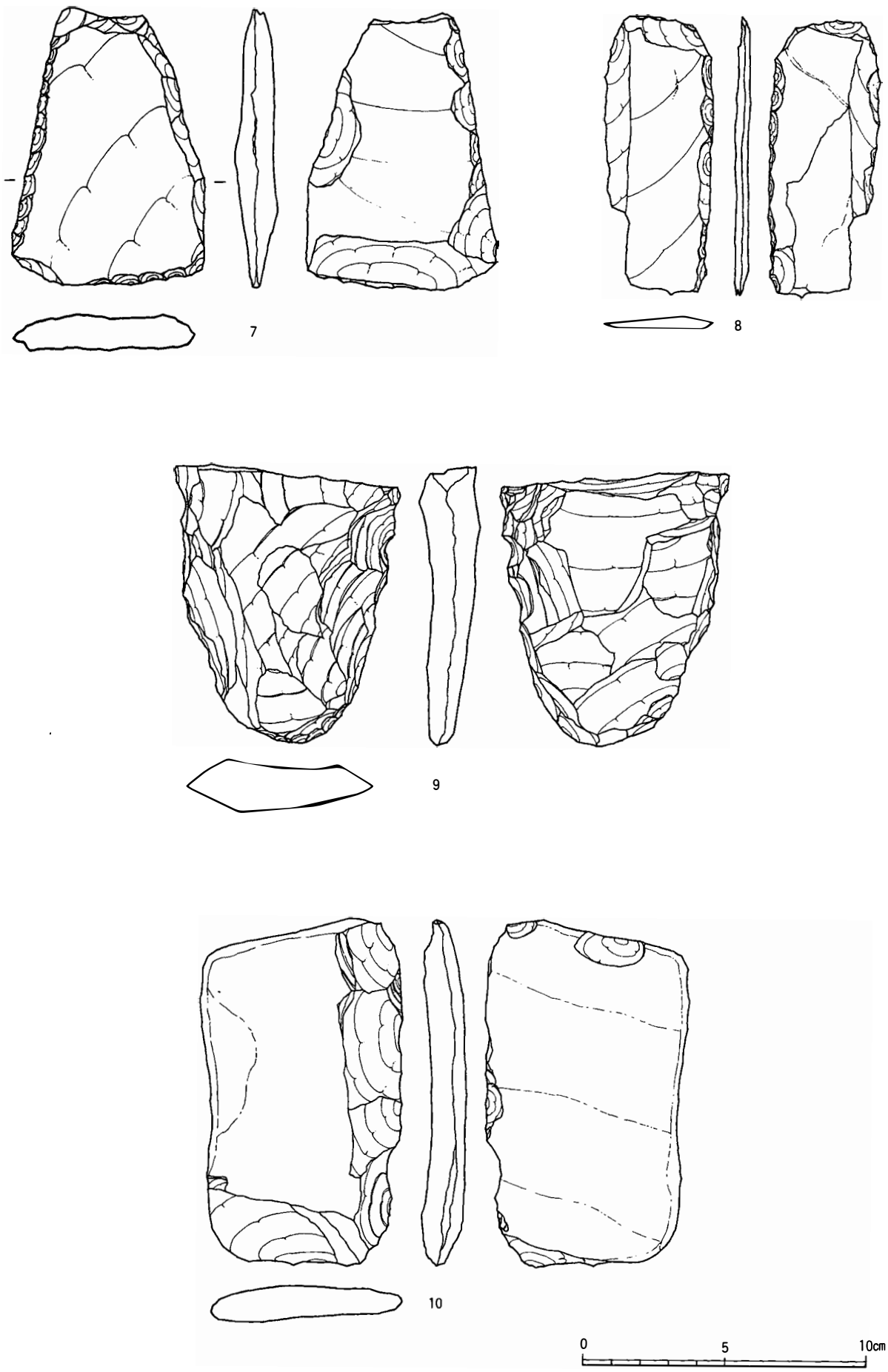




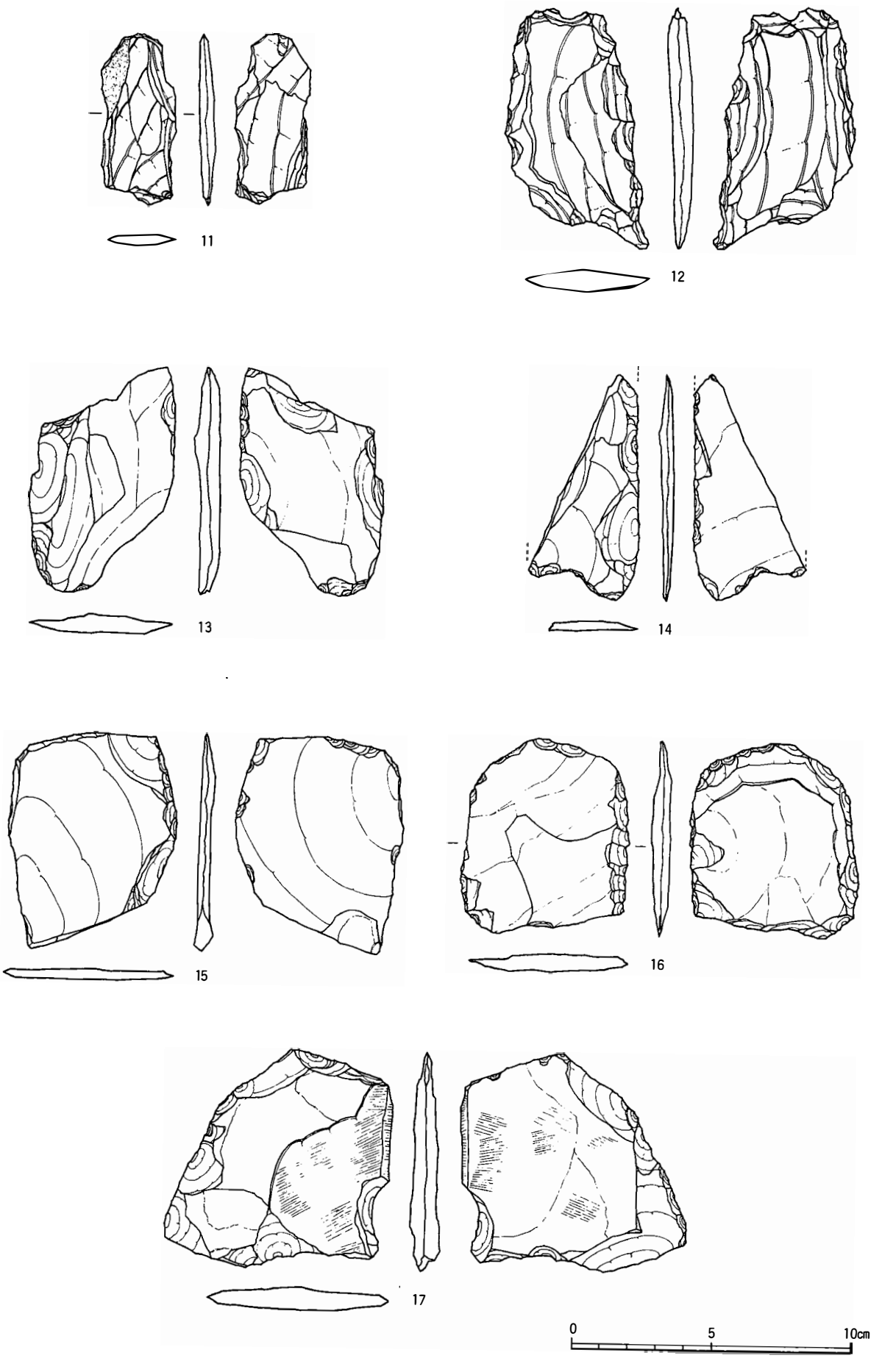




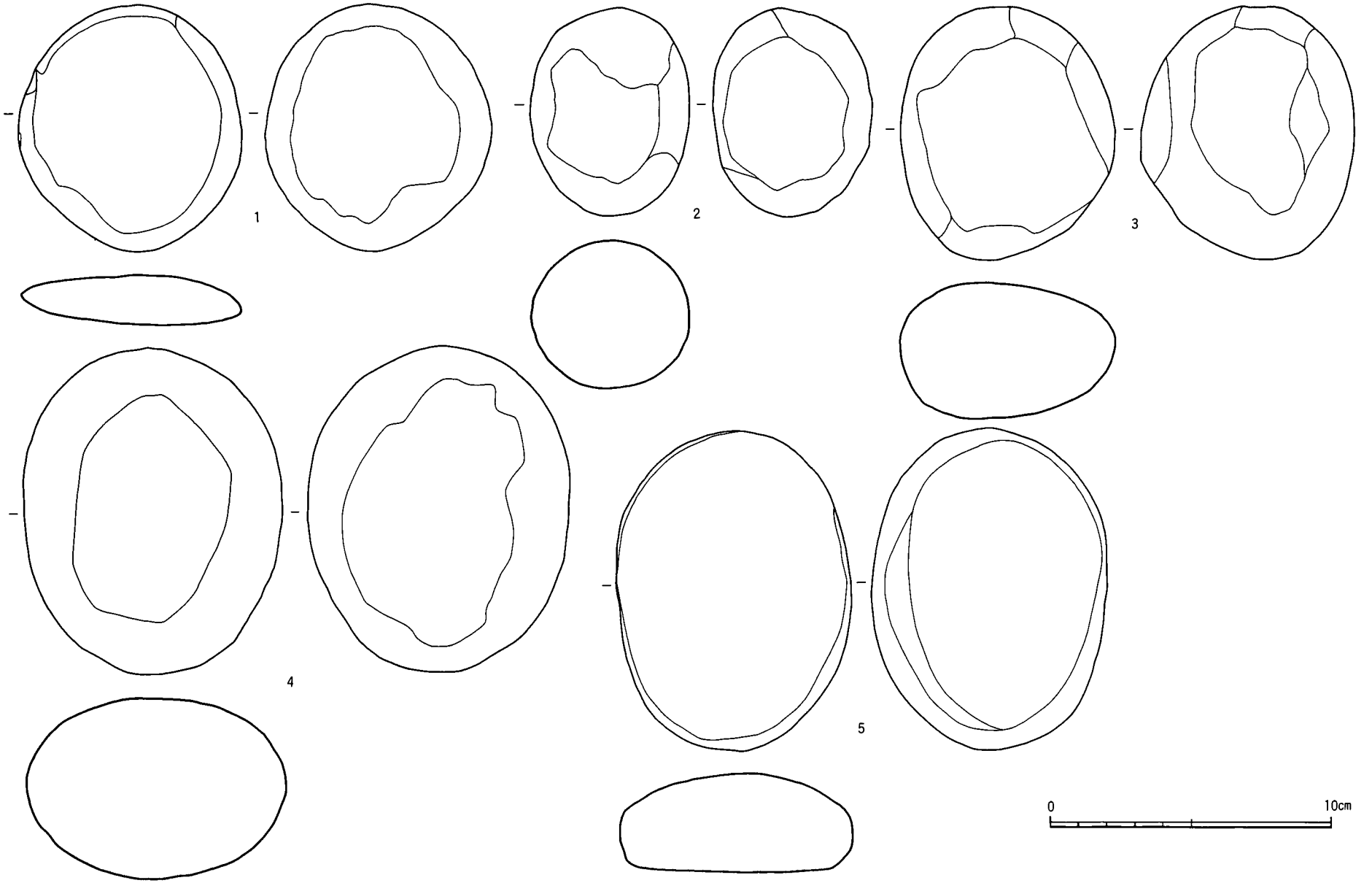
第13図　　石器実測図 (4)



第14図　　石器実測図 (5)



第15図　　石器実測図　⑥



第16図　　石器実測図 (7)

第３表　石器計測表

No.	器種	石材	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	欠損部位	出土地点
1	石鏃	黒曜石	1.3	1.4	0.3	0.3		A区一括
2	〃	〃	1.6	1.5	0.4	1.0	先端部・基部欠損	A区一括
3	〃	〃	3.8	2.1	0.4	4.1		A区一括
4	〃	〃	2.1	1.6	0.3	0.9		A区一括
5	〃	〃	1.9	1.9	0.5	1.1		A区一括
6	〃	〃	2.2	1.8	0.6	1.5		A区一括
7	〃	〃	2.2	5.4	0.4	1.9	先端部欠損	A区１号住居跡
8	〃	〃	1.3	2.0	0.5	1.9		A区４号土壙一括
9	〃	泥岩	3.5	1.8	0.4	1.8		A区一括
10	楔形石器	黒曜石	2.6	1.7	0.7	4.2		A区一括
11	〃	〃	1.8	1.9	0.5	1.9		A区一括
12	〃	〃	2.0	1.9	0.5	1.6		A区一括
13	石匙	〃	2.3	2.7	0.5	3.1		A区一括
14	〃	〃	2.8	1.4	0.3	1.9		A区４号土壙
15	石核	〃	2.1	3.3	1.6	10.7		A区一括
16	〃	〃	1.6	3.5	0.8	3.7		A区一括
17	〃	〃	1.7	3.2	2.3	13.4		A区一括
18	使用痕のある剝片	〃	2.0	2.0	0.5	1.6		D区一括
19	〃	〃	1.9	1.4	0.3	1.0		A区一括
20	〃	〃	2.3	1.6	0.4	1.9		A区一括
21	〃	〃	3.0	2.3	0.5	3.3		A区一括
22	〃	〃	2.1	1.7	0.3	0.9		C区一括
23	〃	〃	3.3	2.4	0.6	7.1		A区一括
24	〃	〃	2.1	2.6	0.6	3.1		A区一括
25	〃	〃	3.6	1.8	0.3	1.1		A区一括
26	〃	〃	2.4	2.7	2.1	9.0		A区一括
27	〃	〃	3.9	2.2	2.1	5.9		D区一括
28	磨石	砂岩	8.8	7.9	1.7	384.3		A区一括
29	〃	〃	7.5	5.6	5.3	427.1		A区一括
30	〃	〃	9.1	7.6	4.9	470.9		A区一括
31	〃	〃	11.8	9.3	6.4	794.2		A区一括
32	〃	〃	11.5	8.3	3.6	749.4		A区一括
33	打製石斧	緑泥片岩	8.1	5.0	0.5	37.8		A区一括
34	〃	〃	8.8	5.7	0.8	54.5		A区一括

No.	器種	石材	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	欠損部位	出土地点
35	打製石斧	緑泥片岩	12.4	5.9	0.7	80.1		A区
36	〃	〃	8.4	5.2	0.5	49.0		A区
37	〃	〃	5.5	4.9	0.5	37.5		A区
38	〃	〃	10.7	7.3	1.1	147.8		A区
39	〃	〃	6.9	9.7	1.4	89.5		A区
40	〃	〃	9.7	3.9	0.4	49.7		A区
41	〃	〃	9.8	6.6	1.9	170.3		A区
42	〃	〃	12.2	6.8	1.2	158.4		A区
43	〃	〃	6.1	2.4	0.5	32.7		A区
44	〃	〃	8.4	4.5	0.7	62.7		A区
45	〃	〃	8.1	5.1	0.9	53.5		A区
46	〃	〃	8.0	3.2	0.6	42.2		A区
47	〃	〃	7.7	6.0	0.4	71.8		A区
48	〃	〃	6.7	5.7	0.7	68.5		A区
49	〃	〃	7.7	6.5	1.0	87.7		A区

第３節　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代中期の遺構は甕棺墓16基と、同時期のものと思われる住居跡１基が確認された。

これらの遺構は、Ａ調査区からのみ確認された。

(1)　甕棺墓

１号甕棺墓（第18図）

調査区の中では南に位置する。この甕棺の西側には７号甕棺墓がある。墓壙の平面形態は楕円形を呈している。上面を大きく削平されているが、掘り方の一部が残っており、棺を斜めに据えている。

１個体分の小型甕が出土しているが削平を受けているため単棺であるかどうかは不明である。

主軸方位　Ｎ－Ｅ81°

埋置角度　＋19°

２号甕棺墓（第18図）

３号甕棺墓と墓壙を共有しているようであるが、検出状況から判断すると、近接して埋置されたものと考えられる。墓壙の平面形態は、上面を大きく削平されているため不明である。

切り合い関係及び新旧関係は判断できなかった。棺をやや斜めに据えている。

主軸方向　Ｎ－Ｅ61°

埋置角度　＋23°

３号甕棺墓（第18図）

２号甕棺墓と墓壙を共有しているようであるが、検出状況から判断すると、近接して埋置されたものと考えられる。墓壙の平面形態は、上面を大きく削平されているため不明である。

切り合い関係及び新旧関係は断定できなかった。

棺をほぼ水平に据えて置いている。

主軸方向　Ｅ－Ｓ９°

埋置角度　＋23°

４号甕棺墓（第18図）

墓壙の平面形態は楕円形を呈している。上部を大きく削平されているが、掘り方の一部が残されている。

棺は斜めに据え、上下甕の複式棺の接合式でその接合部分には粘土の目張りを施す。

主軸方向　Ｓ－W34°

埋置角度　＋34°

５号甕棺墓（第18図）

墓壙の平面形態はほぼ円形を呈している。上面を大きく削平されているが、掘り方の一部が残されている。

棺は斜めに据え、上下壺の複合棺である。

主軸方向　Ｅ－Ｓ12°

埋置角度　＋32°

６号甕棺墓（第18図）

調査区の中では西側に位置する。この甕棺の南側には、９号甕棺墓、10号甕棺墓がある。

墓壙の平面形態は楕円形を呈している。上面を大きく削平されているが、掘り方の一部が残されている。棺は斜めに据え上下甕の複合棺の接合式で、その接合部分には粘土の目張りを施す。

主軸方向　Ｎ－Ｅ62°

埋置角度　＋35°

７号甕棺墓（第18図）

調査区の中ではもっとも南に位置しておりこの甕棺の北側には１号甕棺墓がある。

墓壙の平面形態は楕円形を呈している。上面を大きく削平されており不明であるが、掘り方の一部が残っていた。

東側下に深さ0.4m奥行き0.25mの横穴を掘り込み、棺をほぼ水平に据える。大甕１個体が出土しているが削平を受けているため、単棺であるかどうかは不明である。

主軸方向　Ｓ－W59°

埋置角度　＋20°

８号甕棺墓（第18図）

墓壙の平面形態は楕円形を呈している。上面を大きく削平されており不明であるが、掘り方の一部が

残されていた。

東壁下に0.5m奥行0.7mの横穴を掘り込み棺をほぼ水平に据える。

鉢（上）と甕（下）の複式棺の接合式でその接合部分には粘土の目張りを施す。

主軸方向　N－E33°

埋置角度　＋3°

9号甕棺墓（第19図）

調査区の中では西に位置する。この甕棺の東側には6号甕棺墓、10号甕棺墓がある。

墓壙の平面形態はほぼ円形を呈している。

上面を大きく削平されており、不明であるが、掘り方の一部が残されていた。

棺をやや斜めに据え、壷（上）と甕（下）の複式棺で、覆口式である。

主軸方向　W－N79°

埋置角度　＋37°

10号甕棺墓（第19図）

調査区の中では西に位置する。この甕棺の北側には9号甕棺墓、西側には9号甕棺がある。

墓壙の平面形態はほぼ円形を呈している。上面を大きく削平されており、不明であるが、掘り方の一部が残されていた。

棺をやや斜めに据え、甕1個体が出土しているが削平を受けているために単棺であるかどうか不明である。

主軸方向　N－E75°

埋置角度　＋27°

11号甕棺墓（第19図）

墓壙の平面形態はほぼ円形を呈する。上面を大きく削平されており、不明であるが、掘り方の一部が残されていた。棺をやや斜めに据える。甕1個体が出土していたが、削平を受けているために単棺であるかどうかは不明である。

主軸方向　W－N8°

埋置角度　＋30°

12号甕棺墓（第19図）

この甕棺に南側に13号甕棺墓、14号甕棺墓、15号甕棺墓がある。墓壙の平面形態はほぼ楕円形を呈している。上面を大きく削平されており、不明であるが、掘り方の一部が残されていた。

その西壁下に深さ0.23m奥行き0.15mの横穴を掘り、棺をほぼ水平に据える。

小型甕1個体が出土しているが削平を受けているために、単棺であるかどうかは不明である。

主軸方向　E－S51°

埋置角度　＋35°

13号甕棺墓（第19図）

この甕棺の片側に14号甕棺墓、15号甕棺墓、12号甕棺墓がある。墓壙の平面形態はほぼ楕円形を呈している。上面を大きく削平されており、不明であるが、掘り方の一部が残されていた。

その東壁下に深さ0.5m奥行き0.3mの横穴を掘り込み、棺をやや斜めに据える。

甕1個体が出土しているが削平を受けているために、単棺であるかどうかは不明である。

主軸方向　S－W77°

埋置角度　＋29°

この甕棺は、西壁を14号甕棺墓と切り合っている状況から見るとこれより新しいと思われる。

14号甕棺墓（第19図）

この甕棺の東側に13号甕棺墓、15号甕棺墓、12号甕棺墓がある。墓壙の東壁を13号甕棺墓と切り合い、平面は明確ではないがほぼ楕円形を呈していたと思われる。

墓壙内に甕の小破片が残されているだけで棺の詳細については不明である。

この甕棺は、東壁を13号甕棺墓と切り合っている状況から見ると古いと思われる。

15号甕棺墓（第19図）

この甕棺の北側に12号甕棺墓、南側に13号甕棺墓、14号甕棺墓がある。

墓壙の平面形態はほぼ円形を呈している。その東

壁下に深さ0.6m奥行き0.4mの横穴を掘り込み、棺を斜めに据える。

甕（上）と甕（下）の複式棺の覆口式で、その接合部分は粘土の目張りを施す。

主軸方向　W－N34°

埋置角度　＋33°

この甕棺からは、人骨の一部と歯が出土しているが、人骨は原形を留めない。

16号甕棺墓（第19図）

墓壙の平面形態は上面を大きく削平されており、墓壙内も撹乱があり、原状を留めているかは疑問である。墓壙内に甕の小破片が残っているだけで棺の詳細については不明である。

⑵　住居跡（第17図）

甕棺を多数検出したＡ区にて確認された住居跡である。この調査区は本来深く掘り込まれている甕棺がわずかな掘り込みしか確認されないほど削平されている。

住居跡は、５ｍ×５ｍ40でありやや不定形の方形である。掘り込みは検出面から約５㎝～一番深い所で約10㎝を測る。

床は硬化面が発達しており若干南側が高くなっている。住居内に、ほぼ広がりが見られる。柱穴は２本確認できたが住居のプランからはずれており、不自然である。炉が住居の中心から南東に寄った所に位置しており浅い掘り込みを持つ。炉は焼土が詰まっているが一時的に強い火は受けているが長期間使用した跡は見られなかった。

住居の調査終了後に床面を剥いで住居の本来の掘り込みを確認したが焼土の広がりは確認できなかった。

貯蔵穴は住居の北側に寄った位置にあり、深さは床面から約30㎝を測る。

土層の断面は、ほとんど層をなしていなくて一気に埋まった状態であった。

内部からの遺物の出土は見られなかった。

〔遺物〕

住居跡から出土した遺物は床面に安定して出土した遺物のみ図示した。この住居が破棄された時期にもっとも近いものである。

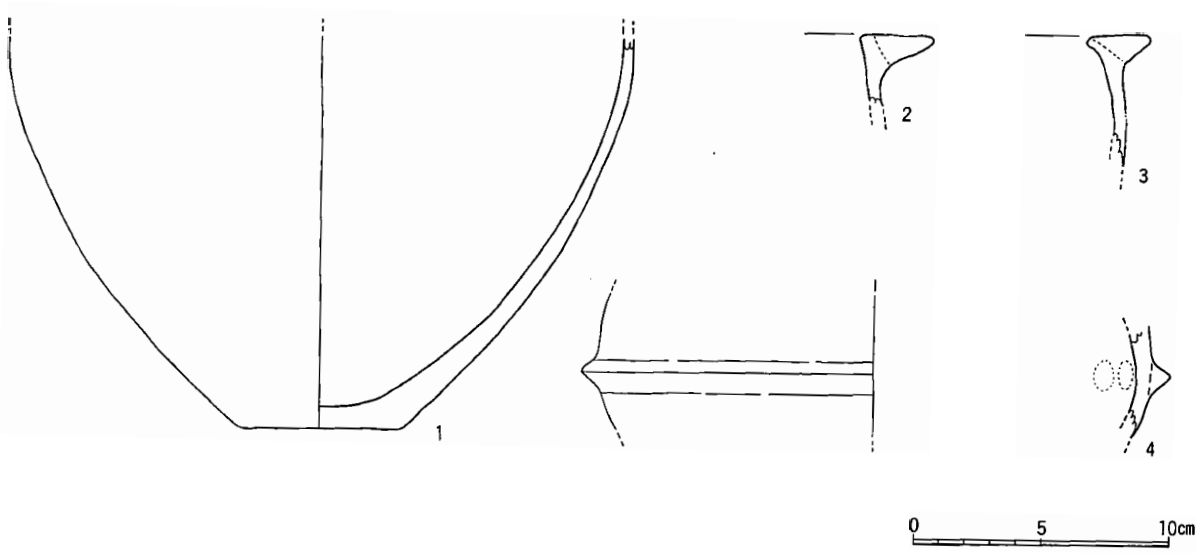
１は、底部のみの出土である。

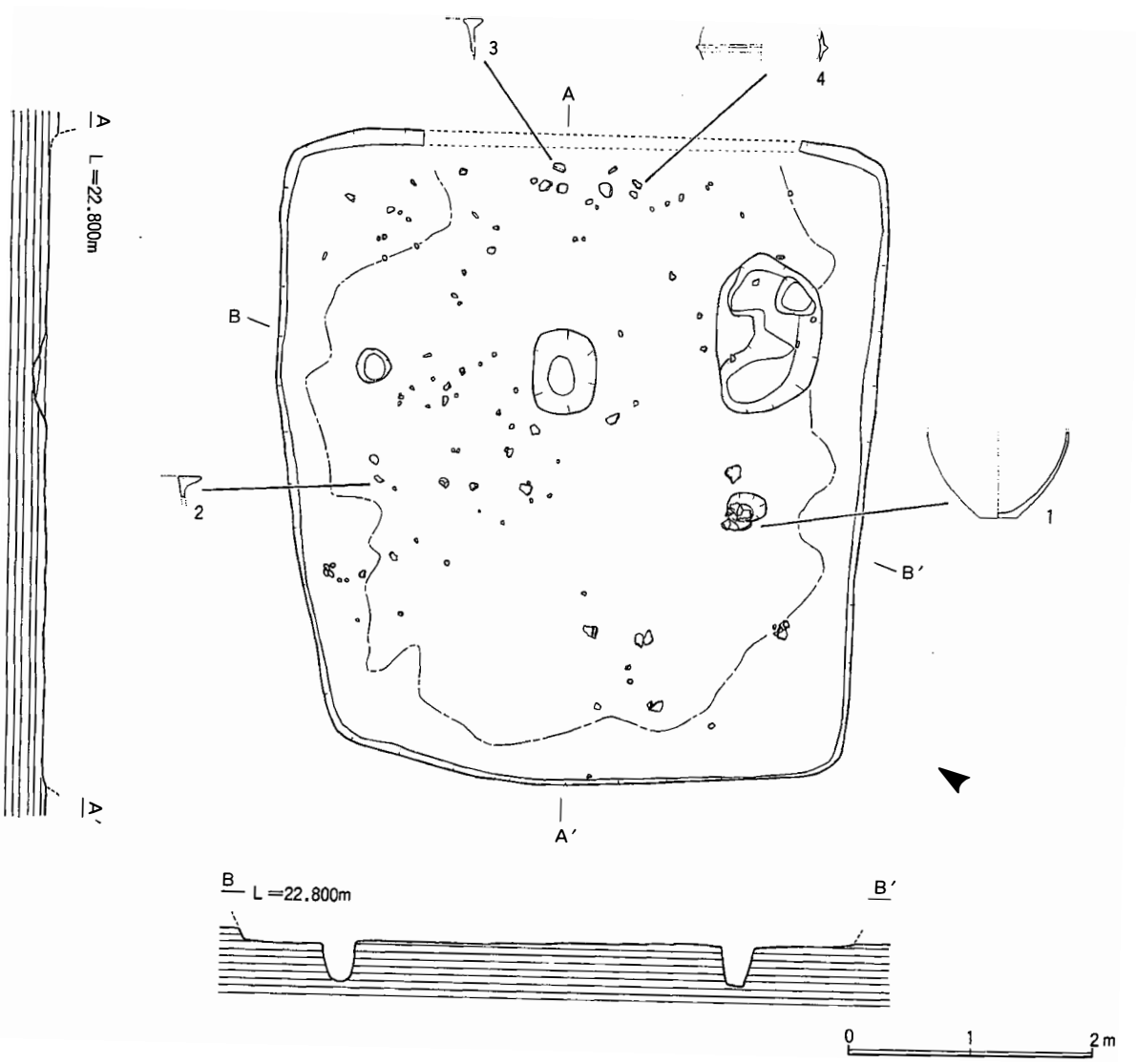
破片からの反転復元であるがほぼ胴部の最大径が分かったため推測して甕と思われる。

胴部最大径は24.5㎝を測る。

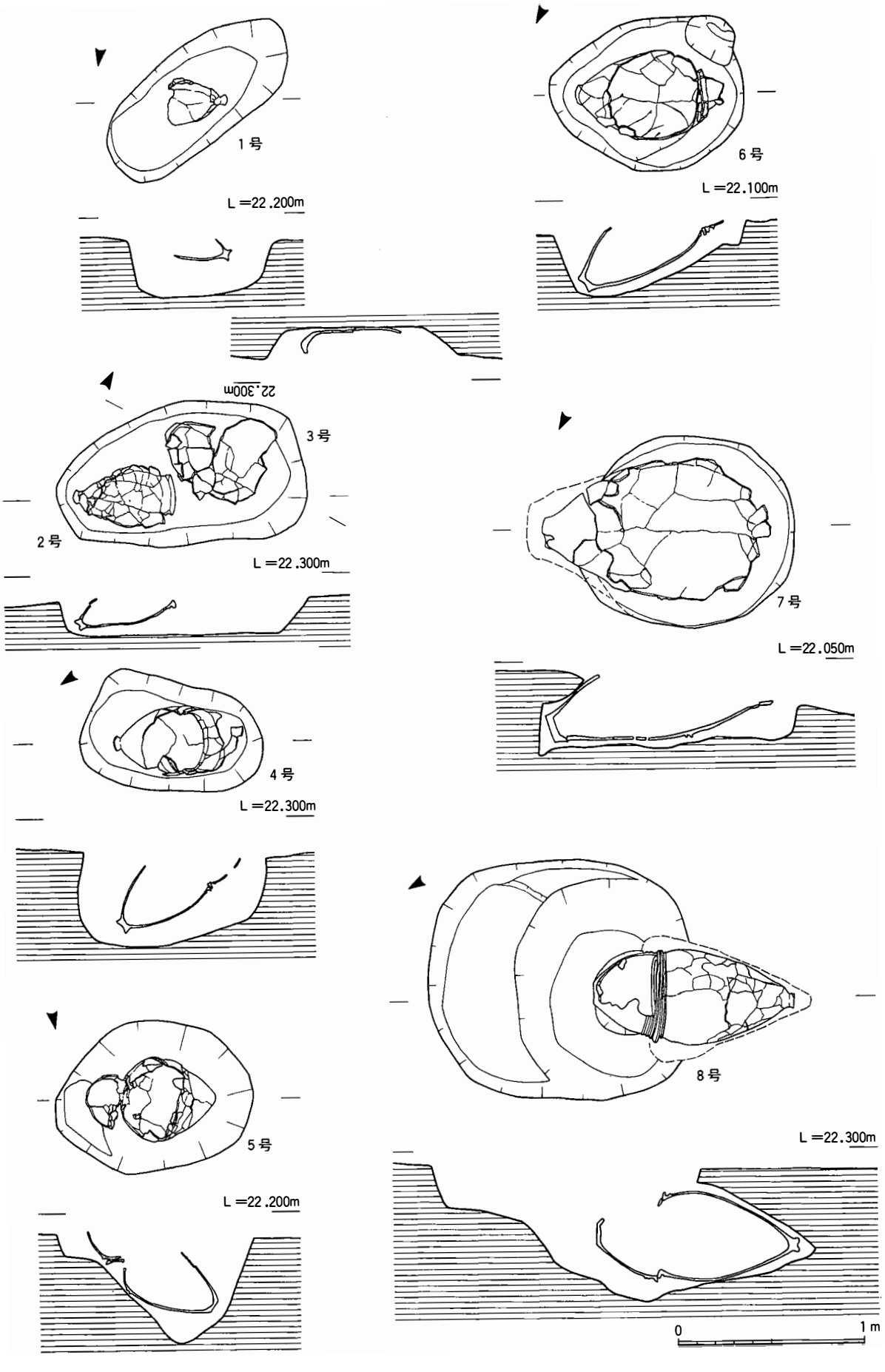
２・３は、甕の口縁である。口縁端部はやや丸みを帯びており３は内部端部がやや内側に張り出している。４は壺の胴部である。凸帯を１条巡らしている。以上、出土している遺物はすべて焼成は良好であり明るい褐色の器面である。

このことからこの住居跡は２本柱の住居であり弥生中期の中頃のものである。

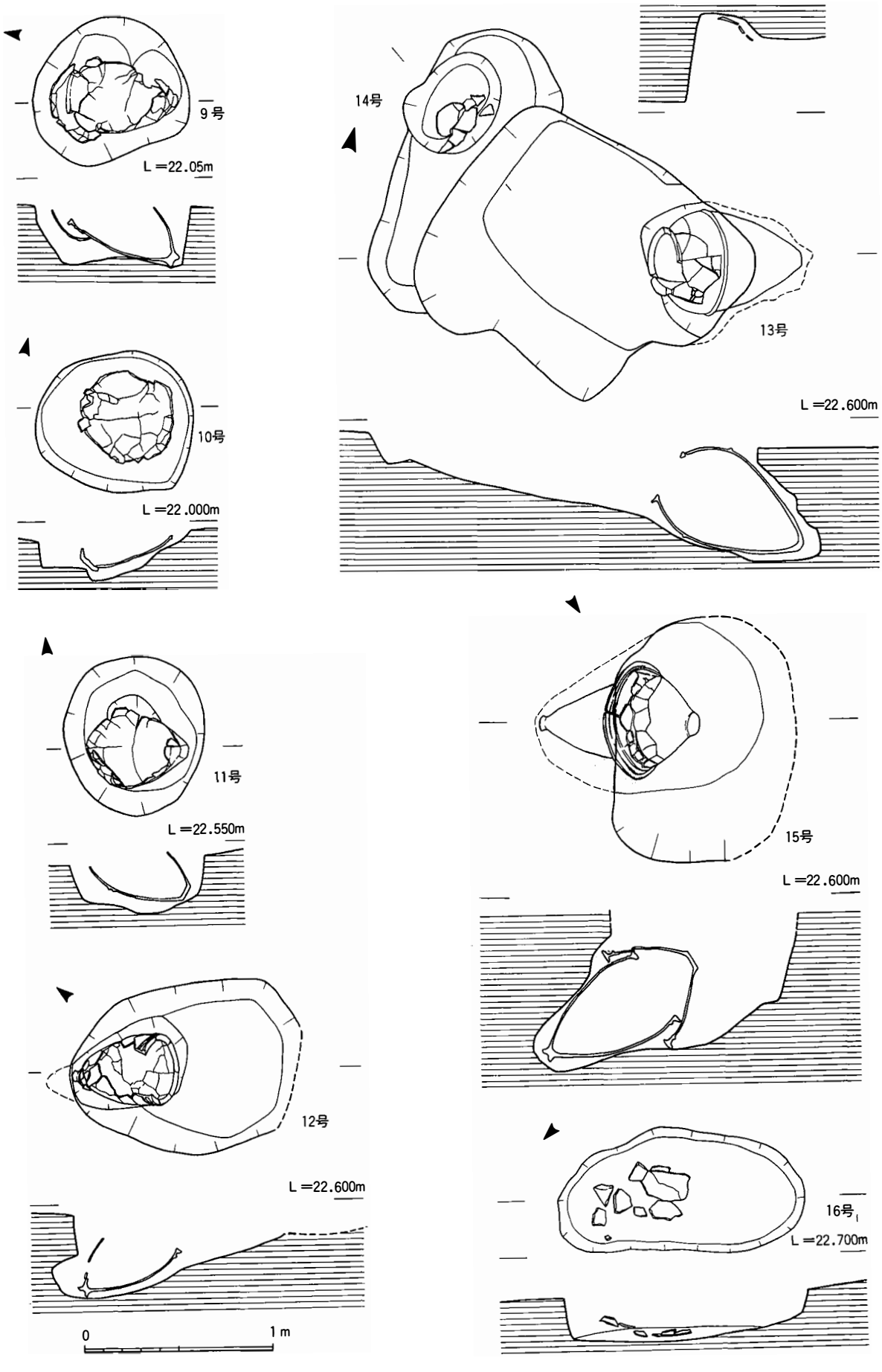




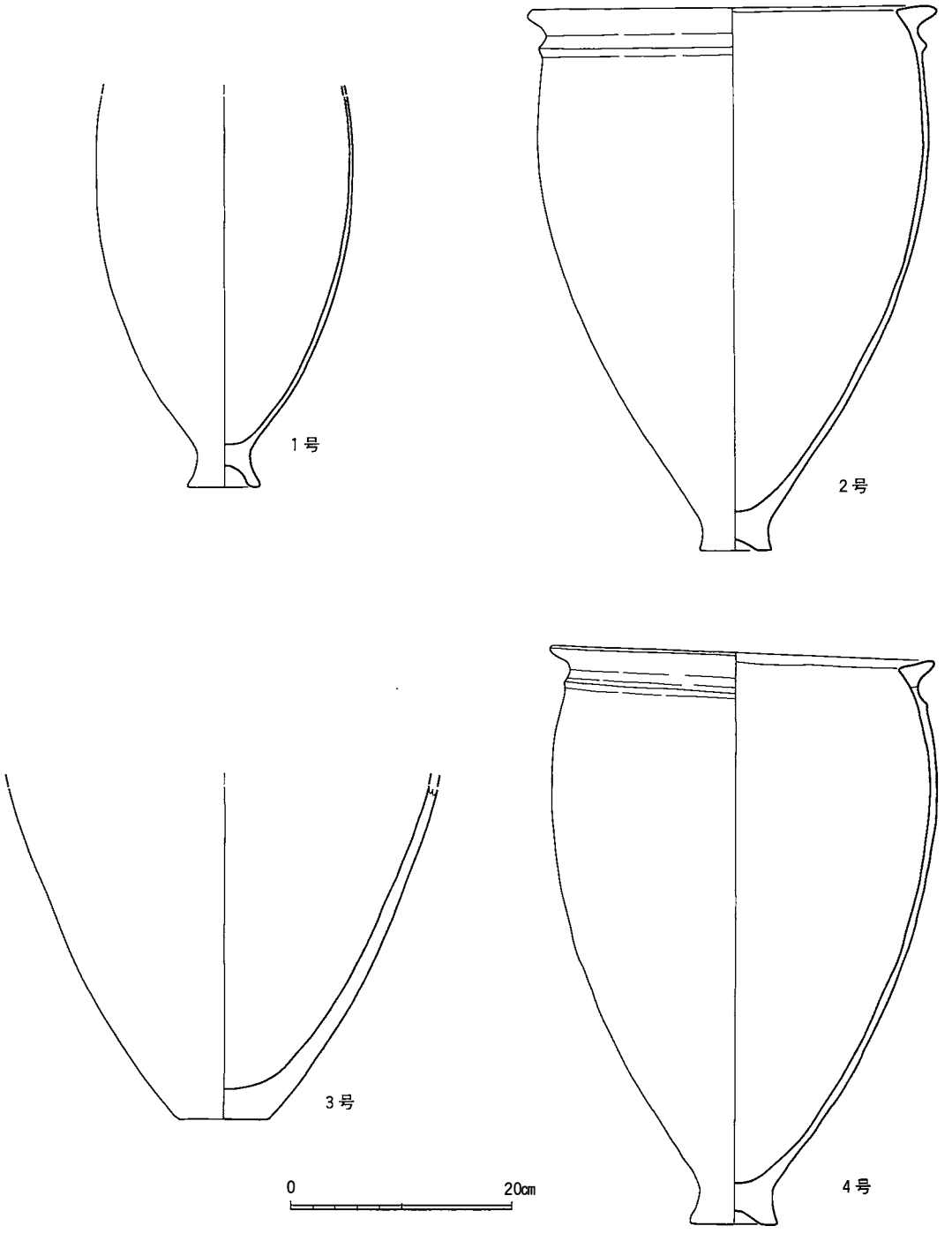
第17図　　1号住居跡実測図



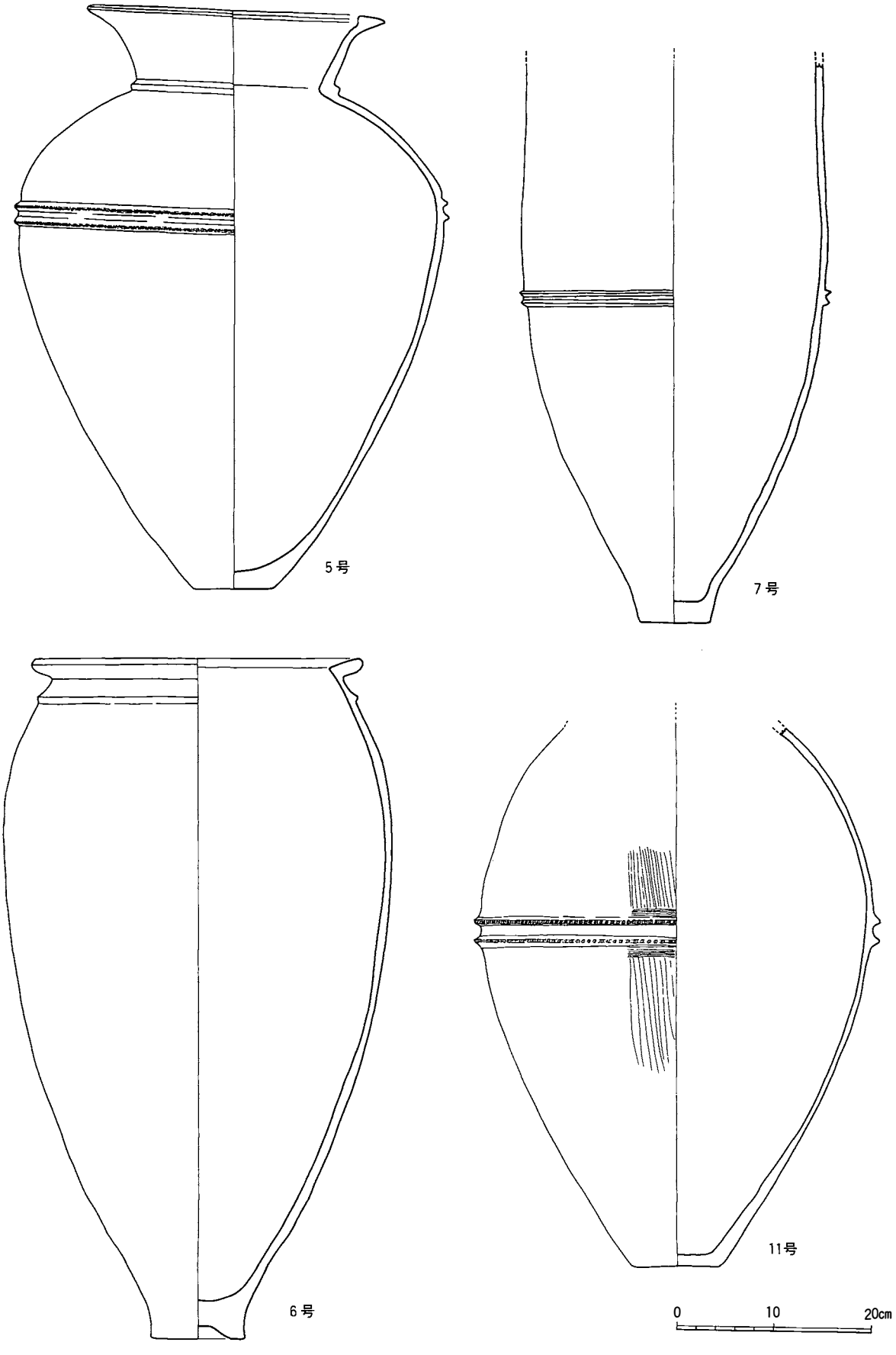
第18図　　1～8号甕棺墓実測図



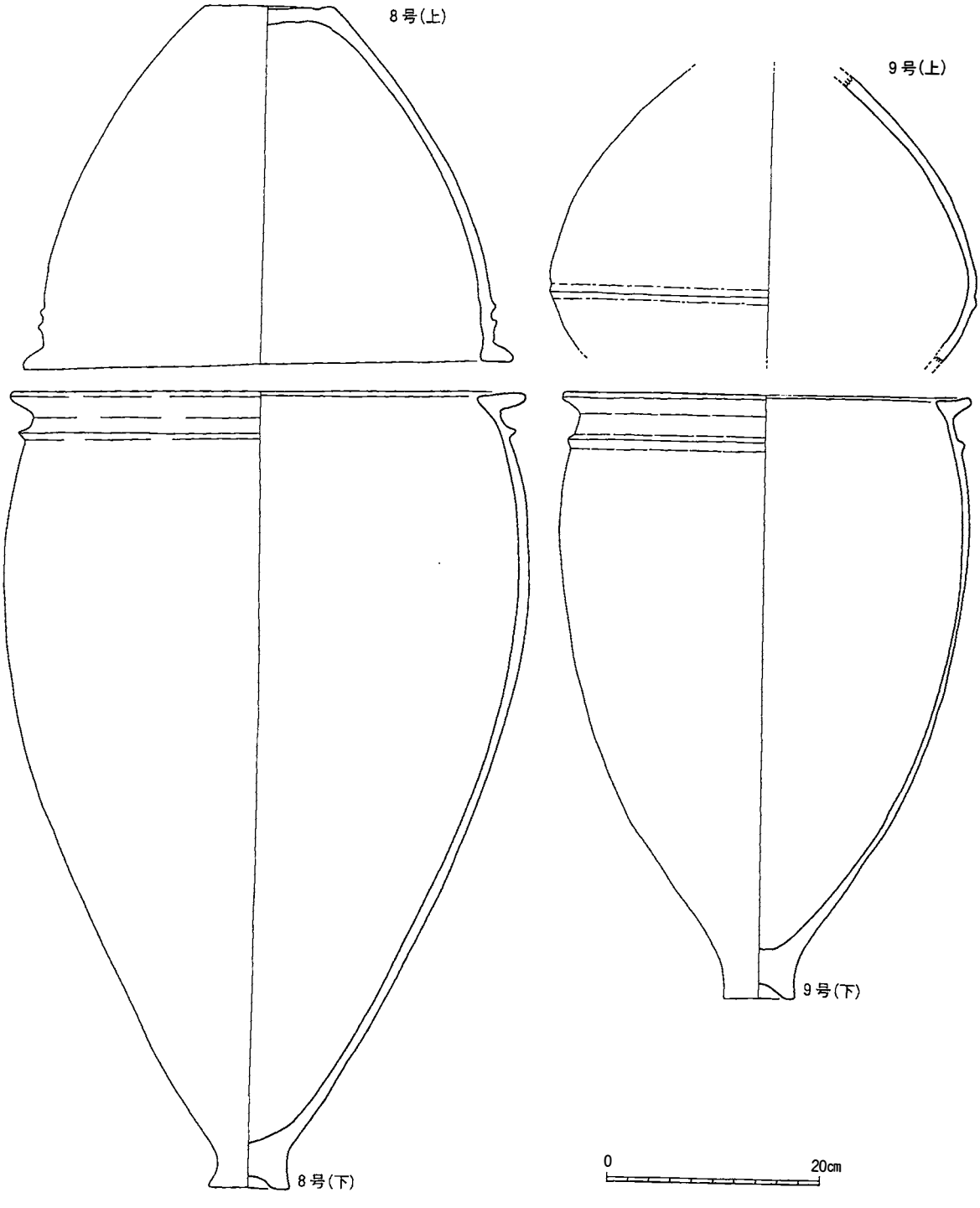
第19図　　9～16号甕棺墓実測図



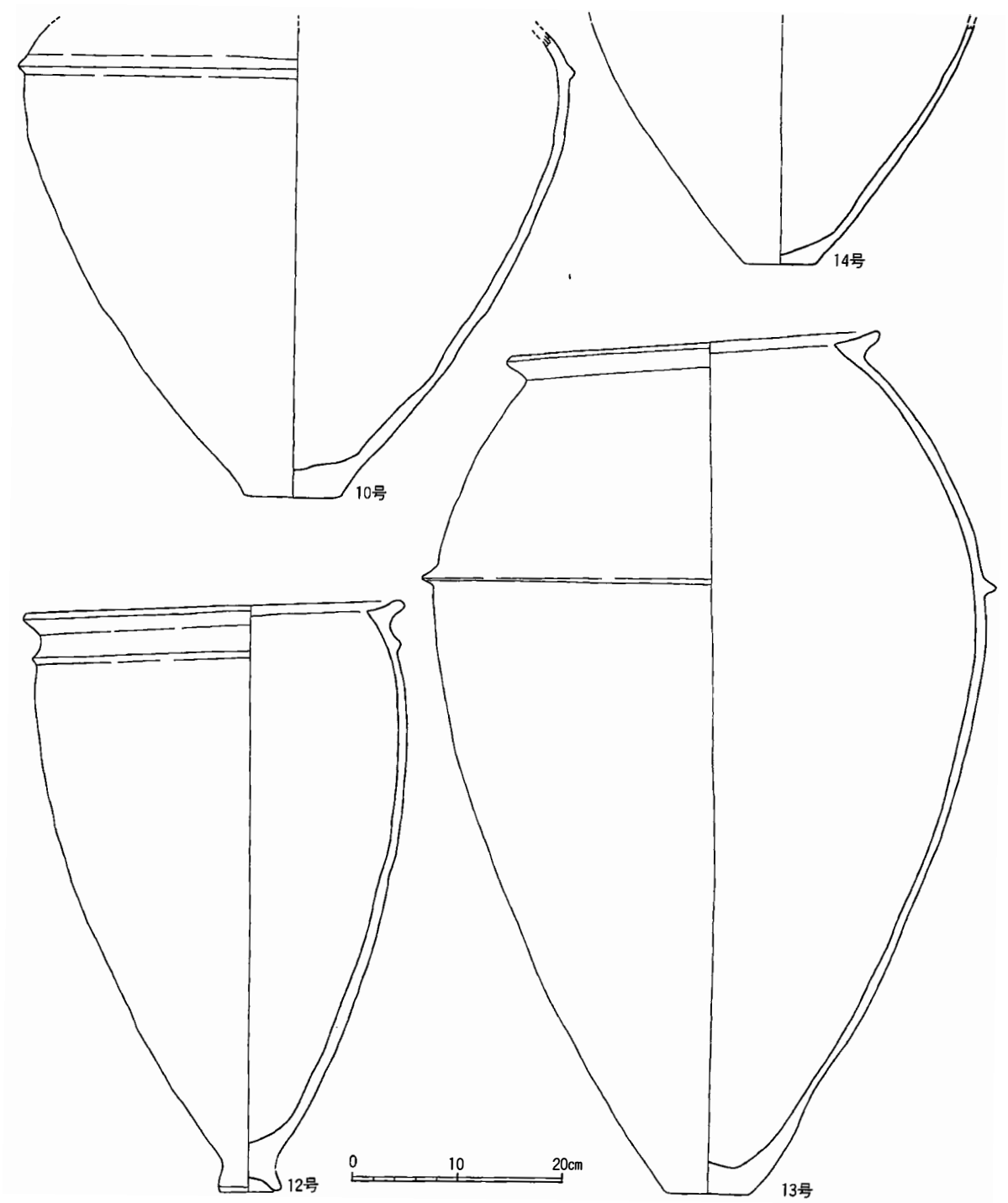
第20図　甕棺実測図 (1)



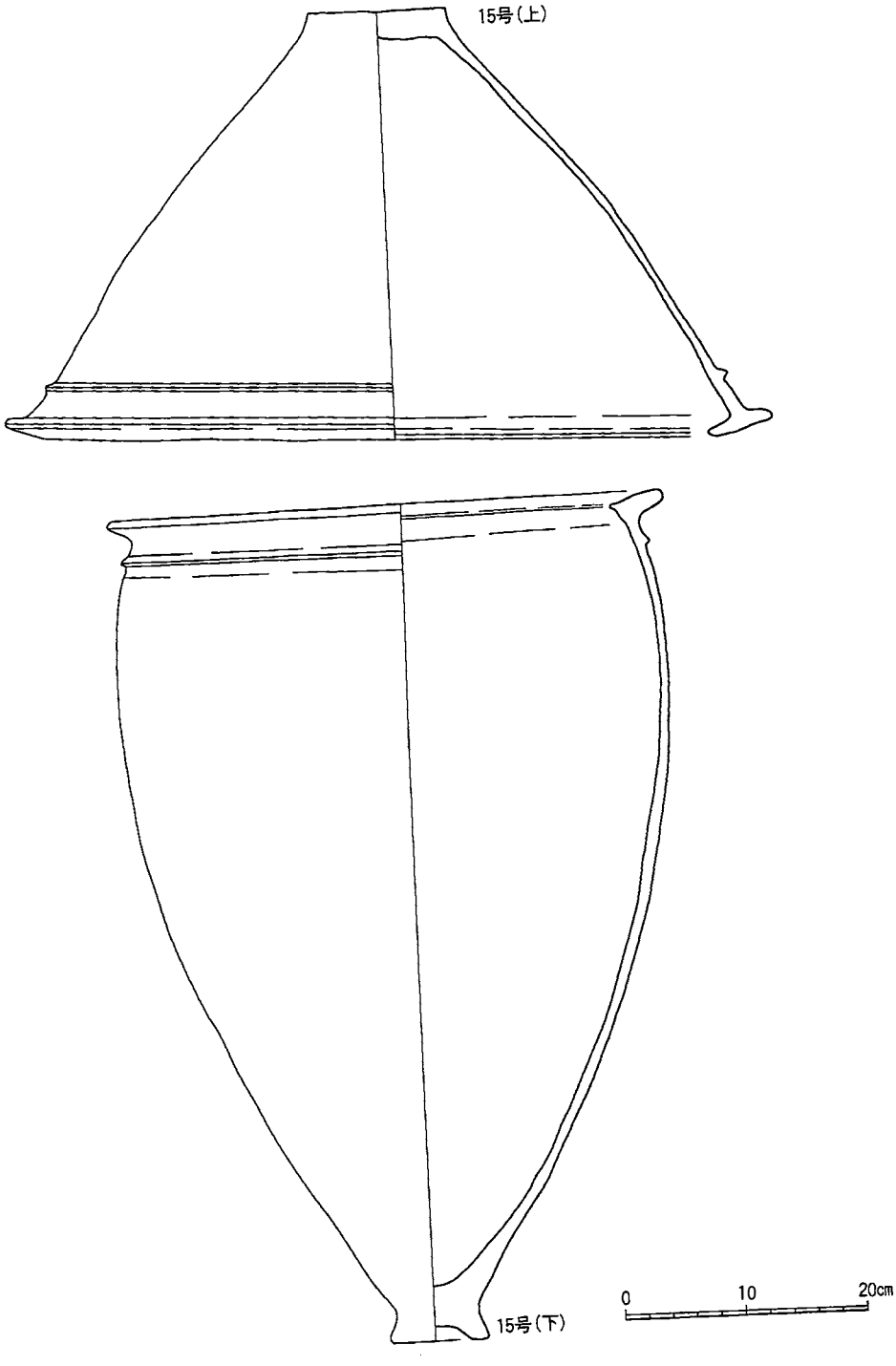
第21図　甕棺実測図 (2)



第22図　甕棺実測図 (3)



第23図　　甕棺実測図 (4)

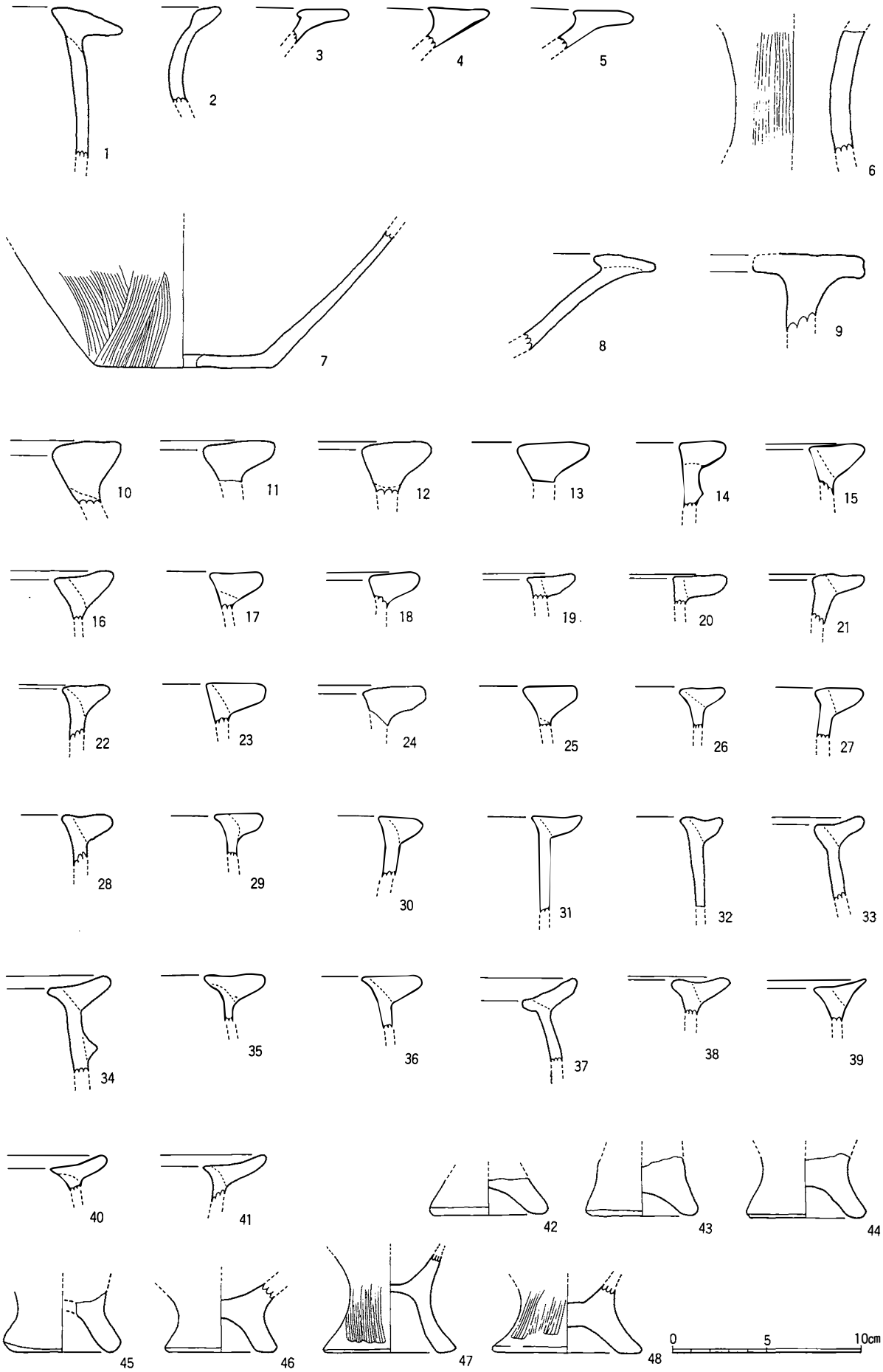


第24図　甕棺実測図 (5)

第４表　甕棺観察表（第20～24図）

番号	機種	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
1	小甕	残存器高 34.5 cm 口径(外) ——— (内) ——— 底径 6.5 cm	口縁部 欠損 凸帯 ナシ 底部 上げ底	口縁部 外面 体部ナデ、底部ハケ目 内面 ナデ 胎土 明燈色	
2	甕	器高 48.0 cm 口径(外) 36.0 cm (内) 29.4 cm 底径 6.4 cm	口縁部 逆Ｌ字形 凸帯 口縁下に１条 底部 上げ底	口縁部 ヨコナデ 外面 ナデ 内面 ナデ 胎土 褐色、細砂粒多い	
3	壺	残存器高 29.5 cm 口径(外) ——— (内) ——— 底径 8.0 cm	口縁部 欠損 凸帯 ナシ 底部 平底	口縁部 外面 ナデ 内面 ナデ 胎土 明褐色	
4	甕	器高 50.4 cm 口径(外) 33.8 cm (内) 29.0 cm 底径 7.7 cm	口縁部 逆Ｌ字形 凸帯 口縁下に１条 底部 上げ底	口縁部 ヨコナデ 外面 ナデ 内面 ナデ 胎土 黄褐色、砂粒多い	
5	壺	器高 59.4 cm 口径(外) 27.0 cm (内) 25.6 cm 底径 8.0 cm	口縁部 鋤状口縁 凸帯 刻み目突帯２条 底部 平底	口縁部 ヨコナデ 外面 ナデ 内面 ナデ 胎土 明黄褐色	
6	甕	器高 70.1 cm 口径(外) 33.3 cm (内) 270.0 cm 底径 9.6 cm	口縁部 逆Ｌ字形 凸帯 口縁下に１条 底部 上げ底	口縁部 ヨコナデ 外面 ナデ 内面 ナデ 胎土 褐色、細砂粒多い	
7	甕	残存器高 115.0 cm 口径(外) ——— (内) ——— 底径 14.3 cm	口縁部 欠損 凸帯 胴部に２条 底部 平底	口縁部 外面 ナデ 内面 ナデ 胎土 明燈色、細砂粒多い	
8	鉢	器高 34.0 cm 口径(外) 46.0 cm (内) 41.0 cm 底径 12.0 cm	口縁部 逆Ｌ字形 凸帯 逆Ｌ字形 底部 平底	口縁部 ヨコナデ 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ 胎土 明燈色	
	甕	器高 74.4 cm 口径(外) 48.2 cm (内) 40.8 cm 底径 7.3 cm	口縁部 逆Ｌ字形 凸帯 ナシ 底部 上げ底	口縁部 ヨコナデ 外面 ナデ 内面 ナデ 胎土 褐色、細砂粒多い	

9	壺 甕	残存器高 53.7 cm 口径(外) ——— (内) ——— 底径 ——— 器高 56.4 cm 口径(外) 38.0 cm (内) 32.0 cm 底径 6.8 cm	口縁部 欠損 凸帯 胴部に1条 底部 欠損 口縁部 逆L字形 凸帯 口縁下に1条 底部 上げ底	口縁部 外面 ヨコナデ 内面 ハケ目調整後ナデ 胎土 茶褐色 口縁部 ヨコナデ 外面 ナデ 内面 ナデ 胎土 褐色、細砂粒多い	
10	壺	残存器高 43.7 cm 口径(外) ——— (内) ——— 底径 6.5 cm	口縁部 欠損 凸帯 胴部に1条 底部 平底	口縁部 外面 ナデ 内面 胎土 褐色、細砂粒多い	
11	甕	残存器高 55.0 cm 口径(外) ——— (内) ——— 底径 8.6 cm	口縁部 欠損 凸帯 刻み目突帯2条 底部 平底	口縁部 外面 ナデ 内面 ナデ 胎土 明褐色	
12	甕	器高 54.7 cm 口径(外) 35.0 cm (内) 29.0 cm 底径 50.0 cm	口縁部 逆L字形 凸帯 口縁下に1条 底部 上げ底	口縁部 ヨコナデ 外面 ハケ目調整後ナデ 内面 ナデ 胎土 褐色	
13	甕	器高 75.0 cm 口径(外) 35.0 cm (内) 28.0 cm 底径 8.0 cm	口縁部 逆T字形 凸帯 胴部に1条 底部	口縁部 ヨコナデ 外面 ナデ 内面 ナデ 胎土 明褐色	
15	鉢 甕	器高 35.0 cm 口径(外) 62.4 cm (内) 51.4 cm 底径 11.5 cm 器高 68.3 cm 口径(外) 45.5 cm (内) 34.6 cm 底径 7.8 cm	口縁部 T字形 凸帯 口縁下に1条 底部 平底 口縁部 逆L字形 凸帯 口縁下に1条 底部 上げ底	口縁部 ヨコナデ 外面 ナデ 内面 ナデ 胎土 明燈色、細砂粒多い 口縁部 ヨコナデ 外面 ハケ目調整後ナデ 内面 ナデ 胎土 暗褐色、細砂粒多い	胴部を中心に煤付着



第25図　　弥生土器実測図

第５表　弥生土器観察表（第25図）

番号	器種	部分	調整	焼成	色調	胎土	備考
1	壺	口縁部	外面は、タテ方向のナデ、頸部はヨコナデ 内面は、粗いナデ 口縁上面は、丁寧なヨコナデ	良好	外面は：淡黄褐色 内面は：暗赤褐色	砂粒を含む	
2	壺	口縁部	外面は、ヨコ方向の丁寧なナデ後、タテ方向のみがき 内面は、ヨコ方向のナデ	良好	外面は：暗赤褐色 内面は：赤燈色	大粒の砂粒を含む	丹塗り
3	鉢	口縁部	内外面とも、ヨコナデ	良好	外面は：黒褐色 内面は：暗黄褐色	微砂粒を含む	
4	鉢	口縁部	内外面とも、ヨコナデ	良好	外面は：暗黄褐色 内面は：暗黄褐色	砂粒を含む	
5	高坏	口縁部	内外面とも、丁寧なナデ	良好	外面は：明赤褐色 内面は：明赤褐色	微砂粒を含む	丹塗り
6	器台		外面は、タテ方向のハケメ 内面は、粗いナデ	良好	外面は：黄褐色 内面は：赤褐色	砂粒を含む	
7	壺	胴部～底部	外面は、細かいハケメ 底部は、粗いナデ 内面は、粗いナデ	良好	外面は：黄褐色 内面は：黄褐色	砂粒を含む	底部に穿孔
8	鉢	口縁部	外面は、タテ方向のナデ 口縁部は、ヨコナデ	良好	外面は：赤褐色 内面は：赤褐色	砂粒を含む	丹塗り
9	甕	口縁部	外面は、タテ方向のハケメ 口縁部は、ヨコナデ	良好	外面は：淡褐色 内面は：淡褐色	砂粒を含む	丹塗り
10	甕	口縁部	口縁部は、ヨコナデ	良好	外面は：黄褐色 内面は：黄褐色	砂粒を含む	
11	甕	口縁部	口縁部は、ヨコナデ	良好	外面は：黄褐色 内面は：黄褐色	砂粒を含む	
12	甕	口縁部	口縁部は、ヨコナデ	良好	外面は：黄褐色 内面は：黄褐色	砂粒を含む	
13	甕	口縁部	口縁部は、ヨコナデ	良好	外面は：黄褐色 内面は：黄褐色	砂粒を含む	
14	甕	口縁部	口縁部は、ヨコナデ	良好	外面は：明黄褐色 内面は：明黄褐色	砂粒を含む	
15	甕	口縁部	口縁部は、ヨコナデ	良好	外面は：明黄褐色 内面は：明黄褐色	微砂粒を含む	
16	甕	口縁部	内外面とも、ヨコナデ	良好	外面は：赤褐色 内面は：赤燈色	微砂粒を含む	

番号	器種	部分	調　　整	焼成	色　　調	胎　土	備　考
17	甕	口縁部	内外面とも、ヨコナデ	良　好	外面は：淡褐色 内面は：淡褐色	砂粒を含む	
18	甕	口縁部	内外面とも、ヨコナデ	良　好	外面は：淡黄色 内面は：淡黄色	砂粒を含む	
19	甕	口縁部	内外面とも、ヨコナデ	良　好	外面は：赤褐色 内面は：赤褐色	微砂粒を含む	
20	甕	口縁部	内外面とも、粗いナデ	良　好	外面は：黄褐色 内面は：黄褐色	砂粒を含む	
21	甕	口縁部	内外面とも、ヨコナデ	良　好	外面は：淡褐色 内面は：淡褐色	砂粒を含む	
22	甕	口縁部	内外面とも、丁寧なヨコナデ	良　好	外面は：淡褐色 内面は：淡褐色	微砂粒を含む	外面に、煤が付着
23	甕	口縁部	内外面とも、丁寧なヨコナデ	良　好	外面は：淡褐色 内面は：淡褐色	微砂粒を含む	
24	甕	口縁部	内外面とも、丁寧なヨコナデ	良　好	外面は：淡褐色 内面は：淡褐色	微砂粒を含む	
25	甕	口縁部	内外面とも、ヨコナデ	良　好	外面は：明褐色 内面は：明褐色	砂粒を含む	
26	甕	口縁部	内外面とも、ヨコナデ	良　好	外面は：明褐色 内面は：明褐色	砂粒を含む	
27	甕	口縁部	内外面とも、ヨコナデ	良　好	外面は：明褐色 内面は：明褐色	砂粒を含む	丹塗り
28	甕	口縁部	内外面とも、ヨコナデ	良　好	外面は：淡黄褐色 内面は：淡黄褐色	砂粒を含む	外面に煤が付着
29	甕	口縁部	内外面とも、ヨコナデ	良　好	外面は：淡黄褐色 内面は：淡黄褐色	砂粒を含む	
30	甕	口縁部	内外面とも、ヨコナデ	良　好	外面は：淡褐色 内面は：淡褐色	砂粒を含む	
31	甕	口縁部	内外面とも、ヨコナデ	良　好	外面は：淡褐色 内面は：淡褐色	砂粒を含む	外面に、煤が付着
32	甕	口縁部	内外面とも、ヨコナデ	良　好	外面は：淡褐色 内面は：淡褐色	砂粒を含む	外面に、煤が付着
33	甕	口縁部	内外面とも、ヨコナデ	良　好	外面は：淡褐色 内面は：淡褐色	砂粒を含む	外面に、煤が付着
34	甕	口縁部	内外面とも、丁寧なヨコナデ	良　好	外面は：淡黄褐色 内面は：淡褐色	砂粒を含む	
35	甕	口縁部	内外面とも、ヨコナデ	良　好	外面は：明褐色 内面は：淡褐色	砂粒を含む	
36	甕	口縁部	内外面とも、ヨコナデ	良　好	外面は：暗黄褐色 内面は：暗黄褐色	砂粒を含む	外面に、煤が付着

番号	器種	部分	調　　整	焼成	色　　調	胎　土	備　考
37	甕	口縁部	内外面とも、ヨコナデ	良　好	外面は：淡褐色 内面は：淡褐色	砂粒を含む	外面に、煤が付着
38	甕	口縁部	内外面とも、ヨコナデ	良　好	外面は：淡褐色 内面は：淡褐色	砂粒を含む	
39	甕	口縁部	内外面とも、ヨコナデ	良　好	外面は：淡黄褐色 内面は：淡黄褐色	砂粒を含む	
40	甕	口縁部	内外面とも、ヨコナデ	良　好	外面は：明黄褐色 内面は：明黄褐色	砂粒を含む	
41	甕	口縁部	内外面とも、ヨコナデ	良　好	外面は：明黄褐色 内面は：明黄褐色	砂粒を含む	
42	甕	底　部	内外面とも、ナデ	良　好	外面は：淡褐色 内面は：淡褐色	砂粒を含む	
43	甕	底　部	内外面とも、ヨコナデ	良　好	外面は：明茶褐色 内面は：明茶褐色	砂粒を含む	
44	甕	底　部	内外面ともナデ	良　好	外面は：明茶褐色 内面は：明茶褐色	砂粒を含む	
45	甕	底　部	外面は、タテ方向のハケメ 内面はナデ	良　好	外面は：淡褐色 内面は：淡褐色	砂粒を含む	
46	甕	底　部	内外面とも、ナデ	良	外面は：淡褐色 内面は：淡褐色	砂粒を含む	
47	甕	底　部	内外面とも、ナデ	良　好	外面は：淡褐色 内面は：淡褐色	砂粒を含む	
48	甕	底　部	外面は、タテ方向のハケメ 内面はナデ	良	外面は：淡褐色 内面は：淡褐色	砂粒を含む	

第４節　古墳時代の遺構と遺物

調査について

この遺跡の試掘調査で確認されていた古墳は１基であったが、調査開始時に表土剥ぎを行いＡ調査区において円墳１基、さらに調査中に工事区域より１基が検出され、合計３基の円墳が確認され調査を行った。古墳名は、調査中通し番号では付していなかったため、整理作業のなかで１号墳から３号墳まで明記した。１号墳はＡ区に位置し、２号分は、Ｄ区に位置し、３号墳はＣ区に位置する。

いずれも、墳丘は後世の削平を受けており残っていなかった。そのため、周溝部の確認及び主体部の調査を主に行った。

⑴　１号墳

周溝部（第26図）

１号墳は、菊池川に近いＡ区にて検出された。今回調査したなかでは一番南側に位置している古墳である。周溝外径は13.5mを測る小型の古墳であり、平面形はやや不整形な円墳である。陸橋部の中心を通る主軸の方角はＳ－39°－Ｅを測る。周溝幅は、ほぼ均一で1.20mを測り、深さも0.5mから0.6mを測る。この地が古くから１枚の畑として使用されていた為か、削平を受けつつもほぼ全周に渡り、高低差を持たずに現在までかろうじて残されていた。周溝の断面は逆台形を呈し、周溝内堆積土は４層に区分出来た。

周溝内遺物は、ほぼ全周に渡り須恵器、土師器片の出土があった。古墳に伴う遺物はすべてⅠ層・Ⅱ層からの出土である。Ⅲ層は周溝掘削時、若しくは直後の堆積土と考えられる。

主体部（第27図）

墳丘のほぼ中心部に位置しており、掘方はこの地の地山である黄色粘土層にまで掘り込まれている。

主体部も周溝部と同様に削平を受けているため、石棺本体の本来の姿は確認出来なかった。しかし、掘方の埋土からは多くの凝灰岩の破片が出土した。

主体部は削平を受ける際に同時に撹乱も合わせて受けているため、埋土の状態は本来の姿ではなかった。この埋土中からは凝灰岩片に混じって鉄製品・須恵器・土師器片が出土した。さらに、この埋土中にはガラス小玉が含まれると考えられるので、１㎜×１㎜のふるいを使いすべての土を精査した。その結果この埋土中からは直径約８㎜の黒色小玉が16個、直径約４㎜の緑色の小玉が40個、さらに濃緑色の異形玉が１個検出された。この撹乱を受けた埋土を取り除くと、主体部の掘り方が確認できた。

この掘方から想定される主体部は横口式石棺と思われる。さらに出土した凝灰岩の一つに家形を呈する妻入り部が認められるため棺蓋の形式から横口式家形石棺であったと考えられる。

掘方の平面形から、棺身2.15m、棺幅0.95m残存高0.11mを測り、横口式家形石棺の出土例から見たらかなり小規模のものである。さらに、石棺主体部底面には精査の結果幅11cmの凝灰岩製の切石が使用されていた痕跡が確認出来た。さらに、石棺本体の前部両側には袖石が長さ0.65m幅0.11mで存在していた痕跡を確認した。これは、後述するが同町の江田船山古墳の主体部と同形式である。主体部の屍床面には撹乱土が堆積していたが上部より１枚ずつ剥ぐ精査の結果、須恵器片・土師器片が床に接する状態で出土した。この破片は上部の撹乱土の中から出土している須恵器片と接合関係が認められた。この結果、この須恵器は元来主体部に供献されていたものと考えられる。

主体部床面からはガラス小玉が黒色１個、緑色５個が主体部のほぼ中央部より検出された。しかし、これも本来の位置ではないと判断される。

屍床面は地山を割り出しており、主体部石材の底面より８cm高い位置に作られている。屍床面の土は上部が撹乱を受けた時に、同時に動いており追葬の確認は出来なかった。主体部は本来、古墳の羨道部に接続しているがここでは墳丘の削平のため羨道は主体部側にわずかに残っているだけであり長さ1.20m（残存）、幅1.20m（残存最大幅）で緩やかに主体部へ傾倒している。

傾斜角度は22°である。

石棺石材（第32図）

主体部は破損を受けておりその姿は留めていない。石材は大半は小破片になっておりわずかにここで報告するもの１点のみが姿を残している。家形石棺妻入り部分も一部残っているが図示できなかった。この石棺の石材はこの地で多く見られる凝灰岩である。石材は、幅11cmを測り、板状に加工されている。両面とも丁寧な削り跡があり、石棺内部であったと思われる面は朱が全面に塗られている。

石材は、石棺の側壁部分であり一部に角部を残す。本来は石棺内部全体に朱が施されていたものと思われる。主体部石棺に残されている石材部分の幅も11cmでありこの幅で作成された石材が使用されていたのが確認出来た。

出土遺物

周溝及び主体部から出土したもので、須恵器・土師器・玉類・鉄器がある。主体部は撹乱を受けてはいるが出土遺物は本来、この古墳に伴っていたものと思われる。

須恵器（第28図）

器種としては、瓹、小型壺、樽型瓹、透し付樽型瓹がある。

瓹

１は主体部撹乱よりの出土である。他の出土須恵器とほぼ同時期のものでありこの古墳に伴う遺物である。底部はやや尖り気味であり胴部の最大径は上部に位置し肩部が張った器形である。外上方へゆるやかに外反する口頸部を持ち、口縁部と頸部の境界に１条の稜線を有する。頸部に７条、胴部に５条の櫛描波状文を施す。頸部と胴部の接続には指による撫で付け接続を行う。口径7.7cm、器高10.6cm、最大胴部径11.4cmを測る。器面の胎土は緻密で、焼成も硬質なものである。

小型壺

２も主体部撹乱からの出土である。底部はやや尖り気味であり、胴部の最大径は上部に位置し肩部が張った器形である。口縁部と頸部を境界にし、やや太い１条の稜線を有する。この稜線を境にして口縁部は直立に立ち上がりを示し、口縁端部にてやや外反する。器面の胎土は緻密であり焼成は良好である。器形にはこの稜線以外の装飾は施さず単調に仕上げている。

透かし付き樽型瓹

３も主体部からの一括遺物である。器種は基本形として樽型瓹であるが両側に透しが付き樽の容器の部分は全体幅の約１/３である。口縁部は胴部より外反気味に立ち上がり途中１条の太い稜線を有する。口径9.2cm、器高19.3cm、幅25.8cmである。さらに容器として使用できる幅は外径10.3cm、内径9.4cmである。透しの部分は、端部にて11.9cm、容器部との接続部分で13.8cmを測る。

装飾は上部から下部にかけてすべて６条の櫛描波状文を施す。胴部には６本の櫛描波状文の存在が考えられる。透し部分には図示している分だけでも５本の櫛描波状文が見られ、もう片方の分まで入れれば10本の存在が考えられる。胴部、透し部の櫛描波状文は総数16本である。

両側の透し部とは２本の稜線及び２本の沈線により区画される。透し部はまず、全体形を作り上げた後透し部を切り込んでいる。切り込みは鋭利な刃物で丁寧に施され、一部裏面に痕跡を残す。透しは両側に10ヶ所ずつ施されている。側面は直径11.9cmを測る円周部に装飾が施される。ここでも透しを中心とし、縦方向に6.5cm幅0.8cm、横方向に横2.7cm縦0.8cm、更に斜め方向から縦1.4cm横0.7cmの透しを有する。断面形態から図面の左の方が厚みをもっており右に行くに従いやや薄くなる。さらに側面の樽の蓋部の厚みが左が厚く右は薄くなっている。これは、製作時の順序を示しており左を下にして立てた状態で製作していることを意味している。そのため、透し部も全体を作り上げた後、切り込みを入れたと思われる。口縁部は全体形が完成した後、別に製作され接続されたようである。この透し部分に切られる様に刺突文が確認でき、４ヶ所見られる。

樽型瓶

４も主体部の一括遺物である。胴部縦15.5cm横28.8cmを測る。口縁部は今回出土していない。中央部の注口部も確認出来なかったが、沈線の位置及び他の出土遺物例などから、沈線が２本から１本に移る位置を注口部として位置付け復元した。器形は中央部から端部にかけてほぼ平行をなし、外側の沈線部から急に端部にかけて狭まる。稜線は中央部に浅い沈線により区切られ１本ある。これをほぼ中央であると判断する。中央部よりに２本の稜線が存在し３本の浅い沈線により作り出されている。その外側にさらに２本の稜線を有し、３本の沈線を持つ。このどちらかの稜線部ともに沈線は１周はせず、途中途切れながら巡らされている。

この稜線及び沈線に区切られているところには中央部寄りの２区画に５条を基本とする櫛描波状文があり端部に近い区画は、４条の櫛描波状文が入る。それぞれ３本ずつ巡っており、器面全体で計18本が想定される。この土器でも断面形態から製作時の上下関係が分かると思われるが、破片出土であった。

土師器（第29図）

器種は、盌型土器、甕、複合口縁壺、小型丸底壺、高坏がある。

出土地点は主体部と周溝内とに分けられる。

盌形土器（１～７）

出土地点は全て周溝部からの出土遺物である。体部はやや深く、底部は丸底である。全体に丸みを帯び口縁部は端部で短く外弯する。器面調整は外面に刷毛目調整の後ヨコナデ、内面はヘラ削りのあと横ナデにより丁寧に仕上げている。

壺形土器（13）

周溝部からの出土遺物である。

体部は出土していないため不明であるが、口縁がラッパ状に広がる広口壺である。

複合口縁壺（14・15）

壺については、器種のバリエーションが多く現在まで多数報告されてきた。

こでは２点出土している。出土地点は周溝部である。14は口縁部のみの出土である。

口縁部から伸びる部分からの推定では球形に近いと思われる。頸部はややくびれており、口縁部はわずかに外弯し短く立ち上がる。頸部から口縁部外内面は、刷毛目のあと、ヨコナデが施される。

別地点で出土している15と同時に観察すると体部は球形を呈しているものと思われる。

高坏（11・12）

坏部、脚部とも各１点出土している。出土地点は両方とも主体部一括である。

坏部は残されている部分のみの観察から上半部と下半部を接合して作られたものである。接合部には弱い稜線が残る。口縁端部の形式は不明である。脚部は上半部との接合面から下にかけてやや膨らみながら広がり裾部にいたって明瞭な角を持ち外反する。

小型丸底壺（８・９・10）

３点出土しているがそのうち２点は主体部からの一括遺物である。もう１点は周溝部より出土している。

８は、底部がやや尖り気味の丸底をなしている。胴部は最大径が上部にあり底に行くに従い狭まっている。口縁部はやや外反する。調整は外面は刷毛目のあとナデ調整をおこなう。内面はナデ調整を行っているが輪積みの痕跡が残されており口縁部と胴部の境界には明確に稜が残される。８と10は、胴部が球体を呈している。底部は尖底をなしている。

９はやや底部が丸い状態であり８と10ほど胴部が球体ではない。口縁部は短く上方に外反し端部は丸い。器面調整はほかと同様に丁寧な仕上げではない。

鉄器（第31図）

鉄製品は主体部から２点出土している。１は、主体部撹乱土内一括の鉄鏃である。鏃身は２個に折れた状態で出土した。接合の結果１本の鏃身であると判明した。現存長13.5cm、身幅1.95cm、厚さ0.2cm、26.1ｇを測る。鏃身の茎部には木質が良好な状態で

残されている。

2は、屍床面に密着する状態で出土している。残存状態は良好であり茎部には木質を残している。現存長8.0cm、身幅1.9cm、厚さ0.7cmである。刃部は砥ぎ減りは見られないが、先端部はやや外反気味に彎曲する。刃部長4.3cmを測り、茎部は木質残部が2.3cm、木質が残っていない茎部1.4cmを測る。刃部は錆がほとんどなく厚さは0.1cmである。

⑵　**2号墳**（第33図）

調査地区はA区の北側に位置する。この調査区は最初から設定していたものではなく工事中に表土を剥いだ時、偶然発見されたものである。そのため急遽D区として設定した。直径19.3mを測り不整形の

第6表　横口式家形石棺（妻入）地名表

番号	古墳名	所在地	墳形	墳丘規模	棺内出土遺物	出土須恵器	備考
1	石櫃山古墳	福岡県久留米市高良内町	前方後円墳		管玉・蕨手刀子・刀子		円筒・形象埴輪
2	石人山古墳	福岡県八女郡広川町	〃	130m	不明	特殊器台（TK-73）	武装石人・装飾古墳
3	浦山古墳	福岡県久留米市上津町二軒茶屋	〃（帆立貝形）	60m	(伝)刀・剣・勾玉・金環	蓋坏・高坏・器台・甕・壺（TK-23）	円筒埴輪装飾古墳
4	西原古墳	佐賀県佐賀市久保泉					石製品
5	西隈古墳	佐賀県佐賀市金立町西隈	円墳				円筒埴輪、装飾古墳
6	江田船山古墳	熊本県玉名郡菊水町江田	前方後円墳	61m	鏡・刀・剣・玉類・冠・帯金具ほか	高坏	羨道付設
7	石之室古墳	熊本県下益城郡城南町塚原	円墳	現存径20m	須恵器片		石製品・装飾古墳・羨道付設
8	北原1号墳	〃	（円墳？）		鉄鏃・須恵器		石製品・羨道部付設
9	36号方形周溝墓	〃	方形周溝墓	墳丘部内径9.30m×8.70m			羨道付設
10	丸山8号墳	〃	円墳	墳丘部内径9.70m×9.40m			羨道付設
11	丸山34号墳	〃	〃	墳丘部内径9.60m×10.10m			
12	上の原1号墳	〃	〃	直径　約14m	須恵器		羨道付設
13	大道夫婦塚3号墳	熊本県下益城郡松橋町古保山大道	〃	墳丘部内径16.20m	鉄鏃・小玉		羨道付設（？）
14	姫塚古墳	熊本県玉名郡菊水町瀬川中原	〃				
15	竈門寺原1号墳	熊本県玉名郡菊水町竈門字寺原	〃	墳丘部内径11.5m	須恵器・刀子・鉄鏃・ガラス玉・異形玉	瑕・小形広口壺・透かし付き樽形瑕・樽形瑕	羨道付設

円墳である。陸橋部の中心をとおる主軸は、W－78°－Sを測る。周溝部の幅は約1mでありほぼ全体とも均一である。周溝部の断面は逆台形を呈する。主体部は古墳の主軸とずれておりW－50°－Sを主軸とする。陸橋部は東に面しており削平の関係で南側の周溝部がやや浅くなっている。

主体部（第34図）

墳丘のほぼ中心部に位置しており、掘方は1号墳と同様に黄色粘土層まで掘り込まれている。

全長2.2m、最大幅1.1m（撹乱部65cm）で深さ約20cmである。主軸は周溝部のN－70°－Eに対しN－45°－Eとやや南側に振れている。

主体部は1号墳と同様に撹乱を受けているため本来の姿は留めていなかった。埋土の状態も同様で遺物の出土位置も分からない状態である。石棺の石材は凝灰石であったらしく凝灰石片が少量出土した。石棺の掘り込み部も検出できたが1号墳ほど残存状況は良くなかった。主体部からの出土遺物はわずかに滑石特有孔円盤が2点であった。

出土遺物（第34図）

出土遺物は主体部埋土の一括として、滑石製有孔円盤が2点のみであった。1は最大長1.8cm、最大幅2.1cm、厚さ0.1cm、重さは1.1gである。やや不整形の円形を呈しておりほぼ中央部に2ヶ所の穿孔が行われている。器面は表面整形のための調整が行われており斜め方向に擦痕が見られる。

2は最大長2.1cm、最大幅2.1cm、厚さ0.4cm、重さ2.8gである。ほぼ円形を呈しているが、厚さは一定ではない。中央部には1ヶ所の穿孔が行われている。器面調整は上下、斜めから両面にわたって丁寧に行われている。

(3) 3号墳（第35図）

主体部中央部まで表土を剥いだが主体部は削平を受けているため確認できなかった。そのため周溝のみの調査を行った。

更に、農政部の設計変更で削平対象地域からはずされたため範囲確認と周溝のトレンチ調査を行い残存状況確認を行った。

周溝

調査対象地域の表土を剥いだ段階では、古墳の陸橋部は確認できなかった。後世に削平されているが現況では直径33mの円墳である。周溝の幅は、ほぼ3mである。

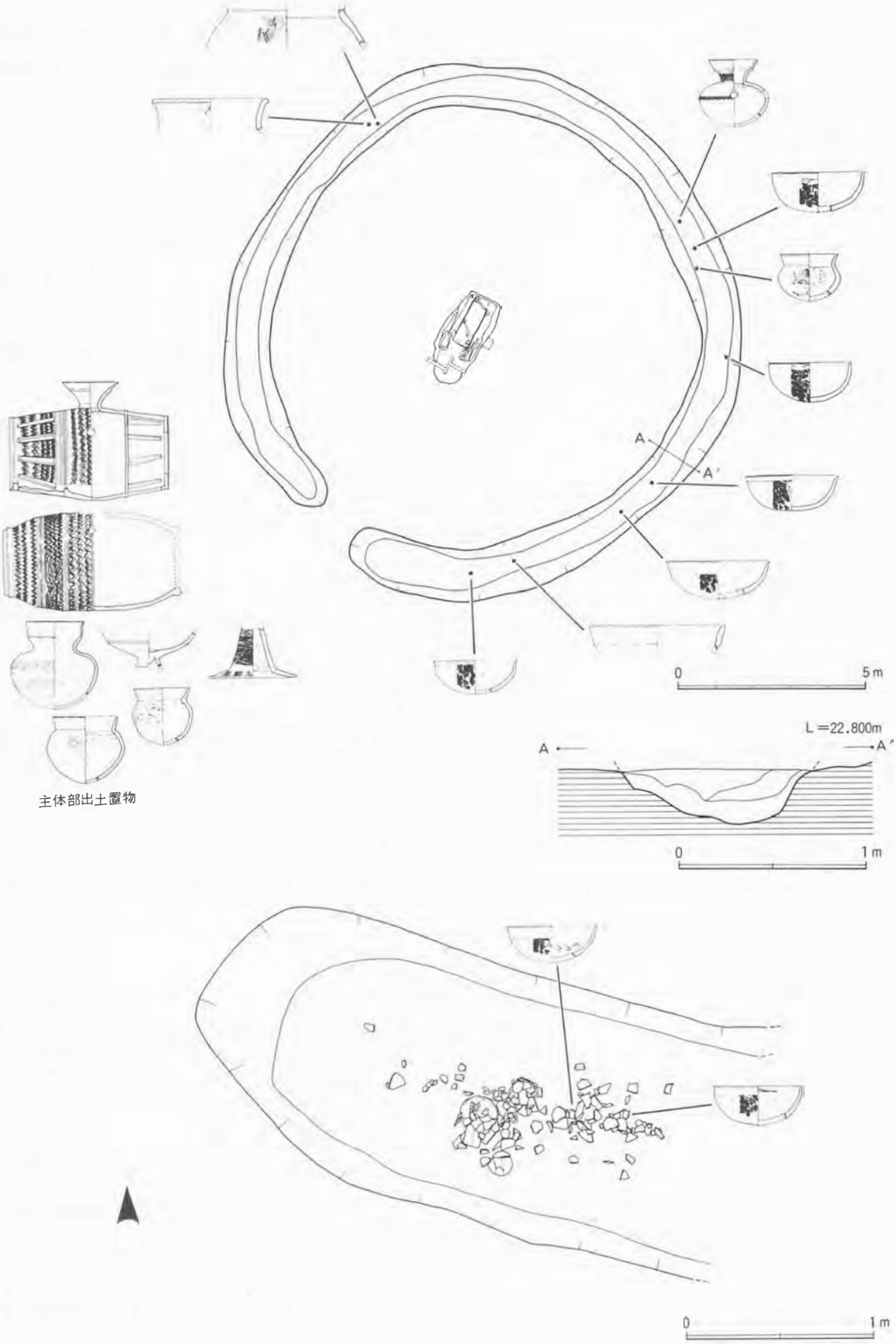
周溝部に任意にトレンチを設定し周溝底部まで掘り下げて確認を行い約1/4程度完掘した。

周溝底部までの深さは約60～80cmあり相当削平を受けている。周溝内からは遺物がほとんど出土せずこの古墳の時期判断は出来なかった。

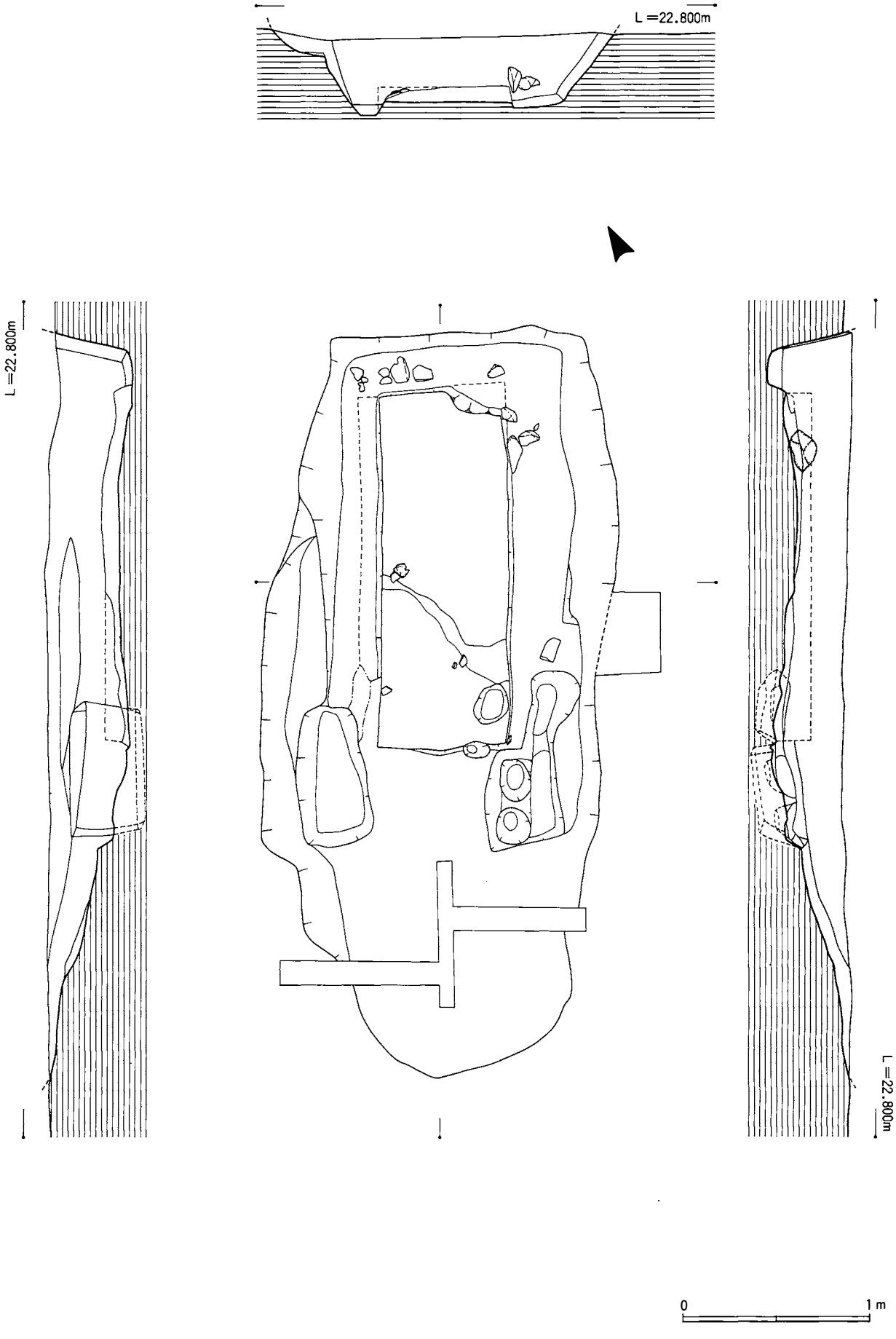
陸橋部についても現在住宅が建っていたり、道路等で思うようにトレンチを入れられなかったため、確定は出来ない。

第7表　樽形瓹出土地名表

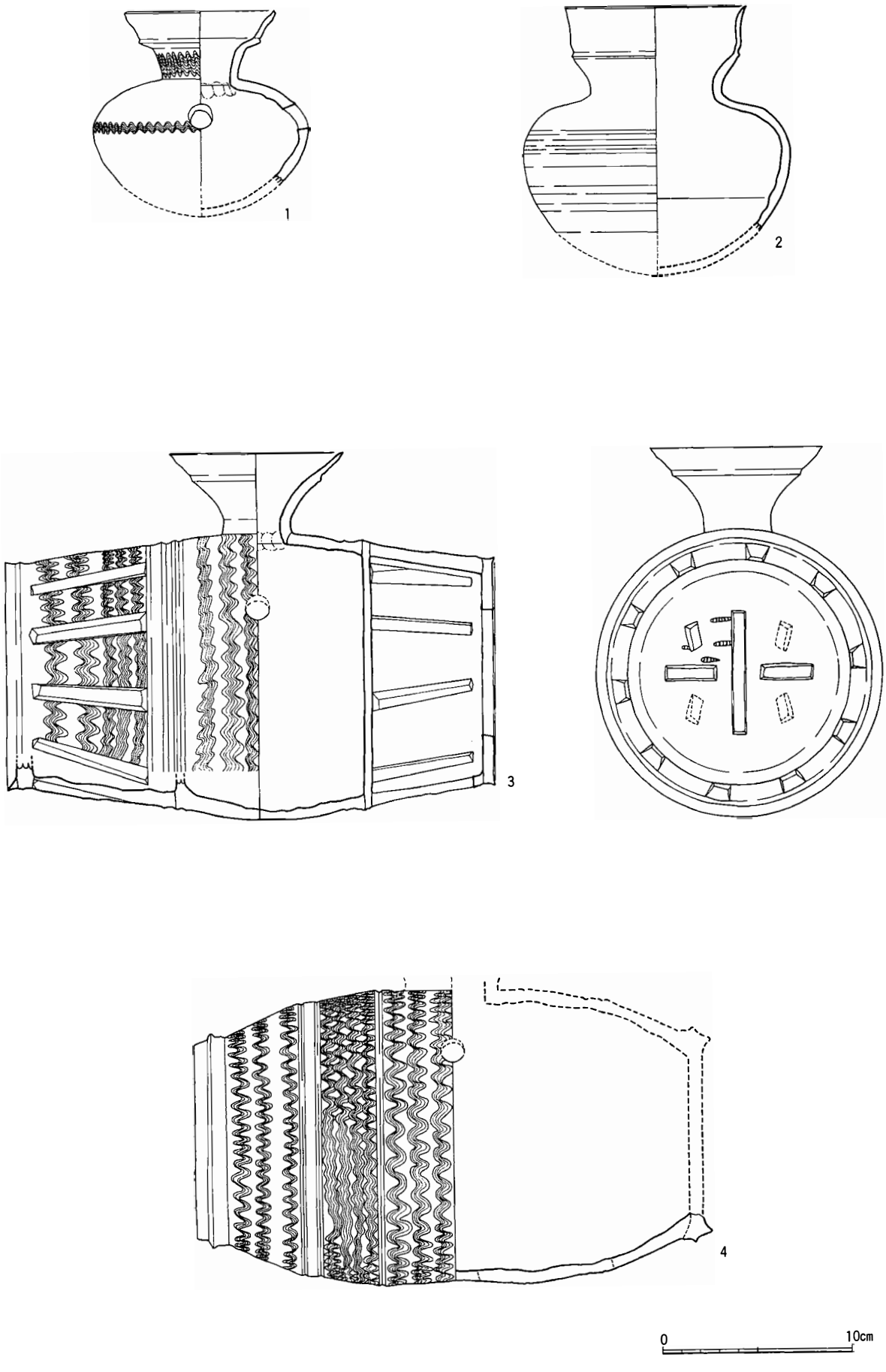
番号	出土遺跡名	所在地	出土遺構	備考	所蔵・保管者
1	洗切貝塚	八代市	不明	表採	江上　敏勝
2	二子塚遺跡	上益城郡嘉島町	不明	表採	緒方　　勉
3	――――	熊本市下硯川	不明	表採	県立装飾古墳館
4	覚井古墳群	球磨郡相良村	不明	表採	鶴島　敏彦
5	竈門寺原遺跡	玉名郡菊水町大字竈門字寺原	円墳主体部	一括	熊本県教育委員会
6	〃	〃	〃	〃（透かし付き）	〃



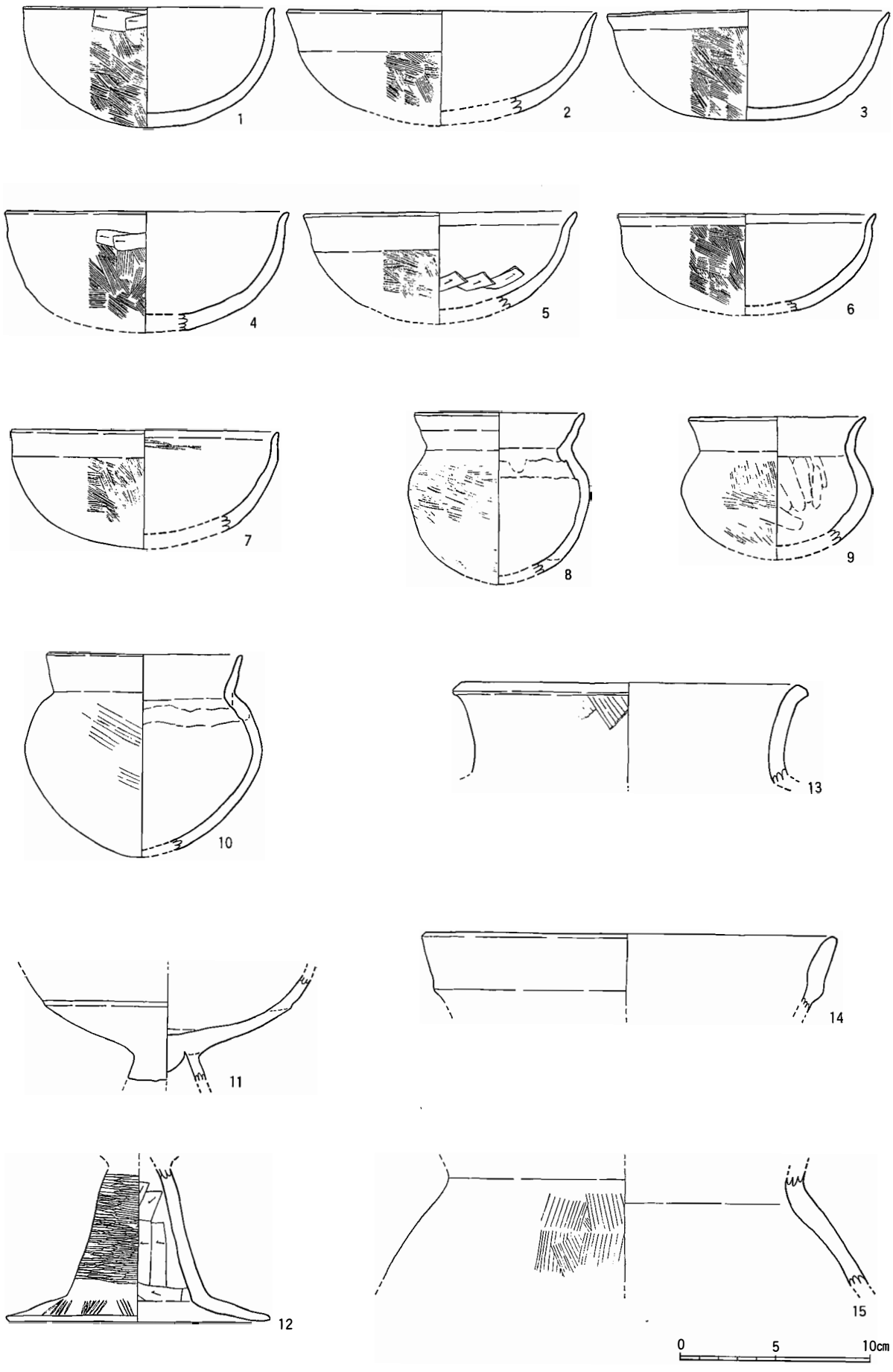
第26図　　1号墳遺物出土状況



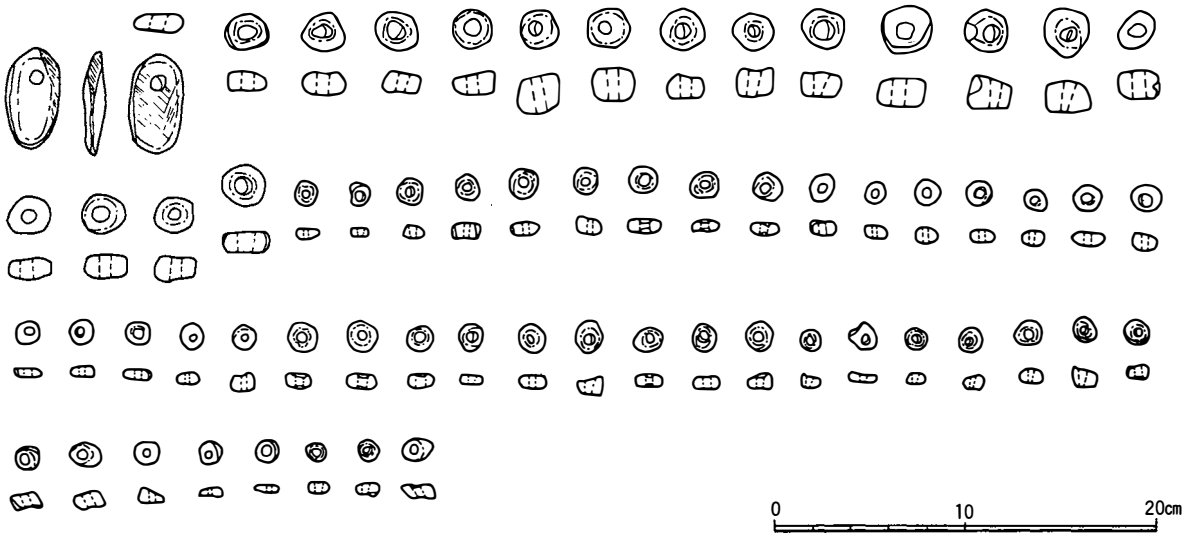
第27図　　1号墳主体部平面実測図（A区）



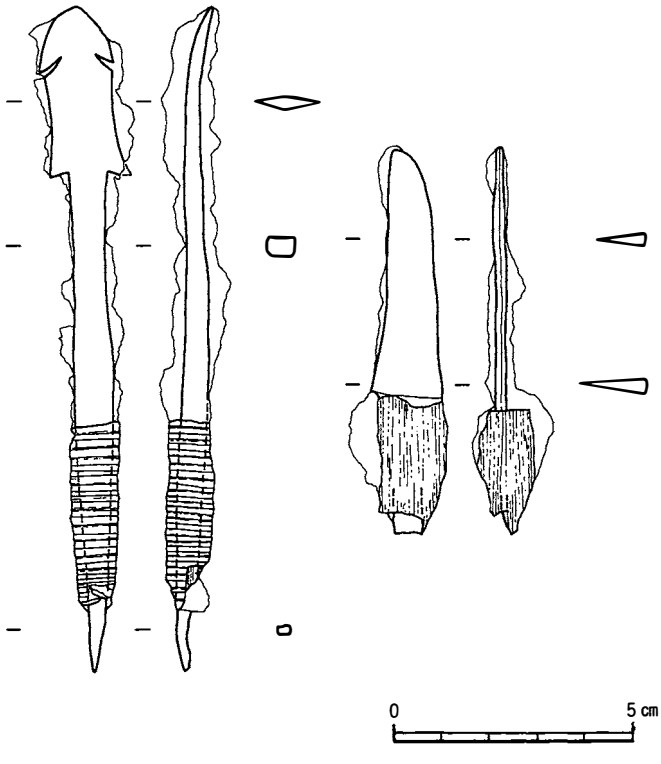
第28図　　１号墳出土須恵器実測図



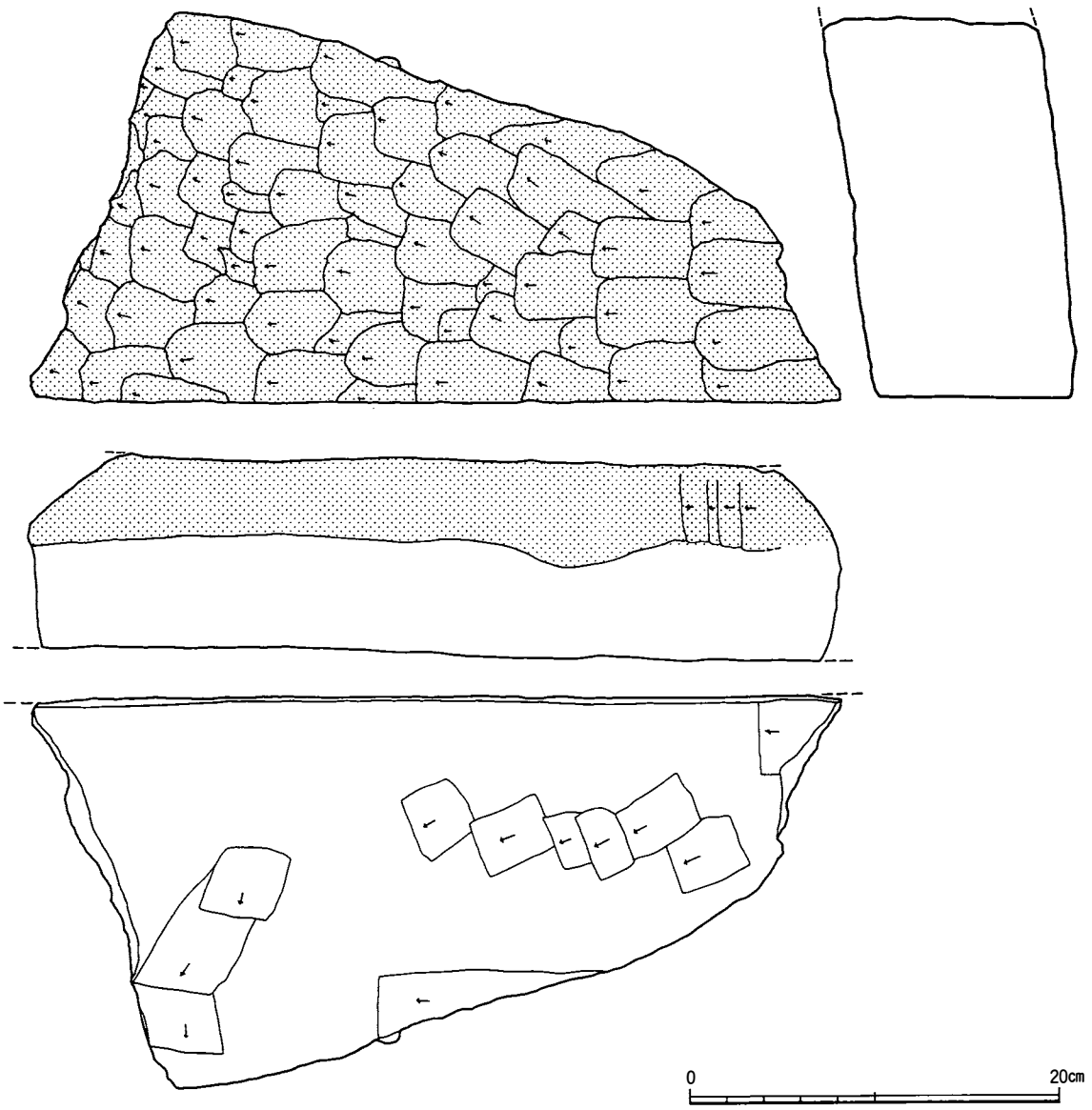
第29図　　１号墳出土土師器実測図



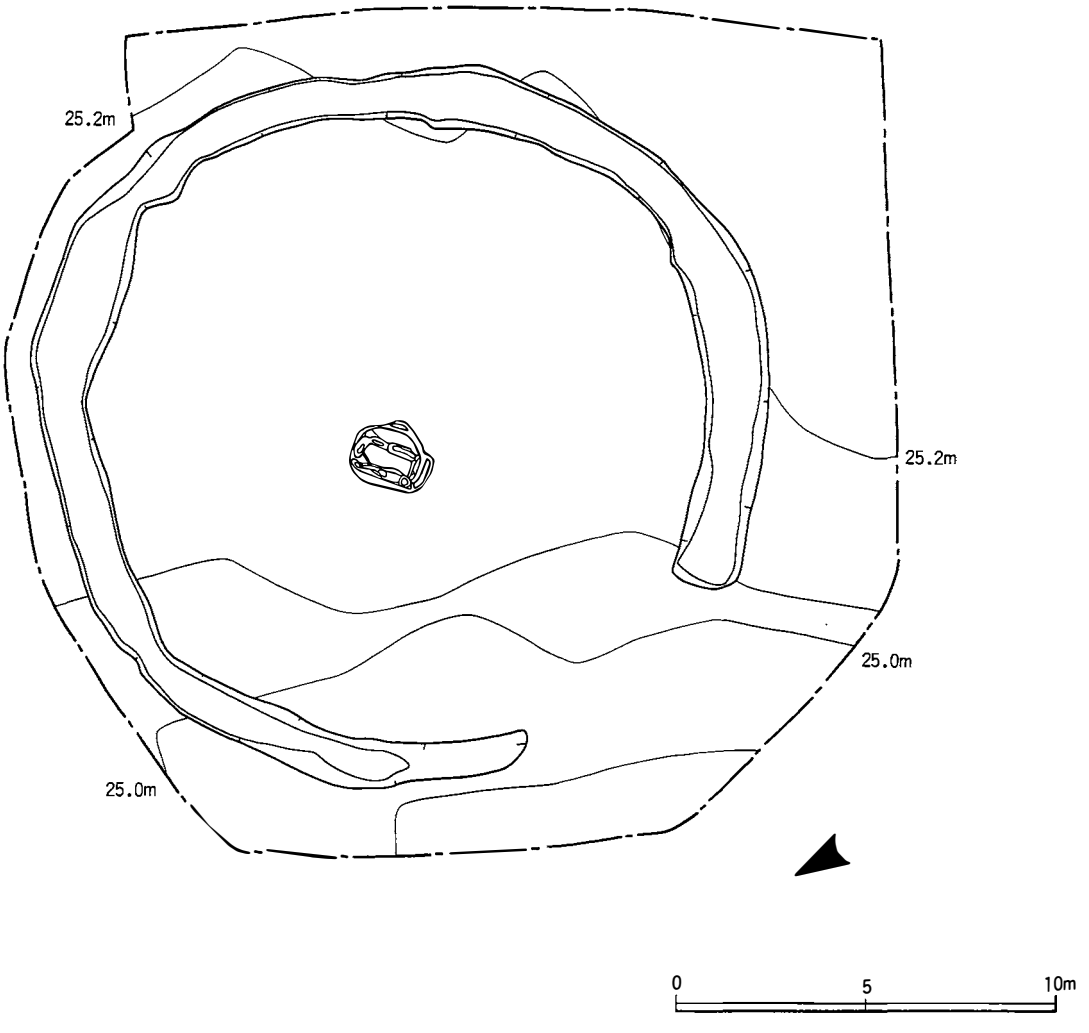
第30図　　1号墳出土ガラス小玉実測図



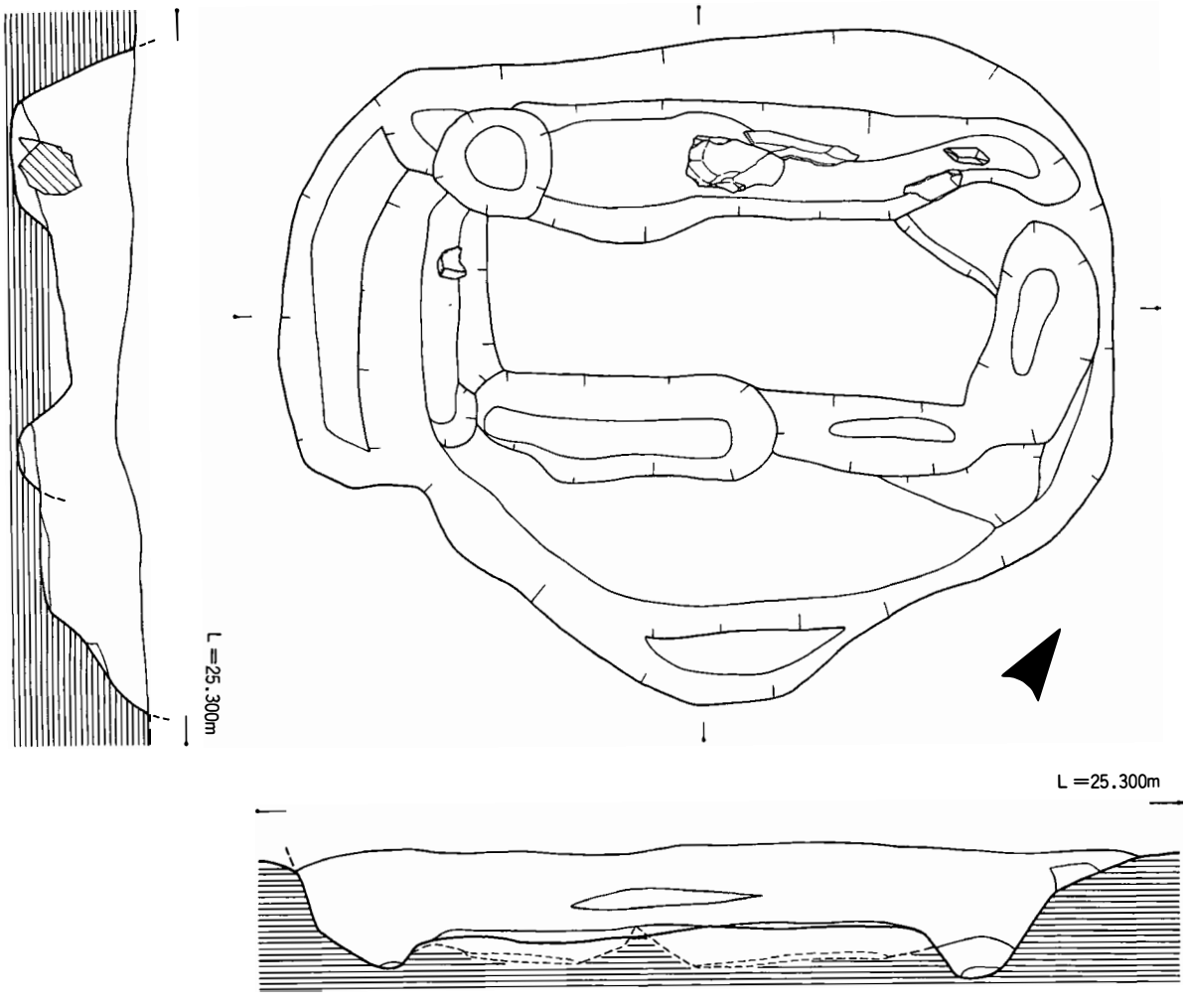
第31図　　1号墳出土鉄器実測図



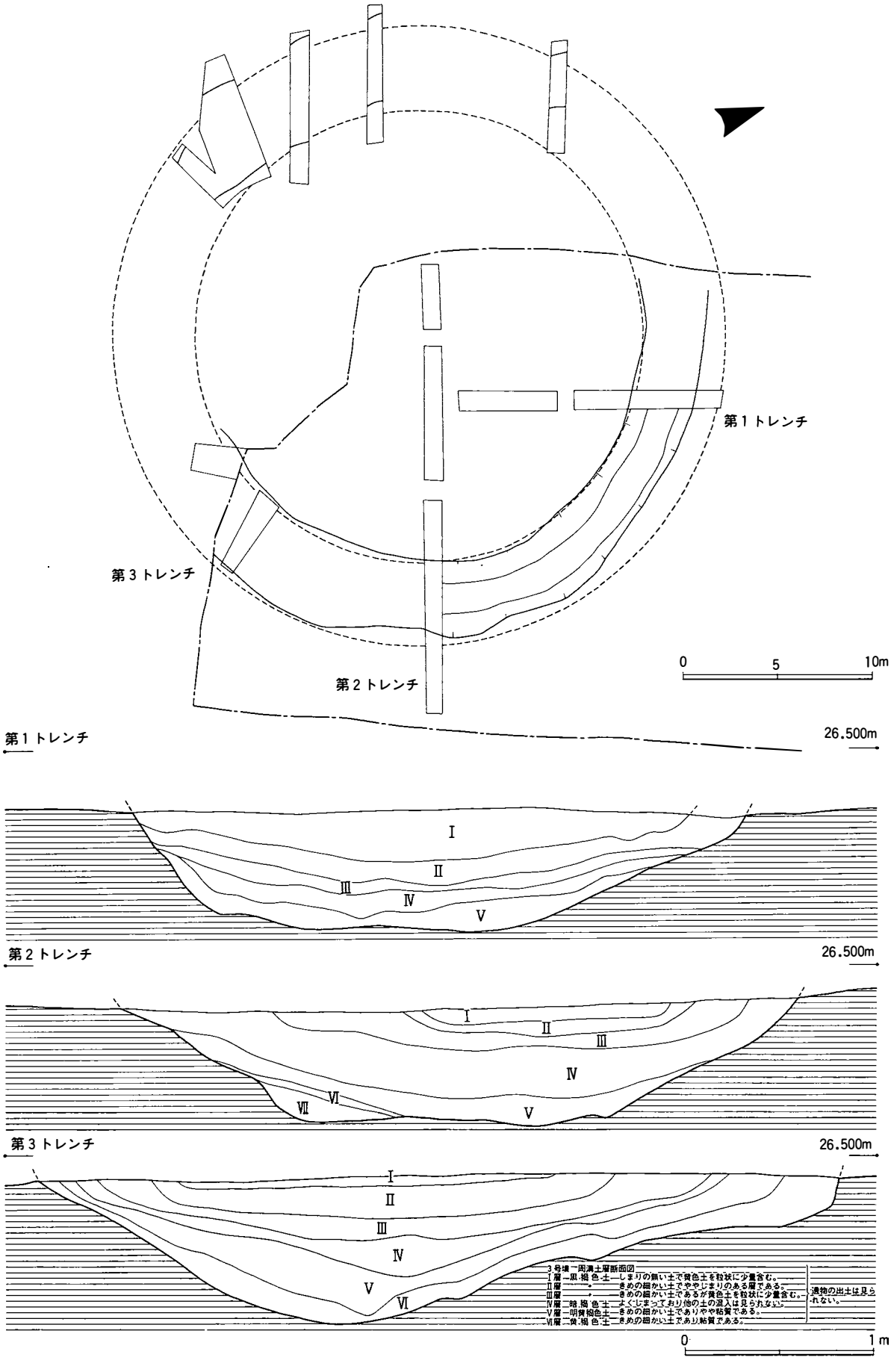
第32図　　1号墳主体部石材実測図



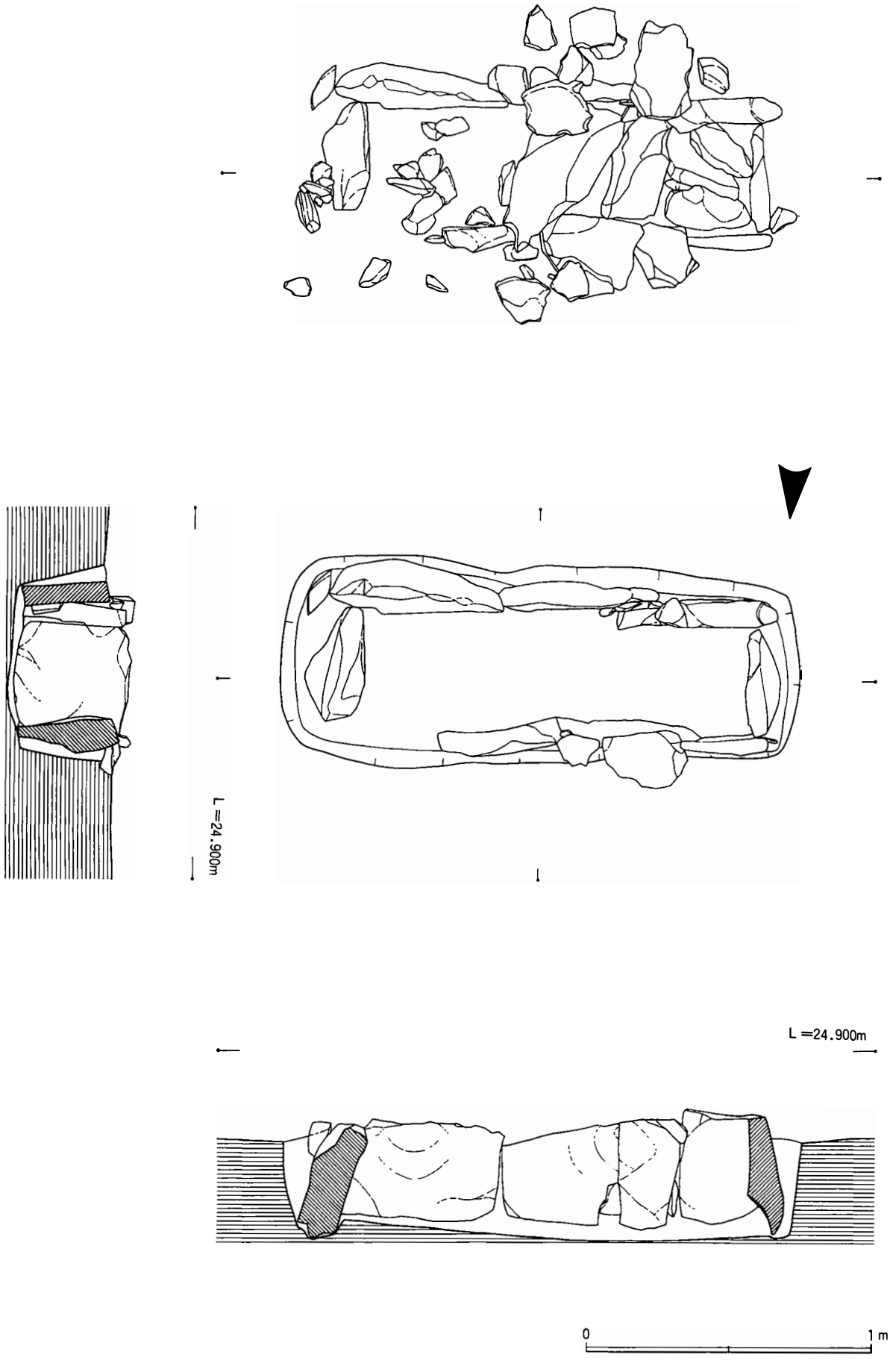
第33図　　2号墳位置図



第34図　　２号墳主体部実測図及び出土遺物（Ｄ区）



第35図　　3号墳平面及び土層断面実測図



第36図　　1号石棺実測図（B区）

第Ⅴ章　自然科学的分析

竈門１号墳出土ガラス小玉の分析

奈良国立文化財研究所　肥塚　隆保

1 はじめに

古代のガラスは主要構成酸化物から、大きく鉛珪酸塩ガラスとアルカリ珪酸塩ガラスに分類できる。鉛珪酸塩ガラスは、さらに鉛バリウムガラス（PbO-BaO-SiO_2系）と鉛ガラス（PbO-SiO_2系）に分類でき、アルカリ珪酸塩ガラスは、カリガラス（K_2O-SiO_2系）とソーダ石灰ガラス（Na_2O-CaO-SiO_2系、Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2系）に分類できる。

日本にガラスが伝えられたのは、ほぼ紀元前２世紀頃で、３世紀頃までの遺跡から出土する主なガラスは、鉛珪酸塩ガラス（鉛バリウムガラスと鉛含有量の多い鉛ガラス）と１種類のアルカリ珪酸塩ガラス（カリガラス）である。いずれも中国で製造されたガラスが流通していたもので、あるものは日本国内で二次的な加工がなされていた。

３世紀後半頃になると、従来とは材質の異なるアルカリ珪酸塩ガラスとしてソーダ石灰ガラスが流通する。このソーダ石灰ガラスは、アルミ含有量の少ないタイプとアルミ含有量が多いタイプの２つの材質のものが知られている。３世紀後半から６世紀後半頃までの古墳時代は、鉛珪酸塩ガラスは流通せず、言わばアルカリ珪酸塩ガラスの全盛期でもあった。今回は、竈門遺跡１号墳から出土した小玉（５世紀前～中頃）の材質について調査したのでその結果を報告する。

2 分析試料

今回は、緑色透明および黄緑色半透明の小さな小玉と黒色透明および黒色不透明の小玉26点の分析をおこなった。いずれもガラス小玉の表面は肉眼的には風化は進んでいない状態でわずかな光沢さえも残存していた。顕微鏡観察では、表面に大小の気泡がかなりみられた。分析試料は**表－１**にまとめた。

試料番号	遺物の種類	ガラスの色調	試料番号	遺物の種類	ガラスの色調
1	（微）小玉Ａ－１	緑色透明	14	（微）小玉Ｃ－４	緑色透明
2	（微）小玉Ａ－３	黄緑色半透明	15	（微）小玉Ｄ－1－2	黄緑色半透明
3	（微）小玉Ａ－６	緑色透明	16	（微）小玉Ｄ－1－6	緑色透明
4	（微）小玉Ａ－12	黄緑色半透明	17	小玉Ｂ－１	黒色透明
5	（微）小玉Ａ－15	黄緑色半透明	18	小玉Ｂ－２	黒色不透明
6	（微）小玉Ａ－16	緑色透明	19	小玉Ｂ－３	黒色透明
7	（微）小玉Ａ－17	黄緑色半透明	20	小玉Ｂ－４	黒色不透明
8	（微）小玉Ａ－18	黄緑色半透明	21	小玉Ｂ－５	黒色不透明
9	（微）小玉Ａ－21	黄緑色半透明	22	小玉Ｂ－８	黒色透明
10	（微）小玉Ａ－25	黄緑色半透明	23	小玉Ｂ－９	黒色不透明
11	（微）小玉Ａ－27	黄緑色半透明	24	小玉Ｂ－12	黒色透明
12	（微）小玉Ａ－28	緑色透明	25	小玉Ｂ－13	黒色透明
13	（微）小玉Ａ－29	黄緑色半透明	26	小玉Ｂ－15	黒色不透明

表－１　分析試料

3 分析方法

各試料は、微小領域エネルギー分散型蛍光X線分析法により測定をおこなった。検出可能元素範囲はNa～Uであり、SGTなど数種類の標準試料をもちいてFP（ファンダメンタルパラメーター）法により検出した全酸化物の合計が100%になるように規格化した定量値の計算をおこなった。

まず、表面の風化による成分の変動を評価し非破壊分析の可能性を検討した。次いでその結果にもとづいて、表面層を超音波研磨装置により風化層を除去したのち、実際の定量測定をおこなった。なお、測定には一次X線励起電圧を20kVおよび45kVの2回にわけて測定した（**表－2**）。また、ガラス表層に生じた二次生成物を検討するためX線回折も同時におこなった。

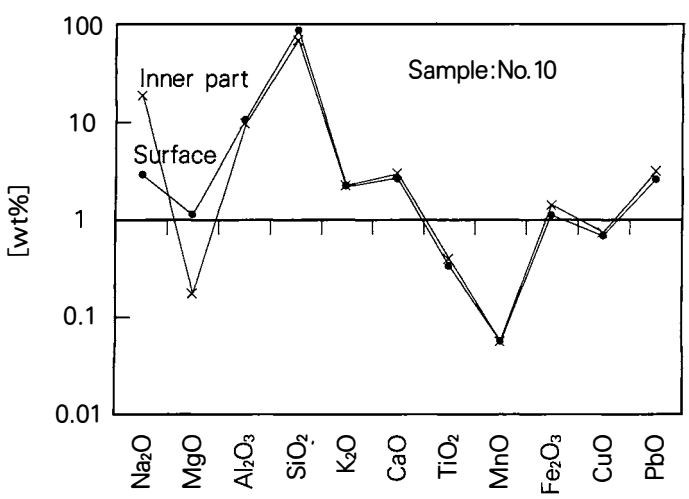
X線管：Mo（モリブデン）	励起電圧：20kVp/45kVp	電流：4.5mA/0.3mA
検出器：ペルチェ型Si－Li半導体検出器（10mmφ　1024ch）		測定雰囲気：真空中
1次フィルター：Al（15μ）	分析領域：1mmφ	計数時間：500～2000秒

表－2　測定条件

4 分析結果

(1) 風化による成分の変動

風化による成分の変動については、遺物表面と内部の組成について比較した。その結果、風化によるガラス組成の変化には規則性はなく、個々の試料がバラバラに変動することが明らかになった。ここでは、試料No.10のガラス小玉の例を示した（**図－1**参照）。試料No.10は最も顕著な風化を示している試料でNa_2Oが著しく減少し、SiO_2が増加している。埋蔵中における水分の影響によりアルカリイオンの溶出がおこり、表面にはSi-OHに富む層が形成しているものと考えられる。特に、出土遺物ではその表面にガラス光沢の著しい試料ほどこの傾向が顕著である。それら以外では、Na_2Oは減少しているもののSiO_2には大きな変化はみられず、Al_2O_3量が風化表面でやや増加しているものもある。



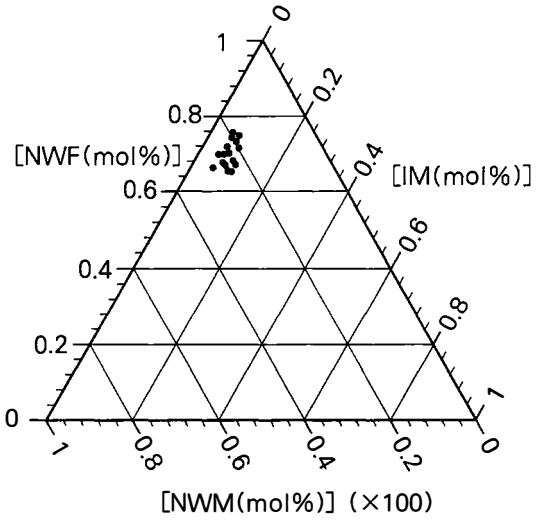
図－1　ガラスの風化による成分の変動

⑵ ガラス遺物の材質

ガラスはそれぞれ各酸化物の働きから、網目形成酸化物［NWF］、網目修飾酸化物［NWM］、中間酸化物［Intermediate］より成り立っている。網目形成酸化物［NWF］は、それ自身が単独で３次元網目を形成し得るものでM-O単結合強度が80kcal/mol以上の酸化物をさす。今回のガラスではSiO_2がそれに相当する。網目修飾酸化物［NWM］は、M-O単結合強度が60kcal/mol以下の酸化物でそれ自身が単独では網目構造を作ることはできないが、ガラスの一成分として網目にはいり各種の性質に影響を与える（Na_2O、K_2O、MgO、CaOなど）。M-O単結合強度が60kcal/mol以上80kcal/mol以下の酸化物は中間酸化物といい、単独ではガラスを形成することはできないが、形成酸化物の一部と置換して網目形成にかかわるとともに修飾酸化物としても働くことができる。Al_2O_3,PbOなどがそうである。今回の試料を各三成分にわけて表示したのが**図－２**である。形成酸化物は、ほぼ65～70mol％前後の範囲にはいり、修飾酸化物の量はほぼ20mol％から最大で28mol％前後を示す。中間酸化物の量は５mol％からほぼ９mol％と多いことが特徴である。

今回の試料26点は、材質上の分類ではすべてがアルカリ珪酸塩ガラスでソーダ石灰ガラスに属することが明らかになった（**表－３**）。カリガラスは今回の試料には含まれていない。なかでも特徴的なことは、上述のようにAl_2O_3含有量が７％～12％前後と高い含有量を示すことである。Na_2Oは14％～20％前後でややバラツキを示す。Al_2O_3含有量の多いソーダ石灰ガラスは、西アジアやエジプト、ローマなど地中海沿岸諸国で発達したソーダ石灰ガラスとは異なり、アジアで発達したソーダ石灰ガラスの特徴を示している。なかでも黄緑色、緑色の試料はいずれもCaO含有量が４％以下で典型的な「アジアのガラス」である。黒色のガラスはCaO含有量が３％～５％とやや高い傾向を示している。いずれにしても今回の試料すべては、Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2系のソーダ石灰ガラスである。

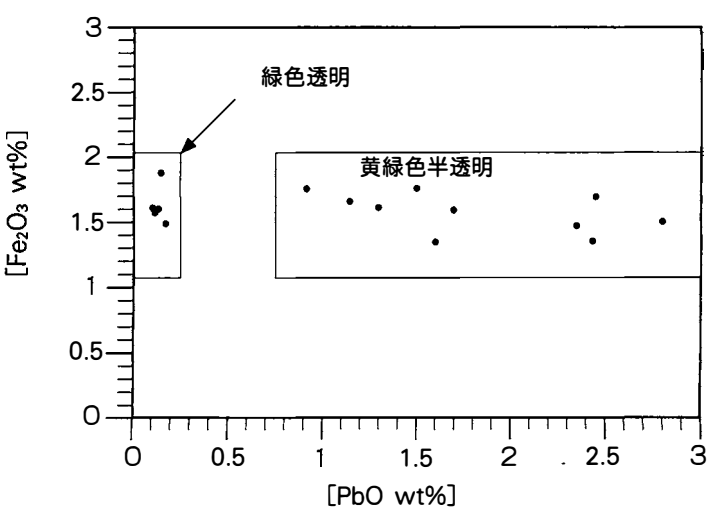
今回の試料では緑色系には黄緑半透明の小玉と緑色（深緑）透明の小玉の２種類のものがあり、基礎ガラスの材質自身は同じで、着色の技法が変わっているもので、最も大きな特徴は、PbO含有量にある。Fe_2O_3やCuO含有量には大きな差は認められない。Fe_2O_3とPbOが黄色の発色に大きく関与しているものと思われる（**図－３**）。



図－２　各試料の形成酸化物，修飾酸化物，中間酸化物の量

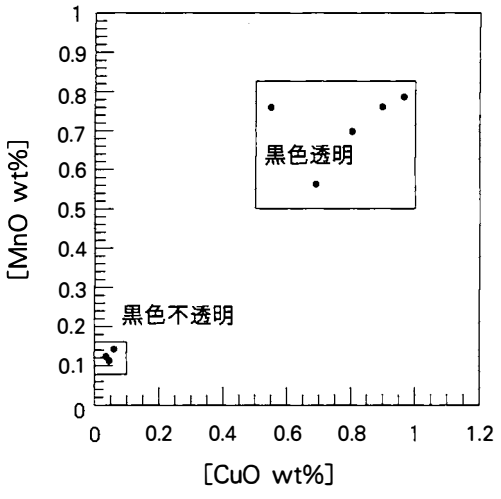
試料番号	SiO_2	Al_2O_3	Na_2O	K_2O	MgO	CaO	TiO_2	Fe_2O_3	CuO	MnO	PbO
1	67.4	10.1	14.2	2.1	0.1	3.1	0.5	1.47	0.61	0.07	0.18
2	67.4	9.6	14.7	2.0	0.2	2.2	0.4	1.62	0.44	0.05	1.30
3	61.8	12.6	16.0	2.5	0.2	3.3	0.5	1.88	0.73	0.15	0.16
4	67.4	8.1	15.8	1.5	0.1	2.0	0.4	1.36	0.62	0.07	2.46
5	62.3	11.5	16.5	2.5	0.2	2.5	0.4	1.74	0.54	0.07	1.49
6	65.8	7.1	20.4	1.2	0.3	2.1	0.4	1.60	0.60	0.08	0.13
7	62.5	8.5	17.6	2.2	1.1	2.5	0.3	1.68	0.82	0.09	2.47
8	69.0	7.6	13.7	2.3	0.2	2.9	0.3	1.57	0.52	0.08	1.69
9	68.4	9.2	13.9	2.0	0.2	2.4	0.3	1.33	0.46	0.05	1.60
10	58.9	12.4	18.3	2.2	0.2	2.6	0.4	1.48	0.62	0.06	2.81
11	66.2	10.9	14.1	2.5	1.0	1.5	0.5	1.73	0.56	0.05	0.91
12	66.7	9.1	16.2	2.1	0.2	2.9	0.4	1.58	0.53	0.11	0.13
13	64.9	7.8	17.0	2.2	1.1	1.6	0.8	1.45	0.50	0.13	2.35
14	66.3	9.6	15.3	2.0	1.1	2.8	0.4	1.53	0.56	0.07	0.14
15	68.6	7.9	15.3	1.3	0.1	3.1	0.3	1.63	0.44	0.06	1.16
16	61.8	8.0	22.6	1.6	0.4	2.4	0.4	1.55	0.68	0.09	0.16
17	61.7	11.2	15.2	2.3	0.9	5.0	0.4	1.60	0.81	0.69	0.06
18	63.8	11.6	14.3	3.3	0.9	3.6	0.4	1.66	0.04	0.12	0.11
19	65.9	7.7	15.8	2.2	1.0	4.3	0.3	1.34	0.69	0.56	0.06
20	65.5	10.8	13.1	3.0	1.9	3.2	0.4	1.49	0.04	0.11	0.08
21	64.1	11.2	13.7	3.3	1.9	3.5	0.4	1.57	0.03	0.12	0.08
22	61.4	8.3	18.5	2.4	1.1	4.4	0.4	1.48	0.97	0.78	0.08
23	62.5	11.3	16.2	3.3	0.9	3.5	0.4	1.57	0.05	0.13	0.08
24	60.1	11.9	15.8	2.7	0.2	5.4	0.4	1.57	0.89	0.76	0.08
25	64.9	8.6	16.8	2.4	0.2	3.4	0.4	1.80	0.55	0.76	0.10
26	61.1	12.6	16.2	3.2	0.9	3.5	0.4	1.61	0.03	0.12	0.08

表－3　ガラス小玉の分析結果



図－3　黄色半透明と緑色ガラス小玉に含有するPbOとFe_2O_3量

黒色系統のガラスには、透明感のあるものと不透明なものの２種類が存在することが透過光線の観察で明らかになった。この両者を比較すると基本的には基礎ガラスは同じである。K_2O含有量は透明のガラスの方がやや少ない傾向がある。CaO含有量は透明ガラスの方がやや多い傾向が認められるが、No.25はこの限りではない。Fe_2O_3やTiO_2には有為の差は認められない。最も顕著な差はCuOとMnO含有量にある（**図－４**）。透明なガラスにはこれらの両者が高い含有量を示していることは興味あることである。



図－４　黒色透明ガラスと不透明ガラスに含有するCuO、MnO

⑶ ガラスの諸物性

珪酸塩ガラスにおいては、ガラスの組成がわかれば加成性因子を用いて近似的に屈折率、熱膨張係数などの諸物性が計算できる。ここではアッペンによる加成性因子を用いた。アッペンの加成性因子を用いる物性値の計算ではガラスの組成を構成酸化物のモル％にもとづいて次式により計算した。

$$P = p1f1 + p2f2 + \cdots + pifi$$

Ｐは着目する性質でガラスの構成成分を（M_xO_y)1、（M_xO_y)2・・・・（M_xO_y)iとし、それらの含有率をf1,f2,・・・fiとする。p1,p2,・・・piは構成成分（M_xO_y)1,（M_xO_y)2・・・・（M_xO_y)iの性質Ｐについての寄与率で加成性因子である。ただし、SiO_2、PbOなどについてはある範囲をもって与えられる。次式はSiO_2の加成性因子である。ただし、SiO_2、PbOなどについてはある範囲をもって与えられる。次式はSiO_2の加成性因子とSiO_2含有量の関係（アッペン）を示したものである。

SiO_2>67の条件下　　$VSiO_2 = 26.1 + 0.035(SiO_2 - 67)$ ：モル容積　VI(㎤/mol)

$nSiO_2 = 1.475 - 0.0005(SiO_2 - 67)$ ：屈折率　ni

$\alpha SiO_2 = 38 - 1.0(SiO_2 - 67)$ ：平均線膨張係数αi(10^{-7}/℃)

$ESiO_2 = 6.6 + 0.02(SiO_2 - 67)$ ：縦断性率Ei(10^3kg/㎟)

SiO_2<67の場合は一定とみなす

$VSiO_2 = 26.1$,　$nSiO_2 = 1.475$,　$\alpha SiO_2 = 38.0$　$ESiO_2 = 6.5$

今回の計算結果については、表－４にまとめたので参考として示しておく。これはあくまでも組成からもとめた理論計算値であり、実際の密度などは介在する気泡などにより変動する。

試料番号	平均化学式量	モル容積	密　度	屈折率	平均線膨張係数10^{-7}/℃	縦弾性率10^3kg／mm²
1	62.48	25.76	2.43	1.485	91.81	6.92
2	63.54	25.81	2.46	1.486	92.75	6.87
3	63.43	25.68	2.47	1.486	103.00	6.93
4	63.61	25.58	2.49	1.488	96.38	6.80
5	64.15	25.68	2.50	1.491	104.84	6.86
6	62.19	25.09	2.48	1.488	112.93	6.72
7	63.48	25.13	2.53	1.492	109.59	6.77
8	62.68	.25.62	2.45	1.486	90.31	6.85
9	63.20	25.83	2.45	1.489	89.54	6.89
10	64.91	25.56	2.54	1.498	113.27	6.84
11	64.14	25.88	2.48	1.485	91.77	6.89
12	62.39	25.54	2.44	1.487	99.59	6.86
13	63.72	25.31	2.52	1.493	104.56	6.79
14	62.20	25.47	2.44	1.489	96.40	6.91
15	62.24	25.49	2.44	1.488	93.65	6.87
16	62.27	24.87	2.50	1.492	125.05	6.70
17	61.36	25.18	2.44	1.484	102.24	6.99
18	62.50	25.69	2.43	1.496	98.47	6.99
19	60.65	25.04	2.42	1.486	101.62	6.89
20	62.04	25.60	2.42	1.496	92.33	7.01
21	62.02	25.51	2.43	1.495	96.04	7.00
22	61.01	24.75	2.46	1.485	115.63	6.82
23	62.52	25.55	2.45	1.498	106.27	6.94
24	61.61	25.26	2.44	1.484	106.96	6.98
25	62.12	25.29	2.46	1.479	105.33	6.83
26	62.88	25.63	2.45	1.499	106.86	6.98

表－４　各ガラス小玉の諸物性

第Ⅵ章　まとめ

１　先土器時代

この時代の遺物は全部で４点出土している。石器の出土が純粋な包含層からの出土でないため組成等のデータは無いが遺物の存在が確認されたことは重要なことであったと考える。

２　縄文時代

この次期の遺物も包含層は削平されているが、遺構は残されていた。土壙である。土器は縄文時代後期の阿高系の遺物が１点みられるが大半の土器は後期後半の辛川式の遺物を中心とし、北久根式さらには晩期の鳥井原式、御領式、古閑式まである。遺物の増減はあるが連綿と続いている。しかし、ここでは土壙からの遺物が中心であり、主に辛川式土器の出土が多く見られている。

この土器に伴う石器としては、緑泥片岩の石材を中心とした石斧である。

その他の石器は黒曜石を中心とする剥片石器類である。石匙、石鏃が多く、「使用痕のある剥片」としているものも多く存在する。使用跡のある剥片はここでは、あまり大きくない不定型の剥片を使用している。

３　弥生時代

この遺跡の存在する段丘上の先端部に甕棺が多数確認された。甕のタイプは熊本市黒髪遺跡を標識としている中型～小型の甕棺である。

この甕棺に混在して北部九州に中心を持つ須玖式の大型の甕棺がある。これは、数は多くないが黒髪式の甕に須玖式の鉢型土器を蓋に使用している場合もありほぼ同時期に使用されていたこと窺える。

甕棺内に副葬品等の出土は無く、人骨も１体のみの出土であった。

甕棺に伴い木棺墓・土壙墓が存在していたのかもしれないが、調査段階では形がはっきりしなかったせいか不明土壙として報告されている。

わずかに甕棺と木棺墓・土壙墓との分布範囲がずれており、時期的に若干差があるのか、同時期に存在していたのか、または、身分的なもので区別されていたのかは今となっては確認できない。

弥生時代の遺構は甕棺以外には住居跡が１軒検出された。この住居跡も甕棺とほぼ同じ時期の遺構である。住居内からは黒髪式の土器が多数出土し鉄片も１点出土している。

このような多彩な出土遺物、遺構の特徴から弥生時代中期後半と考えられる。

４　古墳時代

出土した遺物は３基にのぼる。一古墳群として考えられる。しかし、古くから墳丘は削平されていた模様である。

(1)遺物

ここでは、１号墳出土の須恵器・土師器資料を中心に考えてみたい。

須恵器

主体部の一括遺物及び周溝出土の須恵器は合計４点である。樽型瓹、透かし付き樽形瓹、瓹、小型丸底壺である。

瓹は、小型で丁寧な作りであり稜線等は、はっきりしており胴部に波状文が施されている。

形態は胴部最大径が上部にあり、口縁端部近くには明瞭な稜線が施される。

小型広口壺は口頸部中央に明瞭な凸線の稜線を持ち体部の最大径が上部にある。

樽形瓹は、熊本県内では５・６例目の出土例である。さらに発掘調査で出土したのは、今回の資料が初めてである。

この樽形瓹は、陶邑においては須恵器生産が行われていた初期段階ＴＫ73・ＴＫ85・ＴＫ216・ＴＫ208にかけて生産されて、その後急速に姿を消して行くので、比較的年代特定が容易である。

まず、透かし付き樽形瓹についてであるが形態的には体部中央部と体部端部の径に極端な差はなく作

りも丁寧であり、透かしという装飾をもつ特徴を備えている。

もう一つの樽形瓲も、体部中央部と体部端部近くまでの径の差がほとんどないため形態的には古いタイプと考えられる。ここでは、透かし付き樽形瓲と、ほぼ同じ時期のものであると考えられる。

以上のことから陶邑編年で言うＴＫ85からＴＫ216間の時期が考えられる。

土師器

土師器は須恵器と違い在地系のものであるため熊本本県における編年をもとに考える。

土師器は県内では下益城郡城南町の塚原古墳群にまとまった遺物が見られる。ここでの編年にあてはめてみると瓲形土器は塚原遺跡Ｉ類にあてはめられる。そのほか、壺形土器、甕形土器、高坏、小型丸底壺も同じく塚原編年のなかで５世紀初頭から中頃までの範中としてとらえることができる。

⑵遺構

ここでは、古墳が３基検出されている。いずれも円墳である。主体部の本来の形が分かったものは２基ある。１基は横口式家形石棺（妻入）、もう１基は箱式石棺である。

横口式家形石棺（Ａ区・１号墳）

横口式家形石棺の熊本県内における分布をみると下益城郡城南町の塚原古墳群において７基見られる。

今回調査を行った竈門寺原遺跡のあるこの菊水町でも以前から２基確認されている。（第６表）

横口式家形石棺は主に北部九州でよく使われているがそれらはその地方の首長墓的な性格をもった古墳に多く使われている。熊本県内においてはここで確認できた古墳のように比較的小規模な古墳にも多く使用されている。

この竈門寺原遺跡から菊池川沿いに下流にむかって３㎞の位置に横口式家形石棺の主体部を持った江田船山古墳がある。この古墳は前方後円墳であり、石室内からは大陸との関係を示す重要な遺物も確認されている。この古墳の出土遺物から導き出される年代は、初葬段階で６世紀初頭であり陶邑編年からは、ＴＫ208の時期が考えられている。

以上の事から、竈門寺原遺跡１号墳は江田船山古墳よりやや古い５世紀前半から中頃に築造されたと考えられる。

以上のような大まかな時期を設定してみた。出土遺物の中の透かし付き樽型瓲は、器形が特殊であるため図面による復元作業に戸惑った。

今回出土した遺構・遺物については今後更に検討を加えて機会をみて考察を行いたい。

主要参考文献一覧

⑴松本健郎　『菊池川流域文化財報告書』　熊本県教育委員会

⑵富田紘一　『戸坂遺跡発掘調査報告書』　熊本市教育委員会

⑶古森政次　「熊本県下新発見の旧石器時代遺跡について」『旧石器考古学』24　旧石器文化課話会

⑷古森政次　「ワクド石遺跡」　熊本県教育委員会

⑸木崎康弘　『六地蔵遺跡Ⅰ』　熊本県教育委員会

⑹賀川光夫・島津義昭　『古保山・古閑・天城』　熊本県教育委員会

⑺富田紘一　『上南部遺跡発掘調査報告書』　熊本市教育委員会

⑻富田紘一　「太郎迫遺跡の縄文土器⑴」　４号　肥後考古学会

⑼富田紘一　「太郎迫遺跡の縄文土器⑵」　５号　肥後考古学会

⑽野田拓治　『塚原』　熊本県教育委員会

⑾野田拓治　『上の原Ⅰ』　熊本県教育委員会

⑿野田拓治　『上の原Ⅱ』　熊本県教育委員会

⒀野田拓治　『上の原Ⅲ』　熊本県教育委員会

⒁島津義昭　「黒色磨研土器様式」『縄文土器大観』　小学館

⒂島津義昭・山崎純男　「九州の土器」『縄文土器の研究』　雄山閣

⒃坂田邦洋　「縄文時代に関する研究、北久根山式土器の設定」『考古学論叢』　別府大学考古学研究会

⒄中村　浩　『陶邑Ⅱ』　大阪府教育研究会

⒅中村　浩　『須恵器集成図録』第１巻　近畿Ⅰ　雄山閣出版

⒆中村　浩　「須恵器の年代論」

⒇中村　浩　『和泉陶邑窯の研究』　柏書房

㉑中村　浩　『須恵器』　ニューサイエンス社

㉒藤原　学　「須恵器生産の展開」

㉓武末純一　『土器からみた日韓交渉』　学生社

㉔山崎純男　「福岡市有田遺跡出土の陶質土器と古式土師器」『古文化談叢』６　古文化研究会

㉕田辺昭三　『須恵器大成』　角川書店

㉖松本健朗・勢田広行　「肥後の須恵器 ── 須恵器生産の開始期をめぐって⑴ ── 」『九州考古学』

㉗面高哲郎・長津宗重　「宮崎県都城市志和池出土の陶質土器」『古文化談叢』６　古文化研究会

㉘九州大学文学部考古学教室　『山隈窯跡群の調査』

㉙横山邦継・下村　智・三辻利一・杉　直樹　「福岡市・飯盛遺跡出土陶質土器の産地推定」　古文化談叢

㉚西谷　正　「加耶古墳の発掘」　九州大学文学部『史淵』

㉛古城山古墳調査団　「筑後古城山古墳」

㉜菊水町教育委員会　「赤穂原」菊水町文化財報告書　第５集

㉝小田富士雄　「須恵器文化の形成と日韓交渉・総説論」『古文化談叢』24集

㉞小田富士雄　「古墳時代－４・須恵器の伝来と生産」『図説発掘が語る日本史６・九州沖縄編』

㉟小田富士雄　「須恵器の源流－九州地方－」『日本陶磁の源流 ── 須恵器出現の謎を探る ── 』

㊱小田富士雄　「九州の須恵器序説 ── 編年の方法と実例」『九州考古学』

㊲橋口達也ほか　「池の上墳墓群」『甘木市文化財調査報告』

㊳橋口達也・内田俊和　「古寺墳墓群」『甘木市文化財調査報告』

㊴橋口達也　「須恵器」　日本考古学協会1990年度大会研究発表要旨

報　告　書　抄　録

フリガナ	カマドテラバルイセキ
書名	竈門寺原遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第149集
編著者	長谷部善一
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862　熊本県熊本市水前寺６丁目18番１号
発行年	1995年３月31日

フリガナ 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
カマドテラバル 竈門寺原	玉名郡菊水町大字 竈門字寺原		4－19 （県） 2－183			H.3.11 ～ H.4.5	7,000㎡	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特注事項
竈門寺原		先土器時代 縄文時代 後期	土壙	ナイフ形石器 辛川式土器 御領式土器 石鏃、石匙、打製石斧、磨石	熊本県では出土例の少ない初期段階の須恵器が１号墳から出土している。
	集落 墓地	弥生時代 中期	住居跡 甕棺	黒髪式土器	
	墓地	古墳時代 中期	古墳	須恵器・土師器 ガラス小玉・鉄器 滑石製有孔円盤	

写 真 図 版

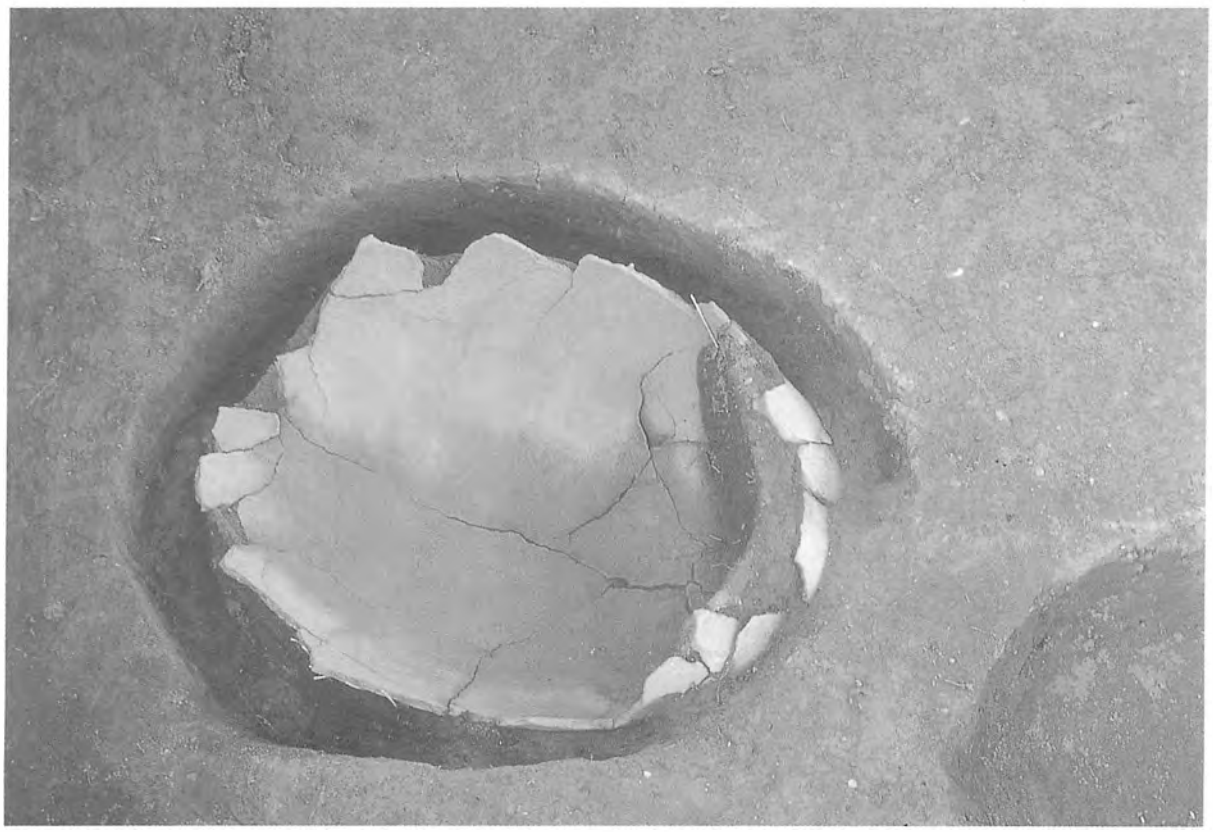
1号甕棺検出状況

2・3号甕棺検出状況

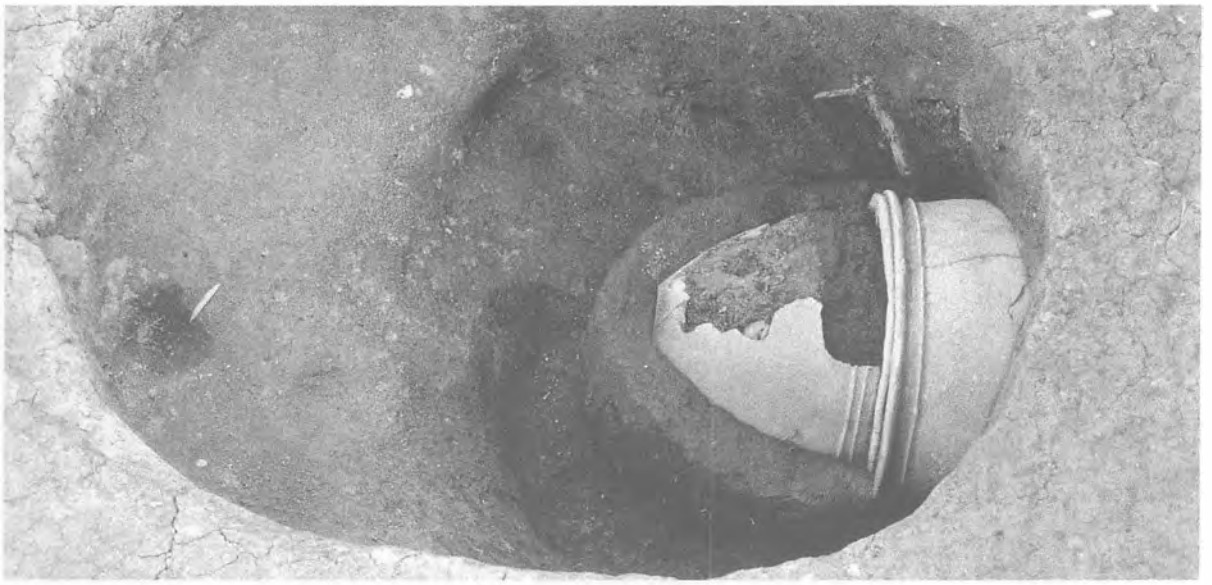
４号甕棺検出状況

５号甕棺検出状況

6号甕棺検出状況（西より）

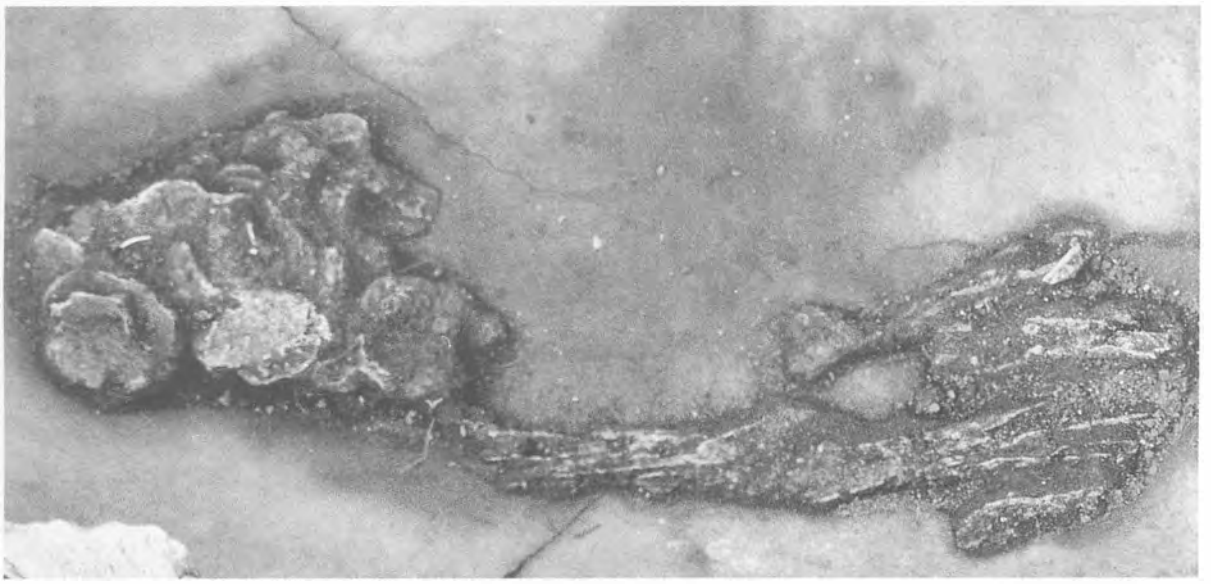


7号甕棺検出状況

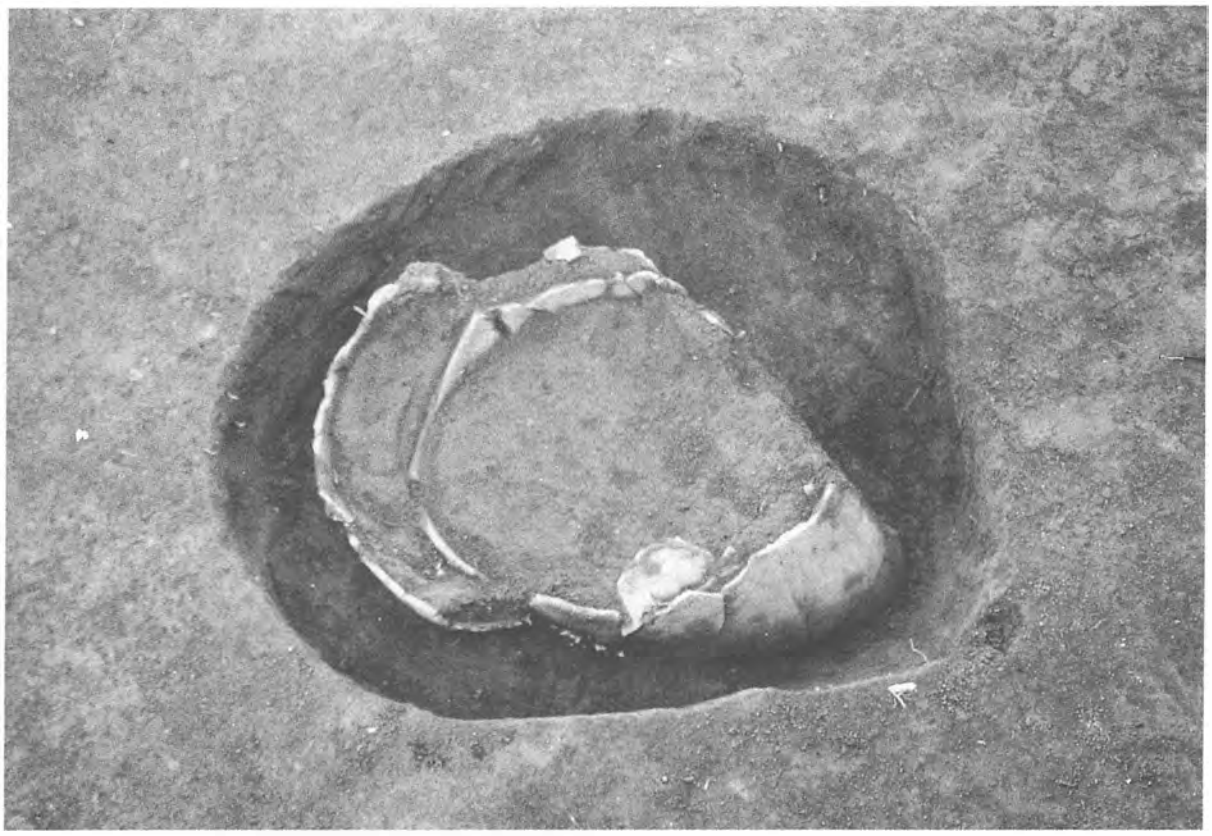


８号甕棺検出状況（西より）

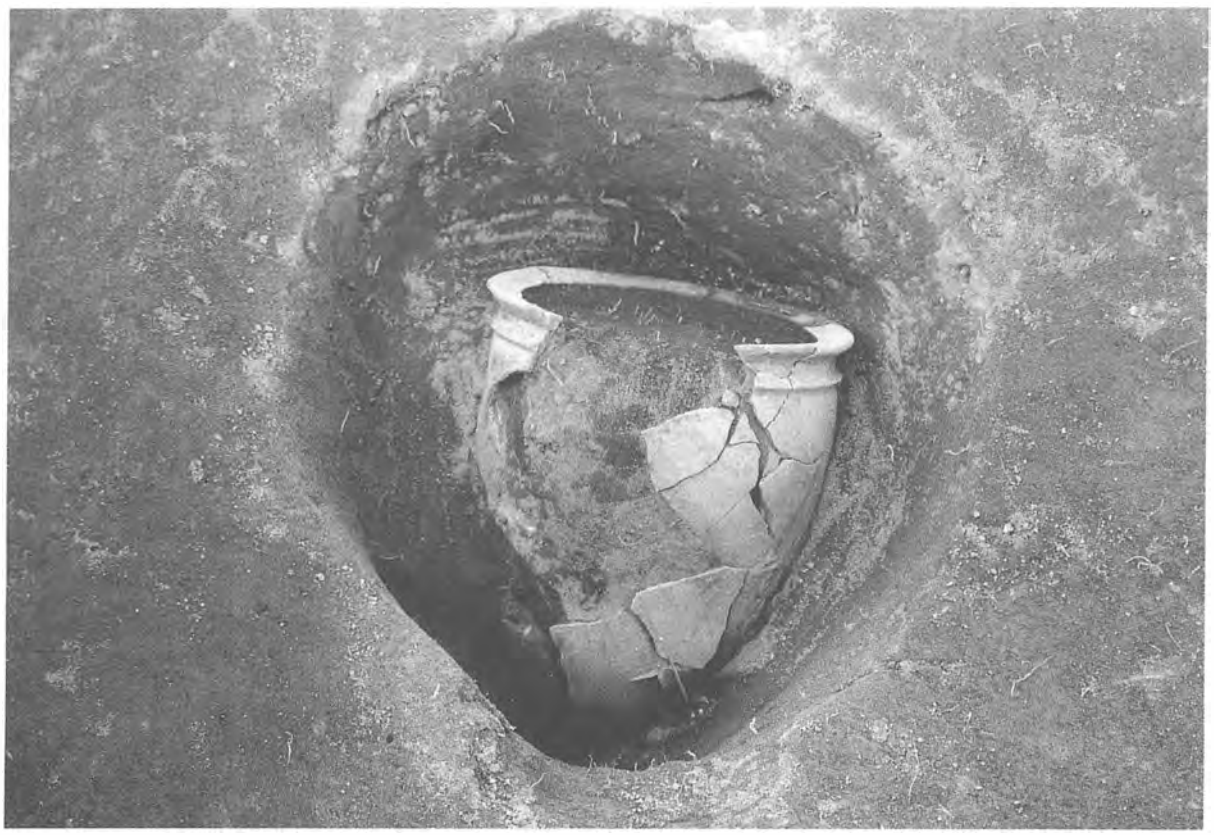
８号甕棺検出状況



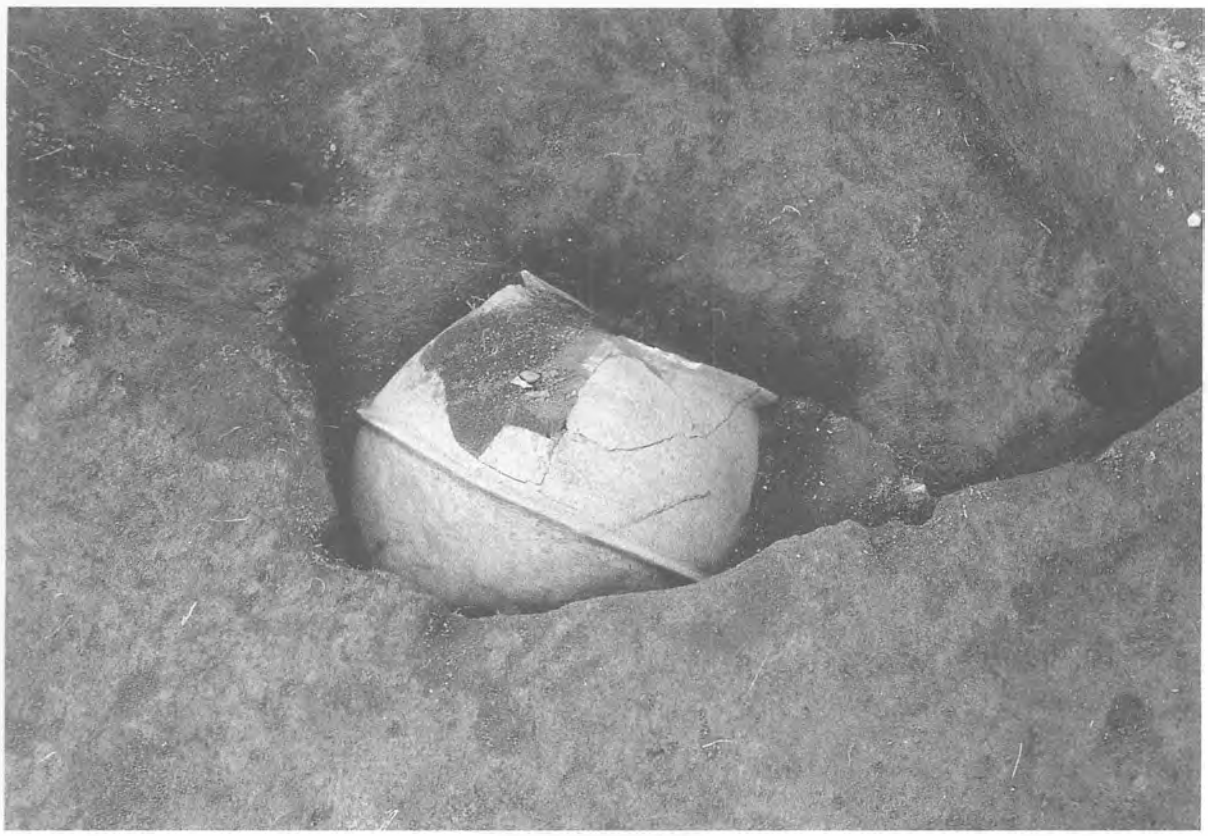
８号甕棺検出（人骨検出状況）



9号甕棺検出状況（南より）



12号甕棺検出状況（東より）

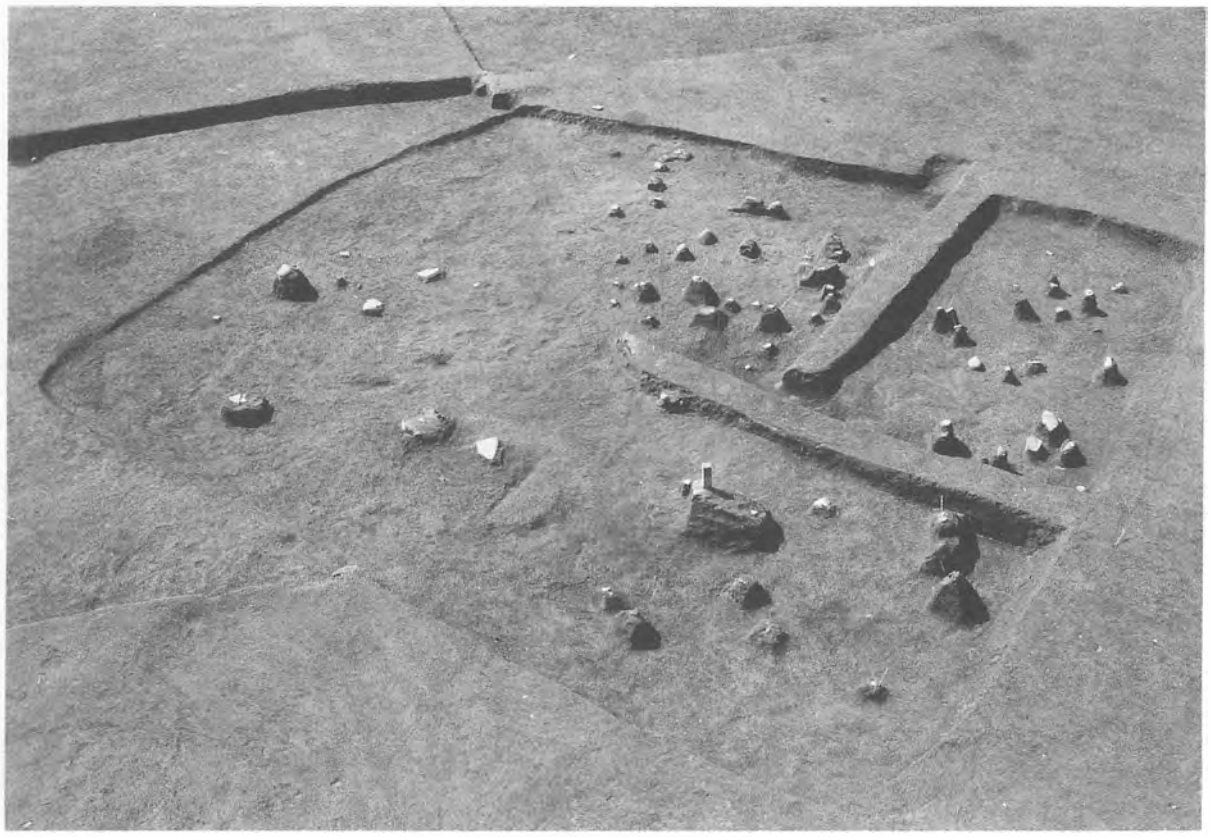


13号甕棺検出状況

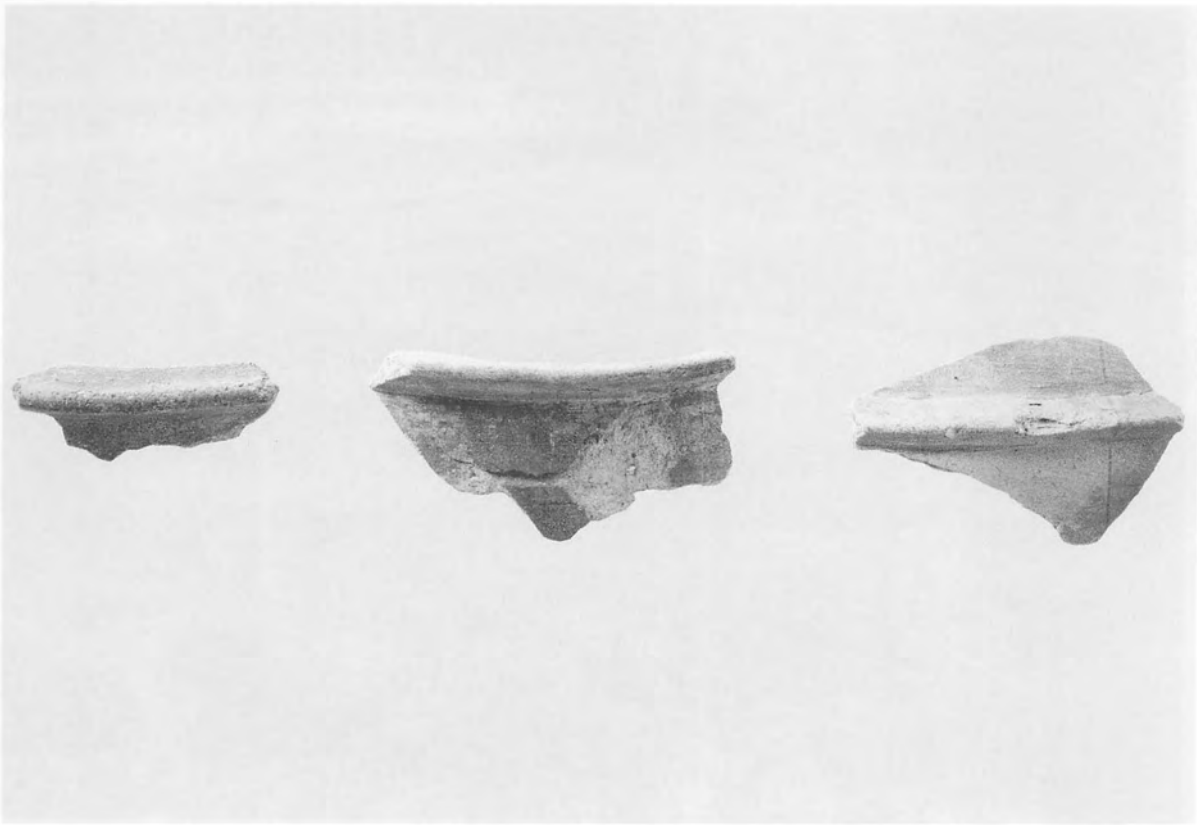
１号墳完掘状況（南より）

1号墳主体部完掘状況（南より）

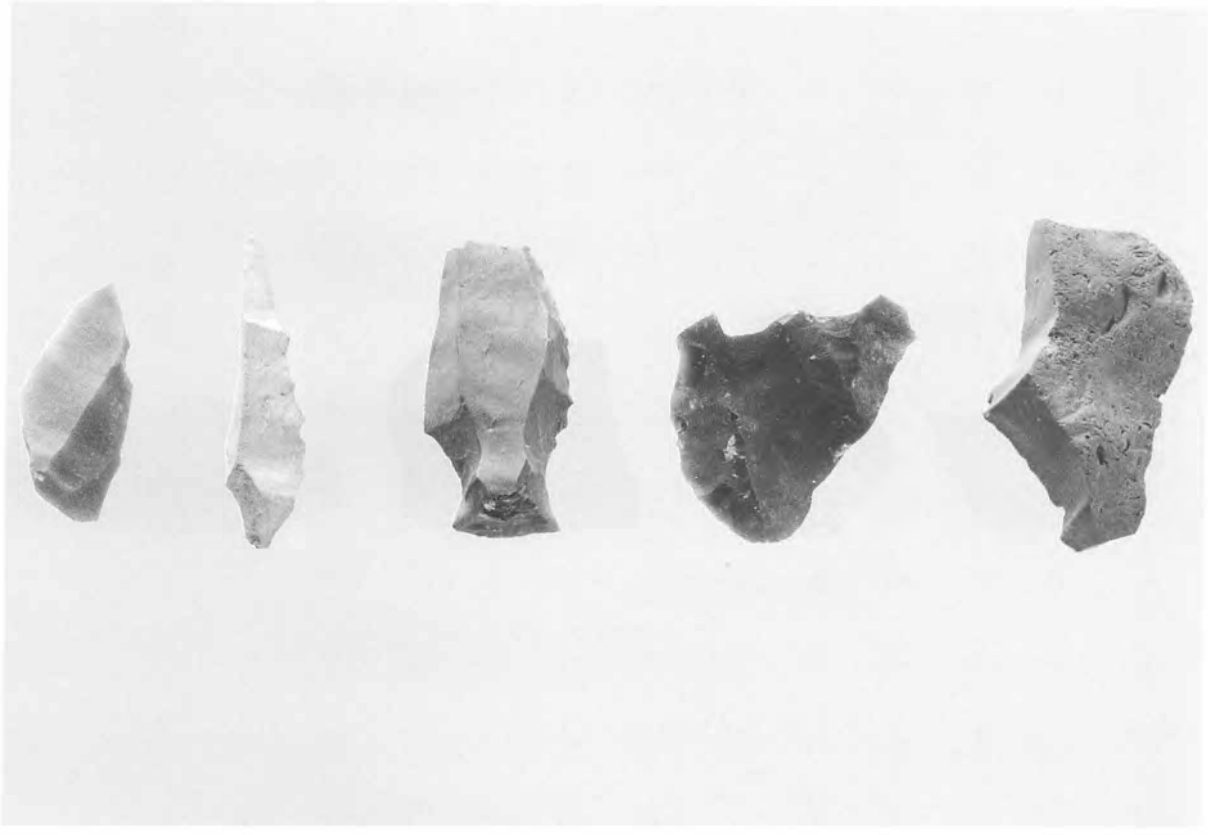
2号墳完掘状況



Ａ区１号住居跡遺物出土状況（東より）

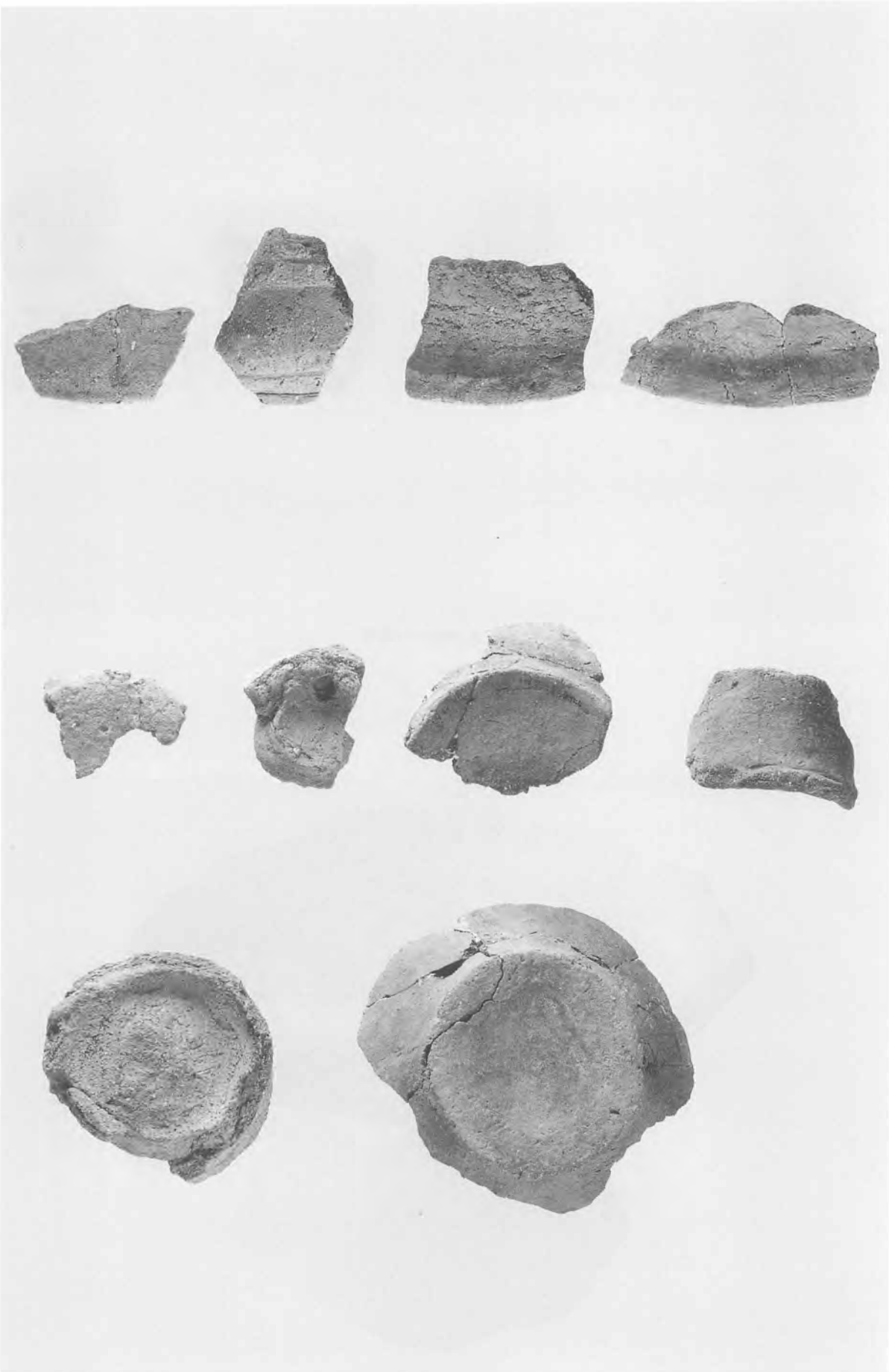


Ａ区１号住居跡出土遺物

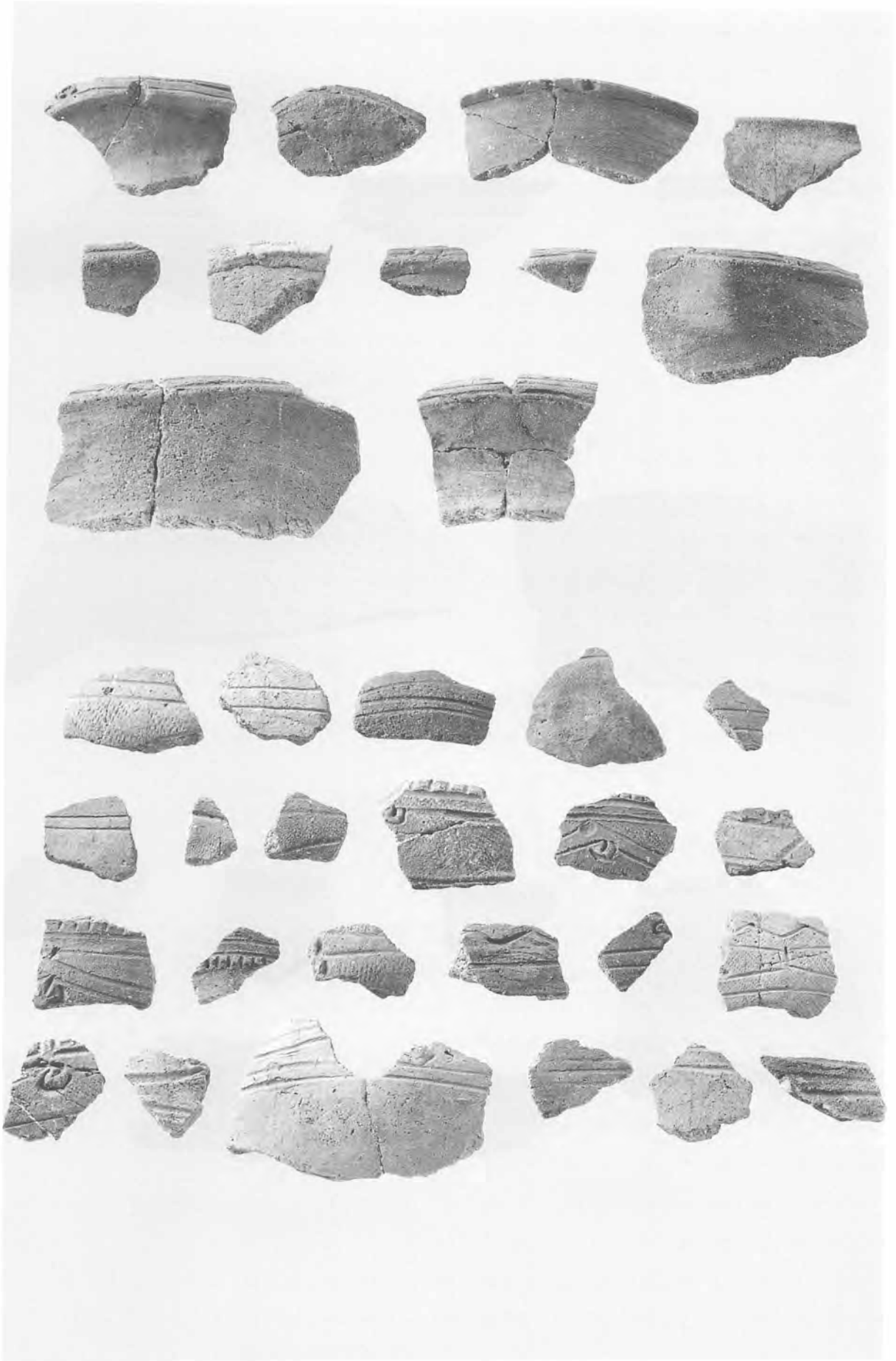


先土器時代の遺物

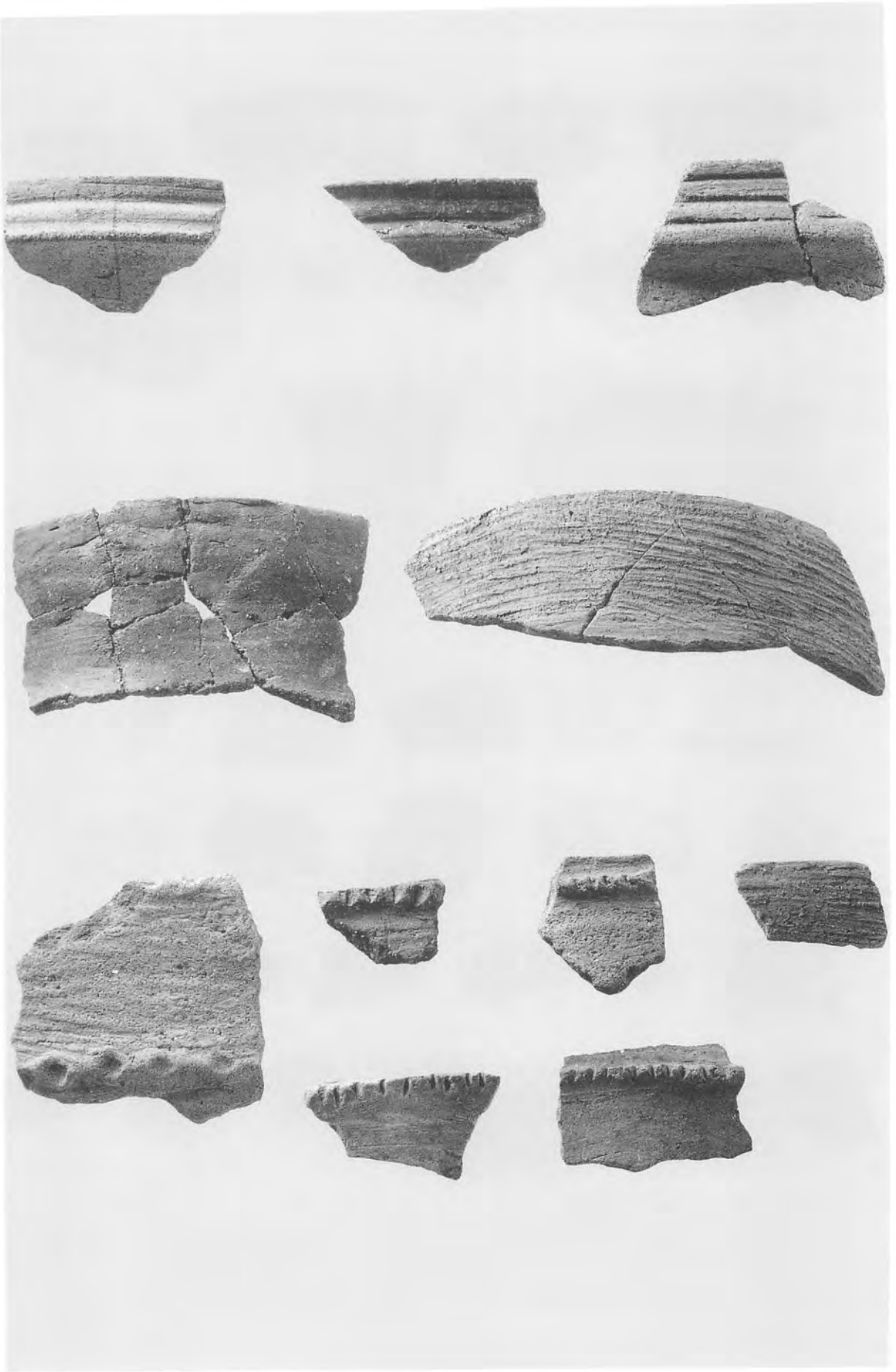
北久根山式土器



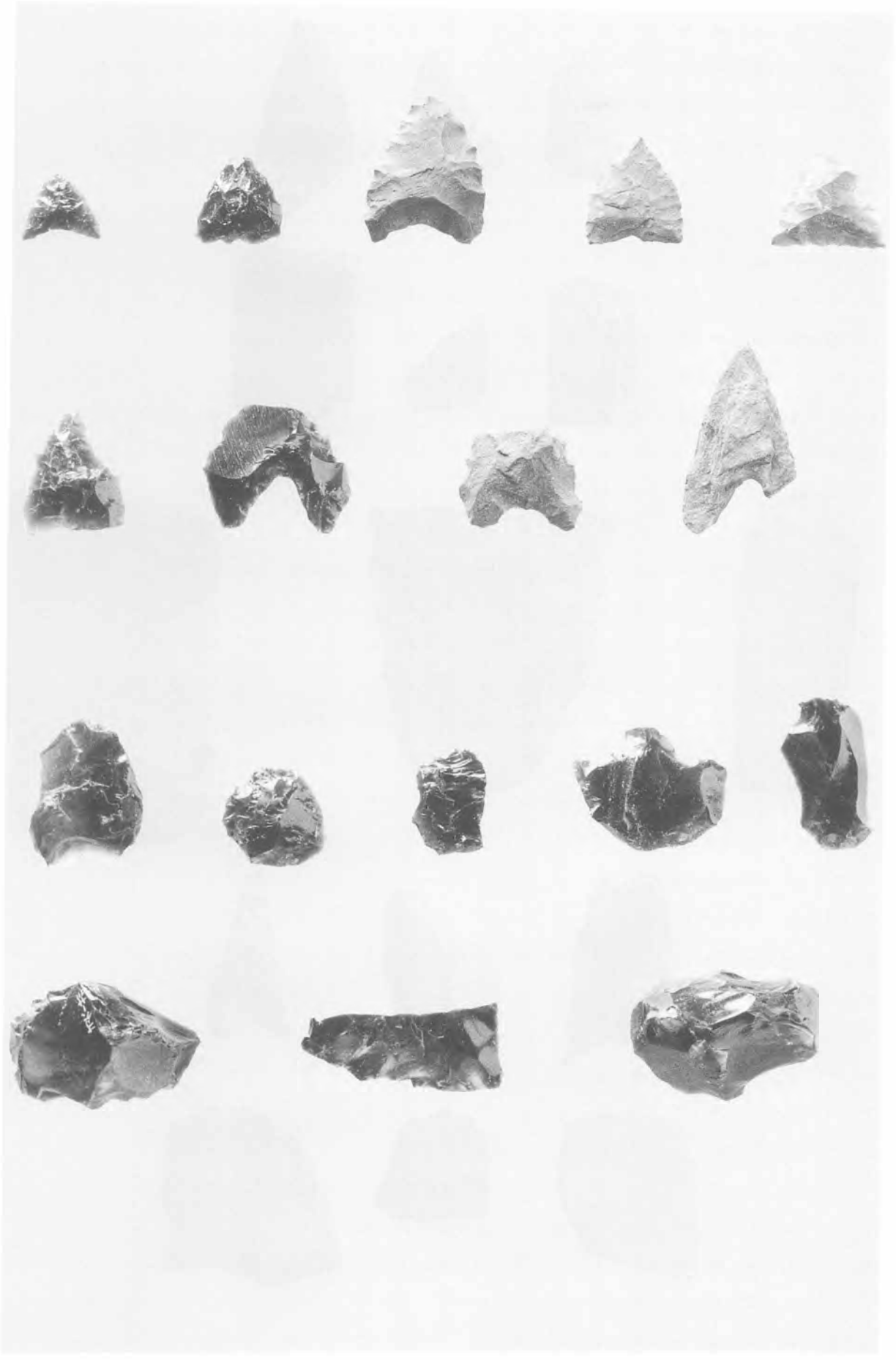
縄文時代後期の土器



縄文時代後期の土器



縄文時代後期～晩期の土器



縄文時代の石器

縄文時代の石器

1号甕棺

4号甕棺

2号甕棺

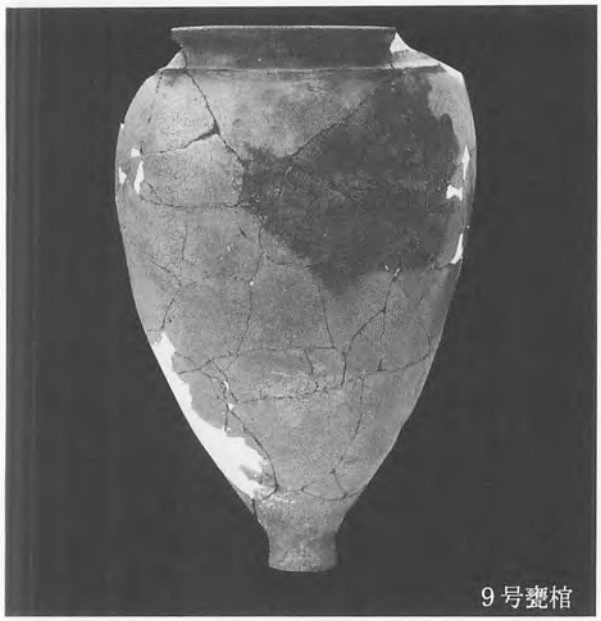
5号甕棺

3号甕棺

6号甕棺

8号甕棺

12号甕棺


9号甕棺

13号甕棺

11号甕棺

15号甕棺

8号甕棺（上）

15号甕棺（上）

１号墳出土土師器

１号墳出土土師器

１号墳出須恵器（瑳）

熊本県文化財調査報告　第149集

竈門寺原遺跡

平成７年３月31日

編集
発行　熊本県教育委員会
〒862　熊本市水前寺６丁目18番１号

印刷　株式会社　城野印刷所
〒861-22　熊本県上益城郡益城町広崎1630-1
☎（096）286-3366

06 教委 教文
② 009

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 149 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：竈門寺原遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日